徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 1

1989. 3

徳 島 市 教 育 委 員 会

序　　文

「水と緑」の潤い溢れた素晴らしい自然環境に育まれた徳島市には、古来、幾千年もの歳月を経て埋まり絶えた文化遺産が数多く散在しております。

近年の諸開発事業の増加は、おびただしい数の発掘調査を生み出しています。徳島市におきましても、貴重な文化遺産の一端を発掘調査する機会に際しては、多大な成果をおさめております。

今回、調査成果の一部を報告書として刊行する運びとなりました。

本書刊行におきましては、埋蔵文化財に対する理解を深めていただくと共に、文化財の保護、保存、活用の一助となれば、幸甚に存じます。

最後に、発掘調査を実施するにあたり、関係者諸氏に多大な御配慮を戴いたことに深く感謝を申し上げます。

平成元年３月31日

徳島市教育委員会

教育長　久　木　吉　春

例　　言

1．本書は、昭和61・62年度の徳島市内の埋蔵文化財包蔵地における諸開発事業に伴う緊急発掘調査の内、2遺跡3件の発掘調査についての概要報告である。

2．本書の対象となった遺跡名・調査地は次の通りである。

遺跡名	所在地 (調査地位置図番号)	申請面積 (調査面積)	調査期間	調査申請者	調査原因
名東遺跡	徳島市名東町1丁目60番地 (1)	2,000m² (1,700m²)	自：61．8．1 至：61．11．20	株式会社ゲンボク	住宅開発
名東遺跡	徳島市名東町2丁目27,157,523番地 (2)	1,025m² (720m²)	自：61．6．16 至：62．9．12	徳島市	下水道建設
矢野遺跡	徳島市国府町矢野よつまた555－1 (3)	135m² (133m²)	自：63．1．11 至：63．2．29	徳島市	市道建設

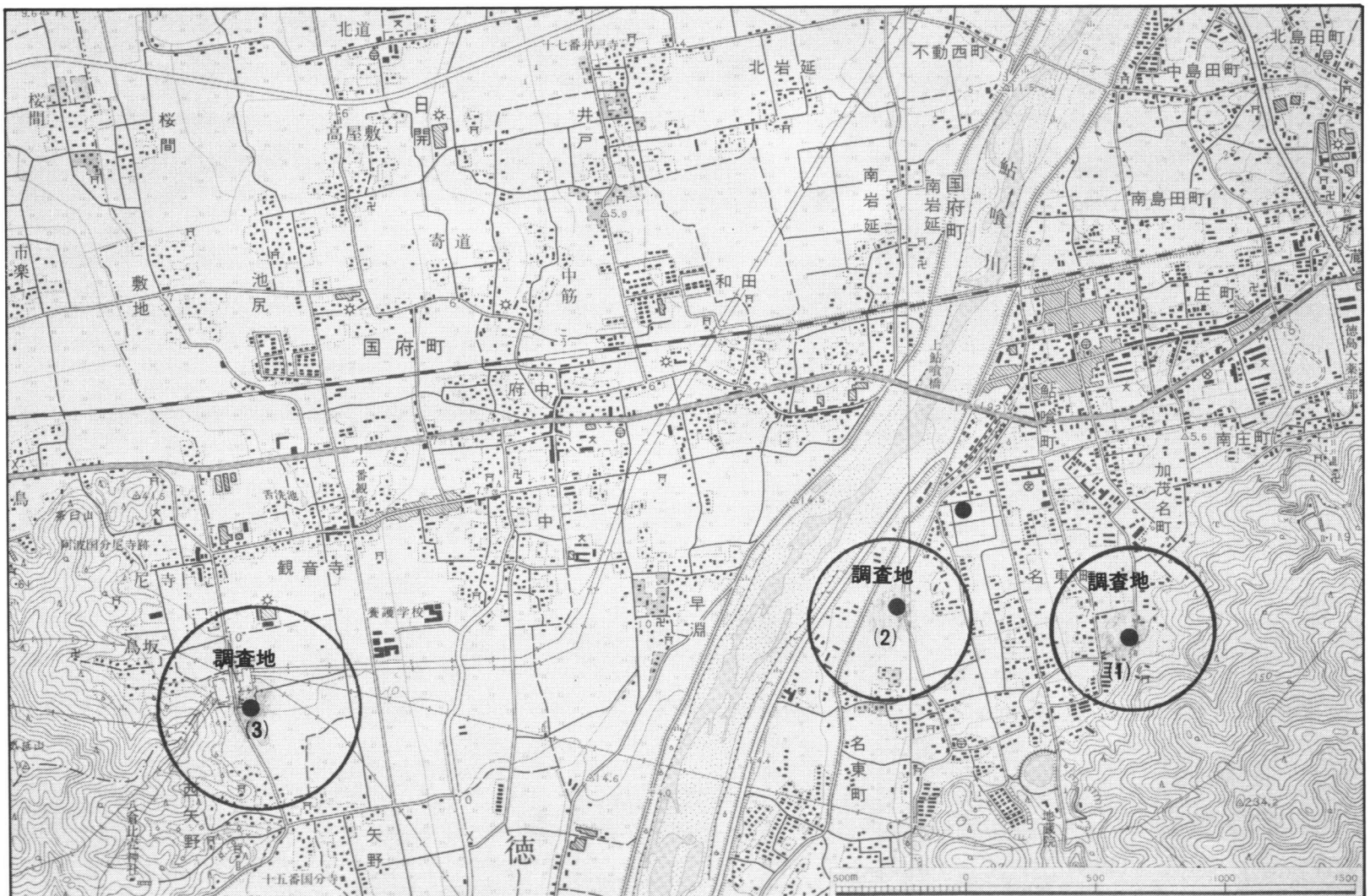
3．発掘調査は、徳島市教育委員会が主体となり、本書に係る経費は徳島市教育委員会が負担した。

4．本書は、徳島市教育委員会社会教育課主事勝浦康守を編集責任者とし、執筆は、同課主任一山典、主事三宅良明が行い、本文目次欄に担当を明記した。

5．出土遺物、図面、写真等の整理、報告書作成に係る作業は、一山、三宅、勝浦が行った。このほかに、資料の整理には、多くの調査員並びに調査補助員の支援を得た。

6．発掘調査に伴う日誌、図面、写真、台帳、出土遺物は徳島市教育委員会が保管する。

7．発掘調査を実施するにあたり、調査申請者をはじめ、多数の関係者諸氏に多大な配慮をいただいたことを記し、ここに謝意を表する。



調査地位置図（国土地理院発行２万５千分の１図幅「徳島」、「石井」使用）
調査地番号は前頁調査地表の番号と同。

目　　次

序　文

例　言

本文目次

第Ⅰ章　遺跡の立地と歴史的環境

1．名　東　遺　跡……（勝浦　康守）……1

2．矢　野　遺　跡……（一山　　典）……2

第Ⅱ章　住宅開発に伴う名東遺跡発掘調査概要　－名東町１丁目60番地－……（勝浦）

1．調査に至る経緯と経過……7

2．調　査　概　要……7

3．検出遺構・出土遺物……7

4．小　　結……21

写　真　図　版……25

第Ⅲ章　名東西都市下水路築造工事に伴う名東遺跡発掘調査概要……（勝浦）

1．調査に至る経緯と経過……33

2．基　本　層　序……33

3．検出遺構・出土遺物……39

4．小　　結……56

写　真　図　版……59

第Ⅳ章　市道よつまた・せんだの木線改良工事に伴う矢野遺跡発掘調査概要

……（三宅　良明）

1．調査に至る経緯と経過……75

2．調 査 の 概 要……76

3．小　　結……85

写　真　図　版……87

挿　図　目　次

第Ⅰ章

第１図　徳島市遺跡分布図

第Ⅱ章

第１図　調査地概略図

第２図　遺構配置図

第３図　掘立柱建物ＳＢ02

第４図　Pit 01（１・３・４・７～9・16），Pit 02（２），Pit 03（５），Pit 04（６），Pit 05（10），Pit 06（11），Pit07（14），Pit 09（12），Pit 10（13），Pit 11（15）出土遺物

第５図　Pit 08（７），溝ＳＤ01（18～27）出土遺物

第６図　井戸ＳＥ01（28～34）出土遺物

第７図　井戸ＳＥ01（35～47）出土遺物

第８図　土壙ＳＫ08（54），ＳＫ09（48），ＳＫ12（56），不明遺構SX01（49・58～60），ＳＸ02（61）出土遺物

第９図　出土遺物（62～64）

第Ⅲ章

第１図　調査地概略図

第２図　調査地Ⅰ～Ⅶ区断面土層模式図

第３図　調査地Ⅰ区遺構配置図・断面土層模式図

第４図　調査地Ⅱ区遺構配置図・断面土層模式図

第５図　調査地Ⅲ区遺構配置図・断面土層模式図

第６図　調査地Ⅳ区遺構配置図・断面土層模式図

第７図　井戸ＳＥ01（１）・溝ＳＤ02（２～11）出土遺物

第８図　溝ＳＤ02（12～22）出土遺物

第９図　溝ＳＤ03（23・24）出土遺物

第10図　調査地Ⅴ区遺構配置図・断面土層模式図

第11図　溝ＳＤ05上層（25～31）出土遺物

第12図　溝ＳＤ05上層（32～36）出土遺物

第13図　溝ＳＤ05上層（37～41）出土遺物

第14図　溝ＳＤ05上層（42～55）出土遺物

第15図　溝ＳＤ05下層（56・57）出土遺物

第16図　調査地Ⅶ区遺構配置図・断面土層模式図

第17図　方形周溝墓ＳＸ04（58～62）出土遺物

第Ⅳ章

第１図　調査区位置図

第２図　遺構配置図

第３図　ＳＢ01・ＳＢ02実測図

第４図　ＳＢ03実測図

第５図　ＳＢ03出土土器実測図

第６図　ＳＢ04実測図

第７図　ＳＫ01実測図

第８図　ＳＫ01出土土器実測図

第９図　ＳＫ07実測図

第10図　ＳＫ07出土土器実測図

第11図　ＳＤ01出土土器実測図

第12図　包含層出土土器実測図

写　真　図　版

第II章

図版 1　検出遺構
上：掘立柱建物ＳＢ01・02
下：掘立柱建物ＳＢ05

図版 2　検出遺構
上：溝ＳＤ01
下：不明遺構ＳＸ01
出土遺物

図版 3　検出遺構
上：井戸ＳＥ01
下：井戸ＳＥ01

図版 4　検出遺構
上：弥生土器検出状況
下：弥生土器検出状況

図版 5　出土遺物
上：Pit01（3・16），Pit 03(5)，Pit 04（6），Pit 08（17）
下：不明遺構ＳＸ01（58～60），不明遺構ＳＸ 02（61）

図版 6　出土遺物
上：溝ＳＤ01（19・20・22・23・25～27）
下：井戸ＳＥ01（28～31・37・38・41～43・45・47）

図版 7　出土遺物
溝ＳＤ01（24），井戸ＳＥ01(33～36・39・40)

図版 8　出土遺物
Pit 09（12），土壙ＳＫ10（50），ＳＫ11（51・52），弥生土器（62～64）

第III章

図版 1　検出遺構
上：調査地Ｉ区全景
下：調査地Ｉ区断面土層

図版 2　検出遺構
上：調査地II区全景
下：調査地II区旧河道部断面土層

図版 3　検出遺構
上：調査地III区全景
下：調査地IV区全景

図版 4　検出遺構
上：調査地Ｖ区全景
下：溝ＳＤ05断面土層

図版 5　検出遺構
上：溝ＳＤ05上層土器出土状況
下：溝ＳＤ05上層土器出土状況

図版 6　検出遺構
上：溝ＳＤ05下層土器出土状況
下：溝ＳＤ05下層土器出土状況

図版 7　検出遺構
上：調査地VII区北半全景
下：調査地VII区南半全景

図版 8　検出遺構
上：方形周溝墓ＳＸ04土器出土状況
下：方形周溝墓ＳＸ04土器出土状

況
図版 9　検出遺構
上：方形周溝墓ＳＸ04土器出土状況
下：方形周溝墓ＳＸ04土器出土状況
図版10　検出遺構
上：調査地Ⅷ区北半全景
下：調査地Ⅷ区南半全景
図版11　出土遺物
溝ＳＤ02（１～６・８～10）
図版12　出土遺物
溝ＳＤ02（11～14・16～20）
図版13　出土遺物
溝ＳＤ05上層（30～32・35・47・49・50・53・55）
図版14　出土遺物
溝ＳＤ05上層（34・36・41・42），下層（56・57）
図版15　出土遺物
溝ＳＤ03（23・24），方形周溝墓ＳＸ04（58～62）
第Ⅳ章
図版１　上：調査地点遠景
下：層序（Ｄ区トレンチ南壁）
図版２　検出遺構
上：Ｉ区全景
下：Ｉ区全景
図版３　検出遺構
上：ＳＢ01・ＳＢ02検出状況
下：ＳＢ01・ＳＢ02埋土土層断面
図版４　検出遺構
上：ＳＢ03炭化材検出状況
下：ＳＢ03炭化材検出状況
図版５　検出遺構
上：ＳＢ03甕出土状況
下：ＳＢ03甕出土状況
図版６　検出遺構
上：ＳＢ03鉢出土状況
下：ＳＢ03高坏出土状況
図版７　検出遺構
上：ＳＢ03検出状況
下：ＳＢ04検出状況
図版８　検出遺構
上：ＳＫ01検出状況
下：ＳＫ01完掘状況
図版９　検出遺構
上：ＳＫ07土器出土状況
下：ＳＫ07土器出土状況
図版10　検出遺構
上：ＳＫ07完掘状況
下：Ｌ区南壁壺出土状況
図版11　検出遺構
上：ＳＤ01検出状況
下：Ⅱ区全景
図版12　出土遺物
図版13　出土遺物
図版14　出土遺物

第 I 章

遺跡の立地と歴史的環境

1．名 東 遺 跡（第1図）

名東遺跡は徳島市名東町に所在し、吉野川の一支流である鮎喰川水系の旧河川が形成した沖積微高地上に位置する縄文時代晩期～江戸時代に至る複合遺跡である。

近年の発掘調査の成果により、周辺部の歴史が縄文時代晩期にまで遡り得ることが明確となっている。

弥生時代においては、集落の中核的存在を成す住居跡等の生活諸遺構の時間的・空間的拡がりは、現段階では明確でない。しかしながら、最近の発掘調査では、方形周溝墓の検出例が著しく、当時の墓制、祭祀形態、墓域空間の拡がりが捉えられようとしている。また、昭和62～63年の名東町２丁目・天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査における、扁平鈕式６区画袈裟襷文銅鐸の発見はまだ記憶に新しい。

古墳時代には、名東遺跡を眼下に望む標高 130ｍの眉山丘陵尾根上に、全長60ｍ、前方部幅15ｍ、後円部径30ｍの積石塚の前方後円墳としては全国一の規模を誇る八人塚古墳をはじめ、節句山１・２号墳、さらに、後期古墳の代表とされる穴不動古墳など「名東古墳群」と称される古墳群が造営される。これら古墳群の築造集団の平地部での活動展開は，名東遺跡では把握されず、今後の調査に期待されるところである。

奈良時代以降、名東廃寺・名東郡衙が知られているが、これらは文献資料に記載されておらず、考古学的に命名されている寺院跡・郡衙跡である。その所在及び性格に関しては、不明瞭である。また、昭和61年、名東町大浦において密教法具の鋳型が発見されている。

文献資料における「名東」という地名は、『延喜式』の「民部式（九條本）」に、阿波國九郡の一郡としての「名東」（ナヒムカシ）が見られる。さらに、『類聚三代格』巻第七・郡司事には、「太政官符。應下省二名東郡主帳一員一置中名西郡一叉。古得二阿波國解一偁。名西郡司解偁。名東名西二箇郡元爲二一郡一之時置二件職二員一。而依二太政官去寛平八年九月五日符旨一。分爲二兩郡一。七箇郷爲二名東郡一。……昌泰元年七月十七日。」とあり、寛平八年（898年）九月五日の名東郡設置の記事が見られる。この『類聚三代格』においては、「名東」を（ナカタノヒガシ）としていることから、『和名類聚抄』巻第九・阿波國第百二十一の「名方東郡」に地名としての初見を求めることができる。また、平安

時代末期、三条実房の日記である『愚昧記』・仁安二年冬巻裏文書の「久安二年七月十一日、問註河人成俊等申詞記」の守房の詞に、「以成俊申詞問守房之処、申伝…焼失之在家二宇カ宅主ハ名東御庄寄人也、依逃去、其内財物為自彼御庄沙汰、運置他所之後，為成俊被焼失候也ト申」とあり、名東地域は郡名を庄とする広域庄園とされた。しかも、『高山寺文書』・安楽寿院領等庄園目録案に「阿波国名東」とあり、「名東庄」は院の御領とされる。

「名東庄」の存続期間については釈然としないが、『安楽寿院古文書』「庄々所済日記」康和二年十月二十一日に「名東<米二百八十三石九斗、檜皮三百五十、田百五丁二反廿一日立券>」の立券記事が見られ、以後、『三木文書』の「義興譲状」正平二十五年四月二十六日には、「ゆつりわたす阿波国名東庄内十四条郷御領職事」とあり，当庄の領家職は分割されて在地武士の所有領となっていたとされるが、南北朝動乱期に至ってもなお庄園として存立していたとされる（註１）。

昭和63年、名東町２丁目・県営名東団地建替工事に伴う発掘調査（第４次）では、調査地周辺が庄園遺跡としての性格を有するとの報告がある（註２）。

近年、名東地域は諸開発事業による景観変化が著しく進んでいるが、現在においても水田耕作地が広くみられ、中・近世以降の農村集落的な様相をとどめている。

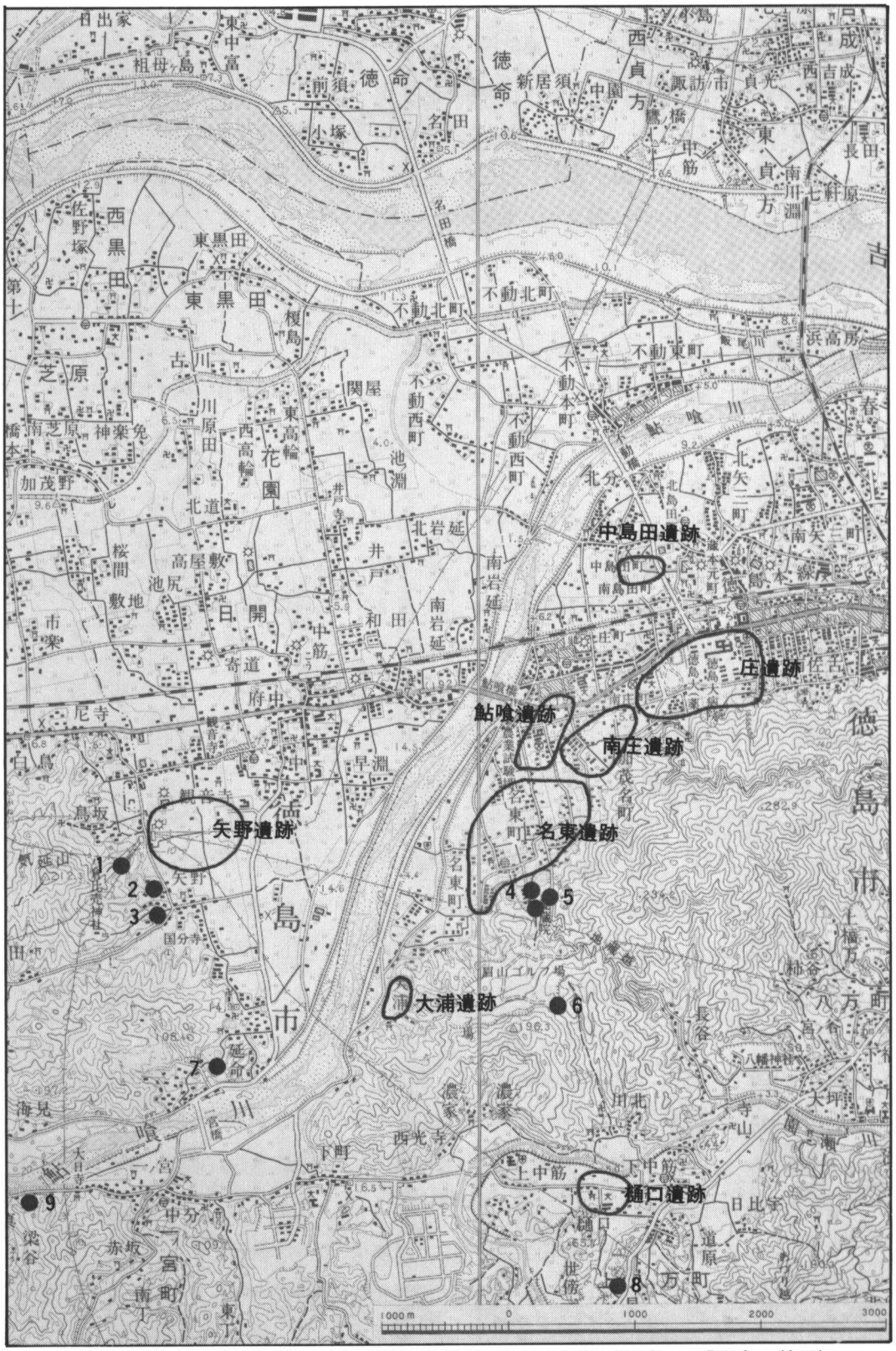
２．矢　野　遺　跡　（第１図）

矢野遺跡は徳島市国府町矢野字溝添の四国電力国府変電所を中心に展開し、吉野川の一支流である鮎喰川の旧河川により形成された海抜約10ｍ前後の沖積微高地上に立地し、鮎喰川水系文化圏を構成する弥生時代～平安時代に至る複合遺跡であり、四国電力の国府変電所地区及びその周辺部（よつまた地区）と国府養護学校地区（矢野松木遺跡）で緊急調査が実施されている。

国府変電所地区及び周辺部で検出された弥生時代の竪穴住居跡等の生活諸遺構については，矢野遺跡の集落構成の中心を成すものであり、現状では出土遺物等より弥生時代前期後半（中期中心）以降に比定され、南北に長い集落の存在が想定される。なお、国府変電所の北北東約 500ｍに位置し、弥生時代中期の竪穴住居跡等が検出されている国府養護学校地区との空間的拡がり（同一遺跡として把握するかどうか）については、現段階では不明確である。

古墳時代には、国府変電所地区に竪穴住居跡の一部などが確認されている程度であり、今後の調査成果が期待される。

歴史時代（奈良時代以降）には、国府変電所地区の西端では、国分寺と国分尼寺を結ん



第１図　徳島市遺跡分布図（国土地理院発行５万分の１図幅「徳島」、「川島」使用）

１．奥谷２号墳　２．奥谷１号墳　３．宮谷古墳　４．節句山古墳群　５．穴不動古墳　６．八人塚古墳　７．源田銅鐸・銅剣出土地　８．星河内美田銅鐸出土地　９．安都真銅鐸出土地

だ道路の可能性を有する遺構なども検出されている。

「矢野」の地名は、戦国期の天文21年（1552年）11月７日の吉野川流域に点在する19寺院の修験者が喧嘩口論の停止等の７ケ条の法度を定めた『念行者修験道定文』に「矢野千秋房」という寺院名にみられるのが初見とされる（註３）。また、国府変電所の南西側の丘陵先端部に位置する中世の城郭である矢野城跡は矢野氏の居城とされており、地名等の起源もそのへんに存在すると思われる。

なお、矢野丘陵の歴史的背景を考える上からも，鮎喰川西岸を中心とした沖積平野及び周辺丘陵の主要な遺跡について概略的にみておきたい。

縄文時代には、鮎喰川東岸の南佐古浄水場遺跡（三谷遺跡）・庄遺跡－蔵本団地地区－等から後期の土器片、南庄遺跡・名東遺跡－天理教国名大教会地区－・庄遺跡－南佐古・鮎喰線地区－等から晩期の土器片が検出されている程度であり、鮎喰川西岸においては、現状では、該時代の明瞭な遺構・遺物は発見されていない。

弥生時代の重要な遺跡として、農耕祭祀との関連が強いといわれる銅鐸・銅剣出土地の源田遺跡があり、国府変電所の南約 1.7kmの溜池西岸の傾斜面で、海抜約30ｍに立地し、６区画袈裟襷文銅鐸３個と中細形銅剣１口が伴出している。

古墳時代になると、鮎喰川東岸の南庄遺跡－南庄・南佐古線地区－や庄遺跡－南庄町４丁目地区－・鮎喰遺跡等で竪穴住居跡等が確認されているが、集落の時間的・空間的拡がりについては、今後の調査の成果が待たれる。

古墳については、沖積平野上に立地する古墳は現状では皆無であり、平野部に続く丘陵一帯に多数築造されている。鮎喰川西岸では、国府町西矢野の気延山古墳群の中心的古墳としての奥谷１・２号墳、宮谷古墳、矢野古墳（県指定史跡）などが築造されている。

奥谷１号墳は全長約50ｍの前方後方墳で、内部主体については不明であるが、裾部に埴輪列を有し、墳丘の形態や埴輪の製作年代（川西分類II期）などにより、４世紀後半に比定され、八人塚古墳に後続するものと考えられている（註４）。

奥谷２号墳は気延山の東方、海抜約120ｍの尾根上に立地する全長約18ｍの積石塚で、前方後円墳の形状を呈し、内部主体には竪穴式石室２・箱式石棺１があり、墳丘の形態・竪穴式石室の構造及び出土遺物などにより４世紀前半の年代が比定され、奥谷１号墳に先行するものと思われる（註５）。

宮谷古墳は全長約40ｍの前方後円墳で，開墾のため後円部が一部削平され、内部主体・出土遺物ともに不明であるが、４世紀後半から５世紀初頭の年代が与えられている(註６。)

矢野古墳は平野部との比高差約10mの直径約15m・高さ約3mの円墳で、内部主体は約30mの両袖を有する全長約8mの横穴式石室であり、6世紀末～7世紀初頭の年代が比定され、穴不動古墳より若干古く位置づけられる（註7）。

歴史時代になると、鮎喰川下流域西岸一帯を中心に、阿波国分寺跡・阿波国府跡・阿波国分尼寺跡（石井町）などが展開する。

阿波国分寺跡は国府変電所の南約 800mの海抜約11m前後に立地する四国霊場第15番札所の現国分寺を中心に展開し、昭和53年度からの3次にわたる発掘調査等により寺域の東・西・南・北限の一部確認、中心伽藍の一部などが検出されている（註8）。

阿波国分尼寺跡は国府変電所の北北西約 500mの海抜約10m前後に立地している。昭和45・46年度の発掘調査により、金堂・北門・築地・溝等の遺構が検出され、寺域は 158m(天平尺1町半)四方で、伽藍中軸線は真北から西へ約11度ふれ、条里地割とほぼ一致し、金堂跡は東西（桁行）約28m・南北（梁行）約18mで、凝灰岩の敷石や地覆石の地盤の一部などが検出されている（註9）。

阿波国府跡は国府変電所の北東約 1.3kmの海抜約7m前後の沖積微高地上に立地する「大御和神社」を中心に展開したといわれ、昭和57年度より継続調査が実施されているが、最近の調査により、平安時代以降に比定される大規模な掘立柱建物・溝・塀・井戸等の遺構とともに石帯や「政所」の墨書土器（土師器皿）・緑釉陶器等の出土遺物が検出され、大御和神社より更に西方（国府変電所より北東約 600m付近に阿波国府の国衙等が展開していた可能性を有しており、注目されている。(註10)。

（註）

註1．「角川日本地名大事典」編纂委員会『角川日本地名大事典』36、徳島県、東京、1986年。

註2．徳島県教育委員会『名東遺跡（天神地区）現地説明会資料』1988年。

註3．註1に同。

註4．天羽　利夫「阿波忌部の考古学的研究」、『徳島県博物館紀要』、第9集、徳島、1978年。

川西　宏幸「円筒埴輪総論」、『考古学雑誌』、第64巻第2号、東京、1978年。

註5．一山　　典「徳島県奥谷2号墳」、『日本考古学年報』33(1980年度版)、東京、1983年。

註6．註4に同

註7．天羽　利夫「終末期の古墳二基－穴不動古墳・矢野の横穴式石室古墳－」、『徳島県

博物館報』No.14、徳島、1972年。

註８．天羽　利夫・一山　　典「第三　阿波国分寺」　『新修国分寺の研究』第５巻　南海道、東京、1987年。

註９．田辺　征夫・松永　住美「第三　阿波　二　国分尼寺」、『新修国分寺の研究』第５巻上　南海道、東京、1987年。

註10．天羽　利夫・一山　　典「第三　阿波　三　国府」、『新修国分寺の研究』第５巻上　南海道、東京、1987年。

徳島市教育委員会編『徳島市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集・阿波国府跡第６次調査概報－1987年度－』、徳島、1988年。

第 II 章

住宅開発に伴う名東遺跡発掘調査概要

—徳島市名東町１丁目60番地—

１．調査に至る経緯と経過（第１図）

調査地は周知の遺跡である「名東遺跡」の南東域に位置し、今回の調査地に西接する地点で、昭和57年度・宅地造成に伴う発掘調査が実施されている。昭和57年度の調査では、弥生時代～江戸時代に至る遺構・遺物が検出されている（註１）。その為，周辺部への拡がりは明確なものとされ、住宅開発を計画した株式会社ゲンボクと徳島市教育委員会との間での協議の結果，開発申請地を全対象とする事前の発掘調査を実施することで合意に至った。徳島市教育委員会は、「名東遺跡発掘調査委員会」（委員長　田中　良平）を組織し調査にあたった。

調査は、現代水田耕土を重機掘削により除去し、以下、人力掘削により進行させた。今回の調査では，現代水田耕土層下約30cmの黄色シルト層上面で弥生時代～江戸時代に至る遺構・遺物を重複して検出している。なお，調査成果の一部は、第７回埋蔵文化財資料展「阿波を掘る」において出土遺物の公開展示を行い、また、『徳島市史だより』に調査成果の一部を紹介している（註２）。

２．調　査　概　要

調査地周辺の標高は、Ｔ．Ｐ＋７ｍを測る。今回の調査では、現代水田耕土層下約30cmの黄色シルト層上面で弥生時代～江戸時代に至る掘立柱建物５棟・柵４基・井戸１基の他、多数の土壙・土壙墓・ピットを検出している。以下、主な遺構・遺物について概略する。

３．検出遺構・出土遺物

ｉ）掘立柱建物（第-2 図）

掘立柱建物ＳＢ01（図版１）

桁行３間・梁行２間の東西棟建物であるが、北西隅柱が検出されておらず、削平の可能性も考えられないとすれば、当初より存在しなかったと思われ、桁行２間・梁行２間の長方形の平面を持つ建物の西妻南側に桁行１間・梁行１間分が付設された建物であるとも考えられる。柱間寸法は、桁行東側より、 2.1・ 2.3・2.2ｍ、 梁行北側より 1.8･2.1ｍで

第1図　調査地概略図

ある。掘形は、径25～30cmの不整円形を呈し、深さは30～40cmである。柱配置・柱間寸法にばらつきが見られる。

掘立柱建物ＳＢ02（図版１）

桁行４間・梁行２間の東西棟建物であるが、南側に２間分だけ柱筋を揃えている柱穴が検出されており、南庇を構成するものと考えられる。柱間寸法は桁行東側より、2.0・2.2・2.1・2.2m、梁行は、2.1m等間である。掘形は径30～50cmの不整長円形もしくは不整円形を呈し、深さは20～40cmである。身舎内部に、桁梁行方向に柱筋を揃えた６個の柱穴が検出されている。身舎内部の間仕切りに関する柱であろうか。柱配置・柱間寸法は、比較的統一性を持つ。掘立柱建物ＳＢ01の梁側柱と柱筋を揃えている（第３図）。

掘立柱建物ＳＢ03

調査地区内で、桁行１間・梁行２間を検出しており、西側へ広がる東西棟建物であろう。柱間寸法は桁行 1.6m、梁行は、1.8m等間である。掘形は径20～30cmの不整円形で深さは10～20cmである。

掘立柱建物ＳＢ04

桁行３間・梁行２間の東西棟建物であるが、東側妻柱が検出されず桁行２間・梁行２間の正方形を呈する建物の東側に１間×１間が付設された建物であろうか。柱間寸法は桁行東側より、2.5・2.1・2.1m、梁行北側より 2.1・1.8m である。掘形は径20～30cmの不整円形であり、深さは10～20cmである。

掘立柱建物ＳＢ05（図版１）

桁行４間・梁行２間の東西棟建物である。柱間寸法は桁行東側より、3.6・2.0・2.1・2.3m、梁行北側より 2.2・2.1m である。掘形は径30～40cmの不整円形である、深さは15～20cmである。身舎柱列、東側より１間分の柱間隔が過大である。身舎内部の空間使用法によるものであろうか。柱配置・柱間寸法のばらつきが甚だしく極めて精度の低い建物である。

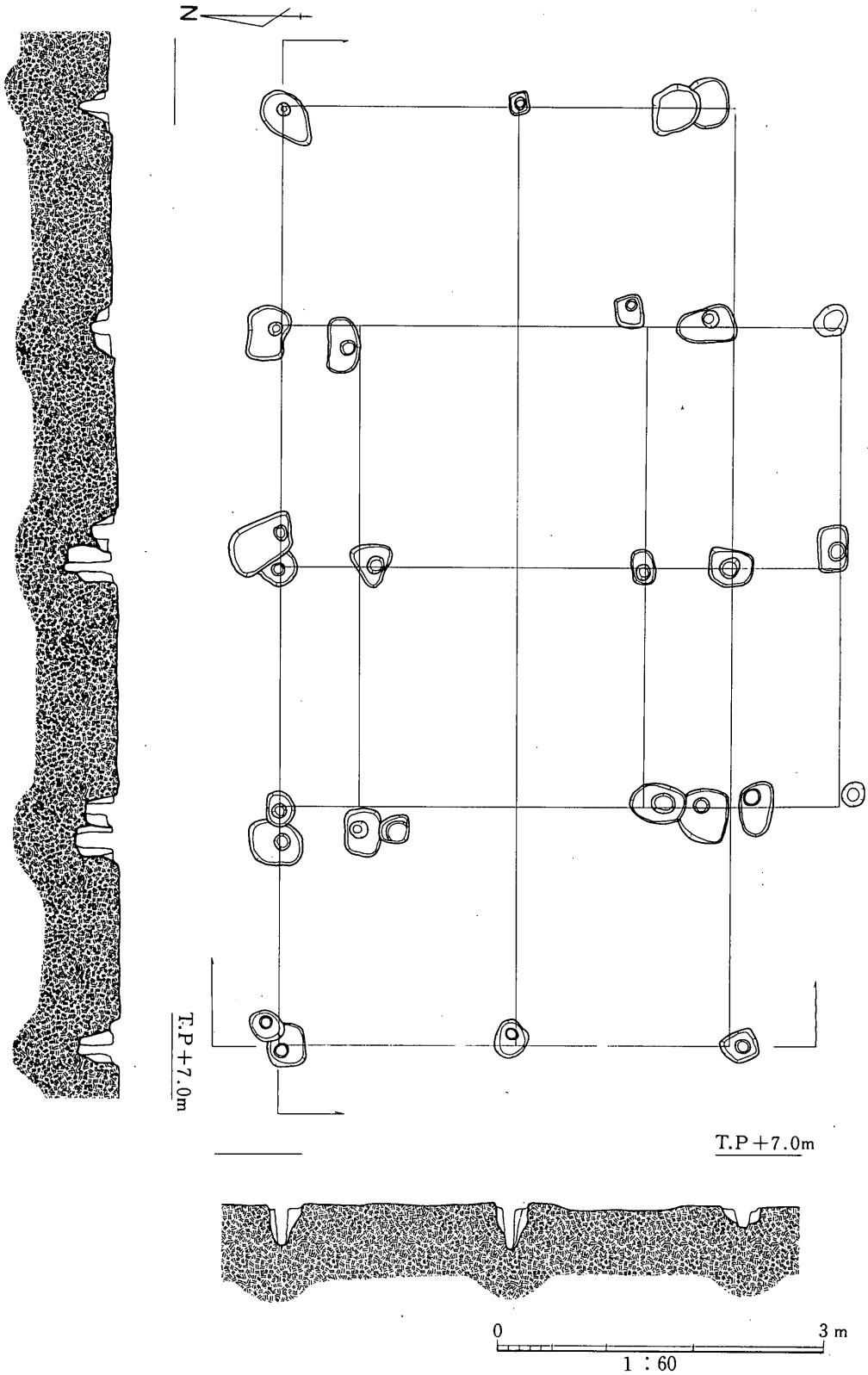
ii）**柵**（第２図）

柵ＳＡ01

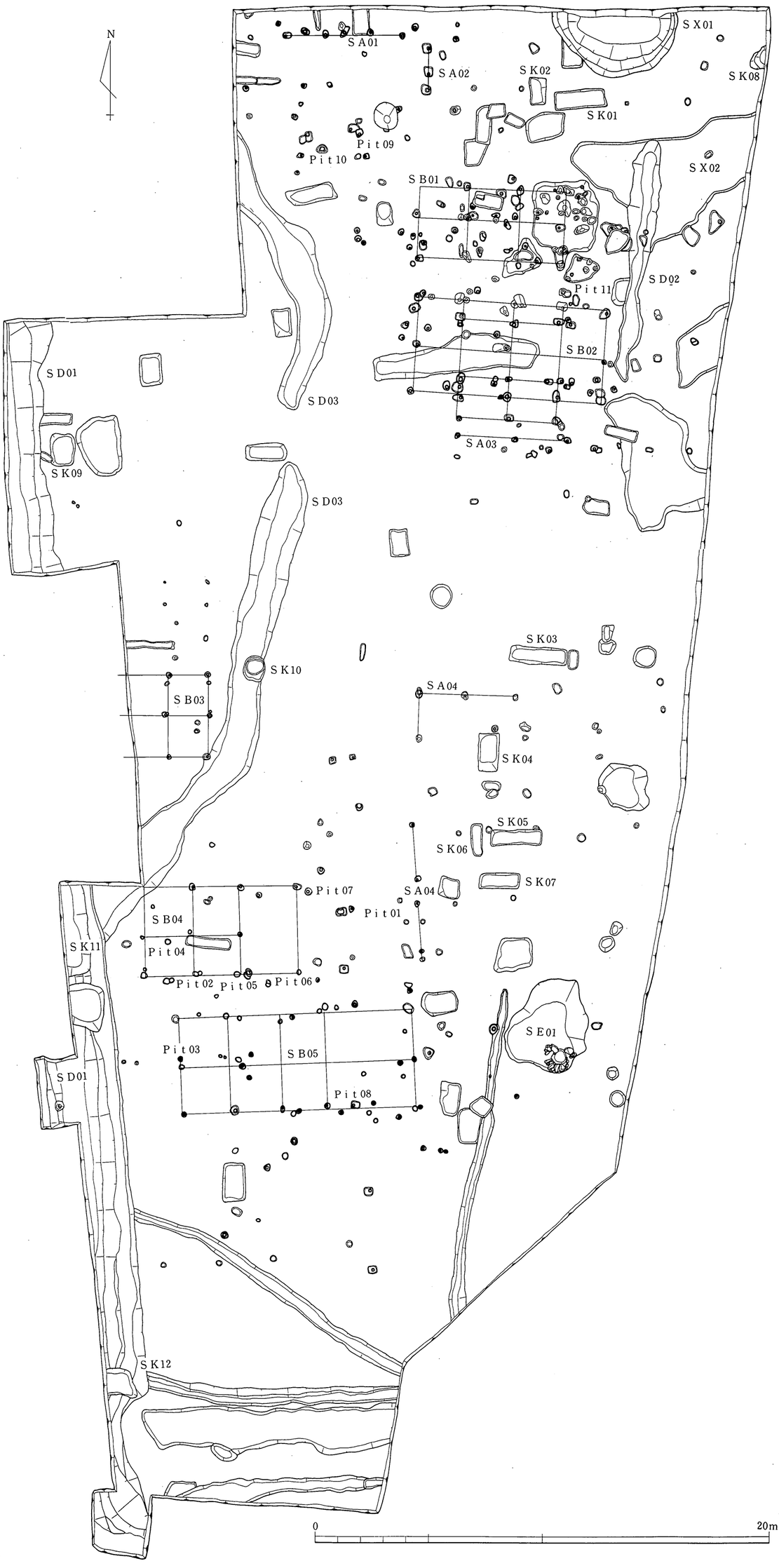
３間分が検出された。掘形は径30～40cmの不整円形であり、深さは10～20cmである。柱間寸法は東側より、2.0・2.1・2.1m である。北側へ伸びて建物になる可能性がある。

柵ＳＡ02

２間分が検出された。柱間寸法は北側より、1.2・0.7m である。掘形は一辺40cmの長方形を呈し、深さは20cmである。



第3図　掘立柱建物ＳＢ02


N
SA01
SA02
SK02
SX01
SK08
SK01
Pit09
Pit10
SB01
SX02
SD02
Pit11
SB02
SD01
SD03
SA03
SK09
SD03
SK03
SK10
SA04
SB03
SK04
SK05
SK06
SK07
Pit07
SA04
Pit01
SB04
SK11
Pit04
Pit02
Pit05
Pit06
SE01
Pit03
SB05
SD01
Pit08
SK12
0
20m

第2図　遺構配置図

柵ＳＡ03

２間分が検出された。柱間寸法は東側より、2.4・2.3ｍである。掘形は径30～35cmの不整楕円形であり、深さは10～20cmである。掘立柱建物ＳＢ02に伴う柵と考えられる。

柵ＳＡ04

東西２間、南北３間分検出しているが、南北３間分は、柱間寸法から連続するものとは思えない。柱間寸法は東西柵 2.2ｍ等間，南北柵 2:1ｍ等間の断絶する柵である。掘形は径25～30cmの不整円形であり、深さは20～25cmである。全体として「Ｌ」字型を呈し、区画内に土壙墓がみられることから、墓に対する目隠し塀的な機能を果たしたものであろうか。

ii) ピット（第２・４・５図：図版５・８）

Pit 01

径20cmの不整円形を呈し、深さ20cmである。出土遺物には瓦器椀（１・３・４）土師器小皿（７～９）・土師器鍋（16）がある。瓦器椀１・３・４は、口径13～15cmのいずれも内外面にヘラミガキが施される。外面ヘラミガキは単発的に施される感が強いが、椀３には波状ミガキの崩れた形態のヘラミガキが残る。

Pit 02

径25cmの不整楕円形を呈し、深さ15cmである。出土遺物には瓦器椀（２）がある。口径13.7cm、内外面共にヘラミガキが施される。

Pit 03

径20cmの円形を呈し、深さ10cmである。出土遺物には瓦器椀（５）がある。口径15.7cm、器高 5.3cm、高台径 4.4cm、外面ヘラミガキは施されない。内面体部は横位のヘラミガキ、見込み部に斜格子暗文が施される。

Pit 04

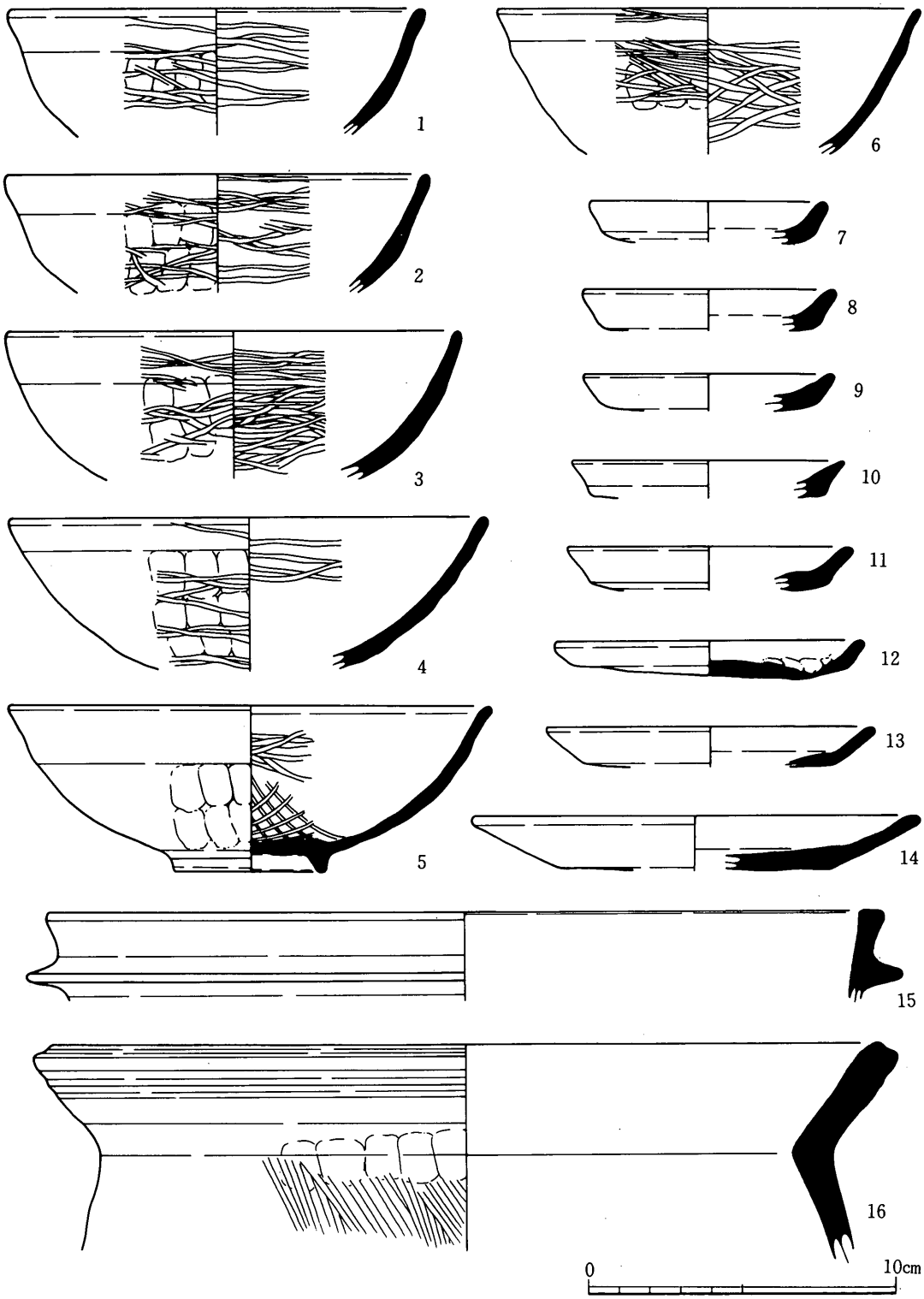
径20cmの円形を呈し、深さ５cmである。出土遺物には瓦器椀（６）がある。内外面ヘラミガキが施されており、胎土が黄橙色を呈す。瓦器椀の未製品であろうか。炭素吸着処理が全く施されていない。

Pit 05

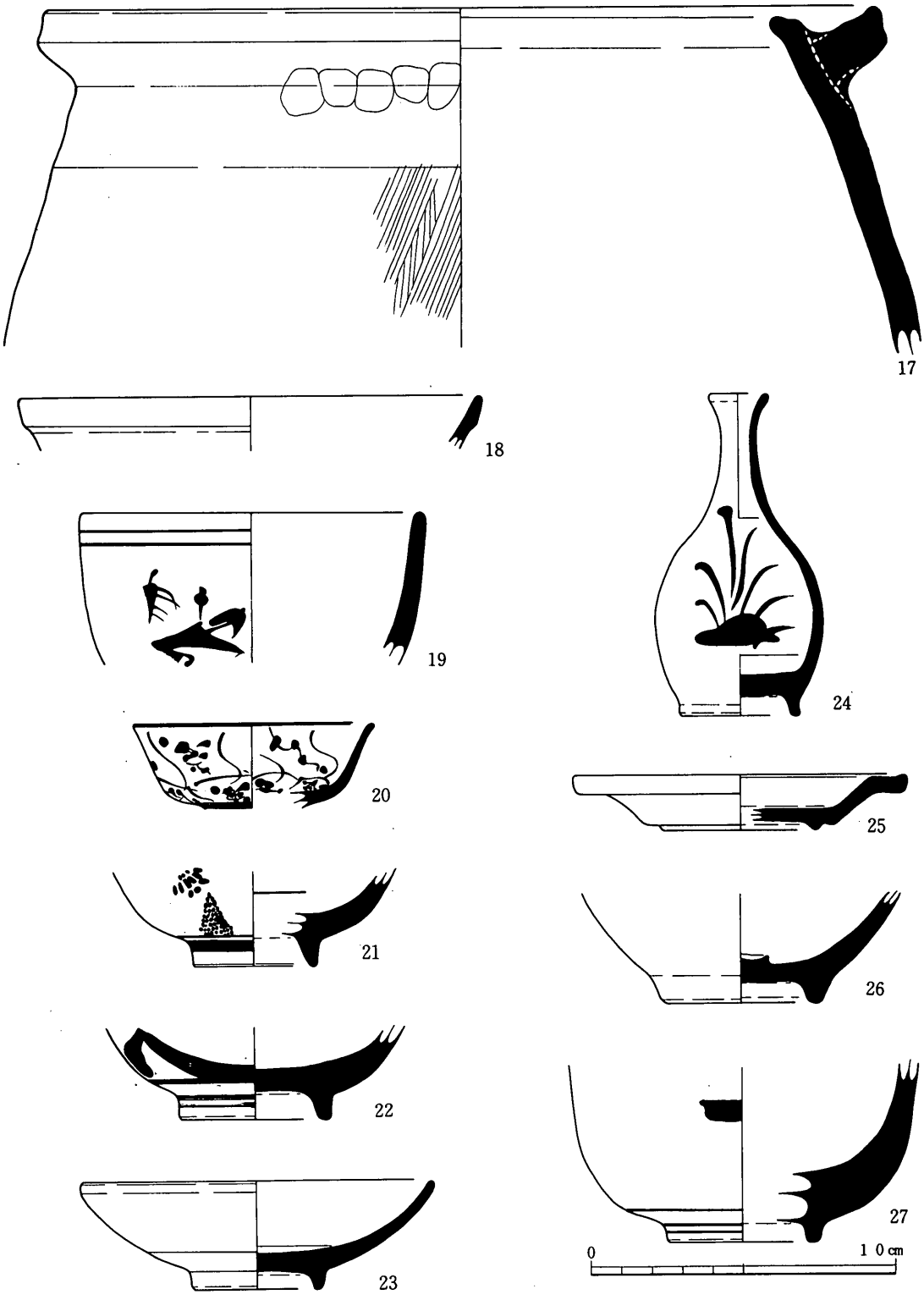
径25cmの不整楕円形を呈し、深さ20cmである。土師器小皿（10）が出土している。

Pit 06

径20cmの不整円形を呈し、深さ10cmである。土師器小皿（11）が出土している。



第4図　Pit 01(1・3・4・7～9・16)、Pit 02(2)、Pit 03(5)、Pit 04(6)、Pit 05(10)
Pit 06(11)、Pit 07(14)、Pit 09(12)、Pit 10(13)、Pit 11(15)出土遺物



第5図　Pit 08(17)、溝SD01(18～27)出土遺物

Pit 07

径30cmの円形を呈し、深さ15cmである。土師器大皿（14）が出土している。

Pit 08

径20cmの円形を呈し、深さ10cmである。土師器羽釜（17）が出土している。

Pit 09

一辺30cmの方形を呈し、深さ10cmである。土師器小皿（12）が出土している。

Pit 10

径35cmの不整楕円形を呈し、深さ20cmである。土師器小皿（13）が出土している。

Pit 11

径30cmの不整円形を呈し、深さ10cmである。土師器羽釜（15）が出土している。

iv）溝（第２図）

溝SD 01（図版２）

調査地区西端で検出された幅 1.5m、深さ80cmを測り、溝西肩は、調査地外へ伸びる。断面形が逆台形を呈するであろう南北溝である。埋土は明黄褐色系のシルトである。調査地南西隅部で直曲するコーナー部を検出しており、条里溝の可能性がある。

出土遺物には、白磁碗（18）・染付碗（19～22・27）・染付瓶（24）・陶器皿(23･25)・陶器碗（26）がある（第５図：図版６・７）。

染付碗19・23・27は、「くらわんか碗」であり、染付瓶24には、水仙と若松文が施される。

溝SD 02

幅30cm、長さ 2.2m、深さ10cmの断面形が浅い皿状を呈する南北溝であるが、南北両端で収束する。埋土は明黄褐色砂質シルトである。掘立柱建物ＳＢ01・02に伴う溝であろうか。

溝SD 03

幅 1.5～２m、深さ20cmの断面形が浅い皿状を呈する南北方向の溝であるが、途中で途切れる形態を示す。埋土は黒色砂質シルトである。弥生土器片が出土している。

v）井戸（第２図）

井戸SE 01

長径 4.4m、短径 3.6mの不整楕円形を呈する掘形の南部に、径 1.5mの石組を配置し、その中央に径70cm、深さ50cmの素掘りの井筒が設けられる。石組は深さ 1.4mで上面が検出され、井戸の埋め戻し時の閉塞石が見られる。石組の上方には井戸枠施設が見られない

ことから、本来は素掘りの井筒であったのだろうか。

出土遺物には、染付碗（28～31・37・41～45）・染付蓋（38～40）・染付皿（46・47）・白磁皿（36）・染付瓶（32）・陶器燭台（33）・陶器鉢（34）・陶器蓋（35）がある（第6・7図：図版6・7）。

染付蓋38は交叉草文、39は、外面に牡丹唐草文が描かれ、内面天井部にコンニャク印判による五弁花が施される。40は、外面に梅花文が描かれる。燭台33・鉢34は大谷焼、蓋35は瀬戸焼である。18～19世紀代の国内産陶磁器である。

vi）土壙（第2図）

土壙ＳＫ01

長辺 2.7m、短辺80cm、深さ20cmの長方形を呈する。埋土は黄褐色砂質シルトである。土壙壁面は直立し，底面は平坦である。形状から土壙墓と考えられる。

土壙ＳＫ02

長辺 1.2m、短辺70cm、深さ10cmの長方形を呈する。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトである。

土壙ＳＫ03

長辺 2.5m、短辺80cm、深さ20cmの長方形を呈する。埋土は褐色砂質シルトである。土壙壁面は直立し、底面は平坦である。形状から土壙墓と考えられる。

土壙ＳＫ04

長辺 1.7m、短辺90cm，深さ10cmの長方形を呈する。埋土は黒色砂質シルトに黄色砂質シルトがブロックで混在する。

土壙ＳＫ05

長辺 2.3m、短辺60cm、深さ20cmの長方形を呈する。埋土は明黄褐色砂質シルトである。土壙壁面は直立し、底面は平坦である。形状から土壙墓と考えられる。

土壙ＳＫ06

長辺 1.5m、短辺50cm、深さ10cmの長方形を呈する。埋土は明黄褐色砂質シルトである。土壙壁面は直立し、底面は平坦である。形状から土壙墓と考えられる。

土壙ＳＫ07

長辺 1.8m、短辺70cm、深さ20cmの長方形を呈する。埋土は明黄褐色砂質シルトである。土壙壁面は直立し、底面は平坦である。形状から土壙墓と考えられる。

土壙ＳＫ08

調査地区内において、径50cm、深さ50cmの不整半円形を呈する。埋土は明黄褐色砂質シルトである。調査地区外に拡がる。天目碗（54）が出土している（第８図）。

土壙ＳＫ09

長辺 1.4m、短辺 1.1m、深さ10cmの長方形を呈する。埋土は明黄褐色砂質シルトである。瓦器椀（48）が出土している。退化した断面三角形の高台をもち、内面見込み部に連結輪状文が施される（第８図）。

土壙ＳＫ10

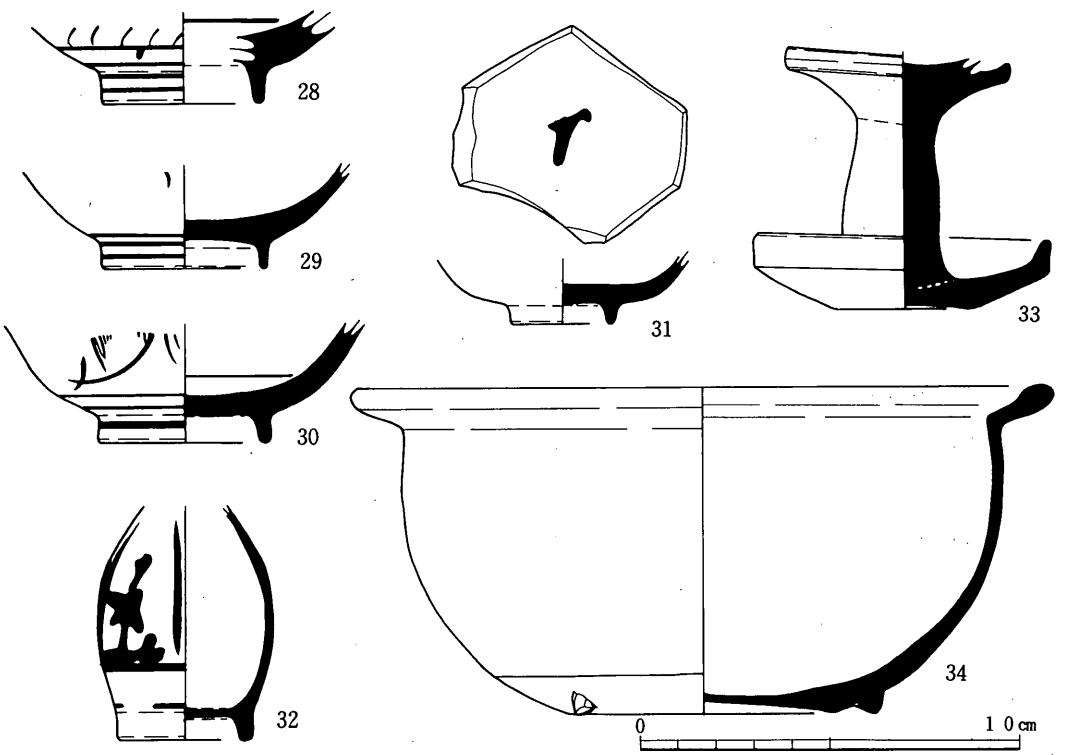
径80cm、深さ 1.4mの円形を呈する。埋土は明黄褐色砂質シルトである。土師器小皿(50)が出土している（第８図：図版８）。

土壙ＳＫ11

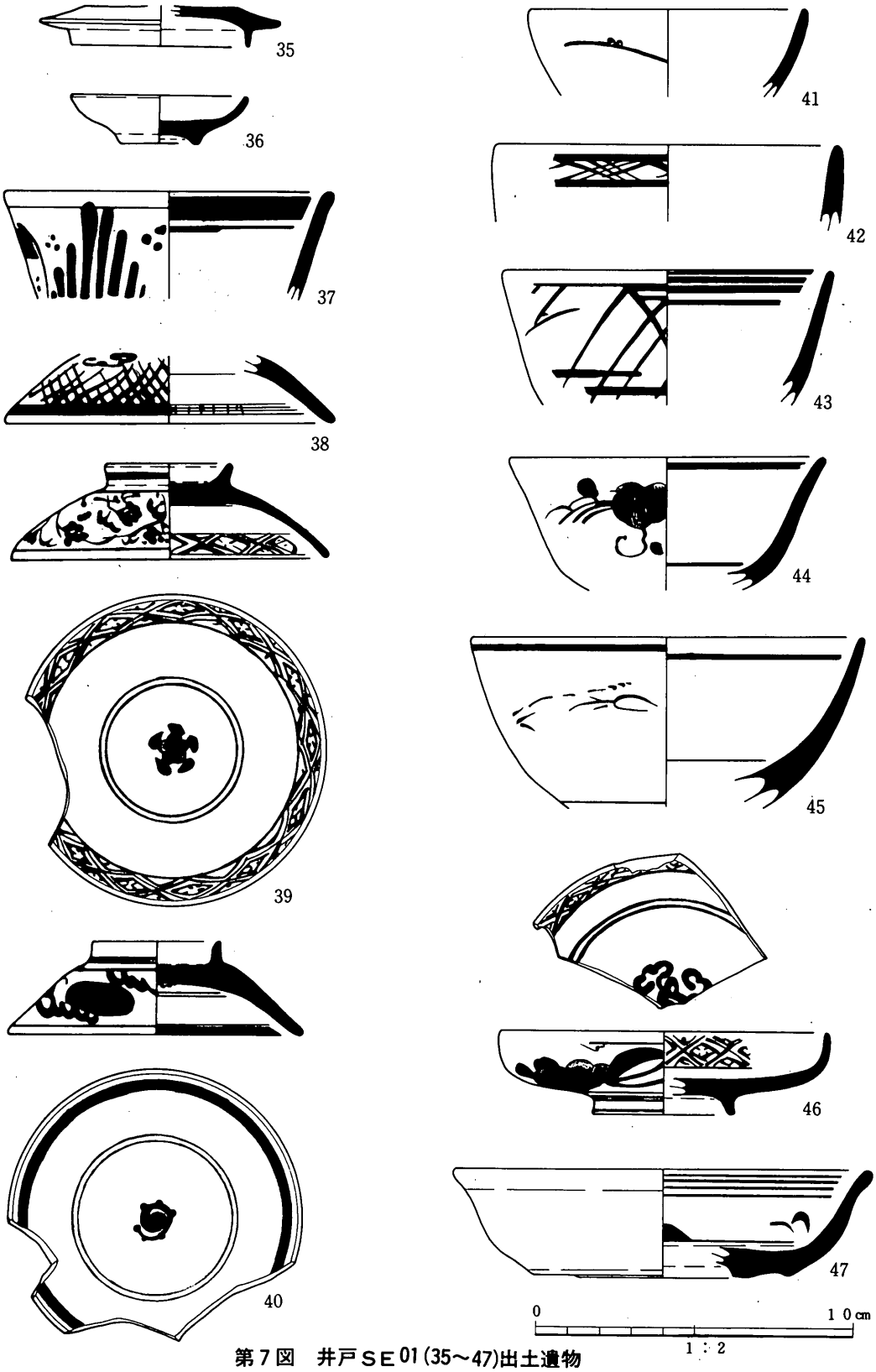
長辺 3.5m、短辺 1.1m、深さ50cmの長方形を呈する。埋土は灰白色シルト ～ 極細砂である。染付皿（53・55）・青磁碗（57）・陶器皿（51・52）が出土している（第８図：図版８）。陶器皿51・52は、口縁部に炭化物が付着しており燈明皿と思われる。

土壙ＳＫ12

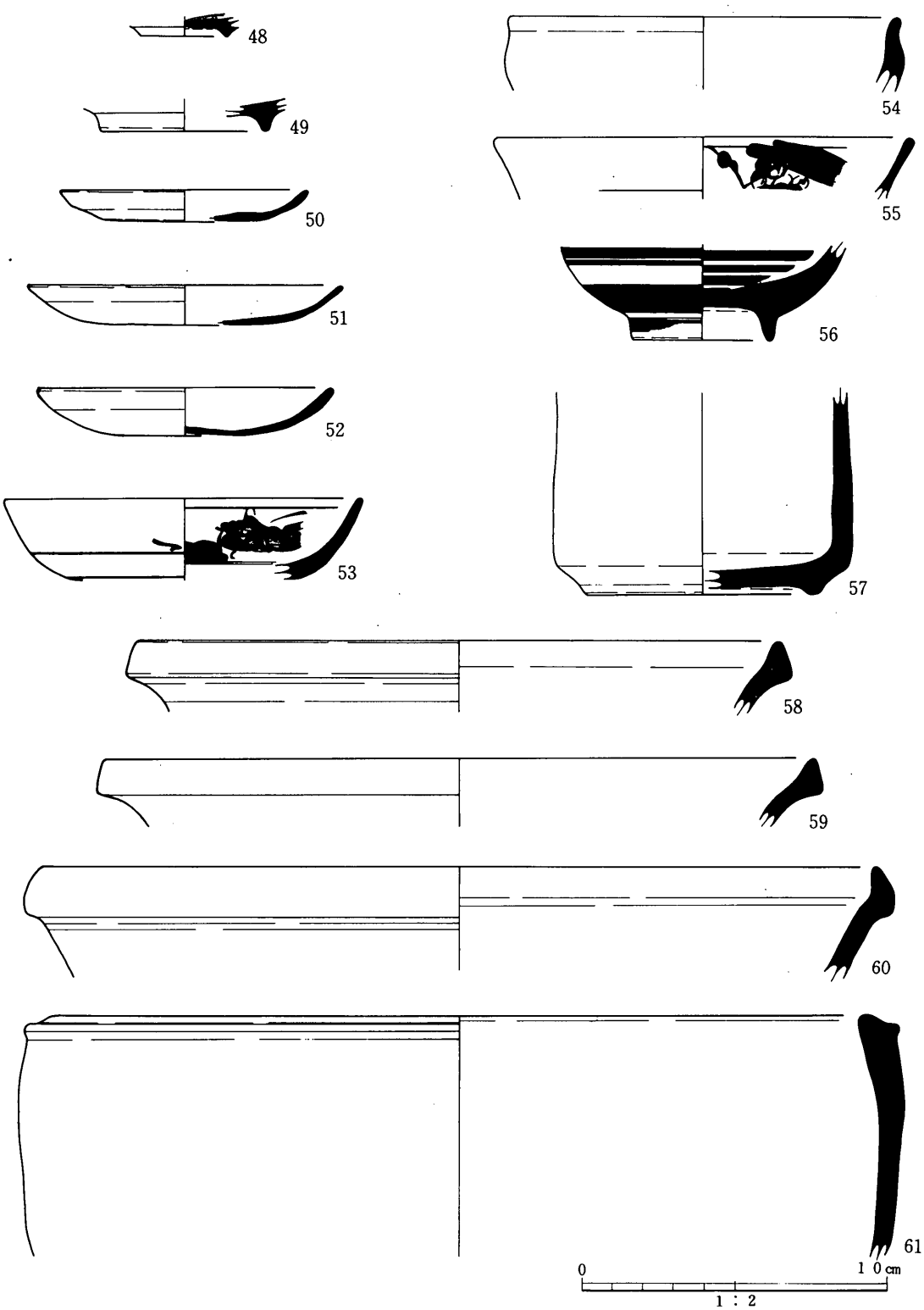
調査地区内において、長辺 1.3m、短辺１m、深さ20cmの不整長方形を呈する。埋土は



第６図　井戸ＳＥ01(28～34)出土遺物



第７図　井戸ＳＥ01(35～47)出土遺物



第８図　土壙ＳＫ-08(54)、ＳＫ-09(48)、ＳＫ-10(50)、ＳＫ-11(51～53・55・57)、ＳＫ-12(56)
不明遺構ＳＸ-01(49・58～60)、ＳＸ-02(61)出土遺物

明黄褐色砂質シルトである。調査地区外に拡がる。陶器碗（56）が出土している（第８図）。

vii ）**不明遺構**（第２図）

不明遺構SX 01

調査地区内において、径５ｍの半円形を呈し、深さ 2.2ｍを測る。埋土は上層と下層に大別できる。上層は黄褐色系のシルト層であり周辺遺構の埋土と同相であるが、下層は層厚１ｍを測る青灰色シルト質粘土～粘土層であり水成堆積を示し、当初、水溜施設として機能していたものであろうか。

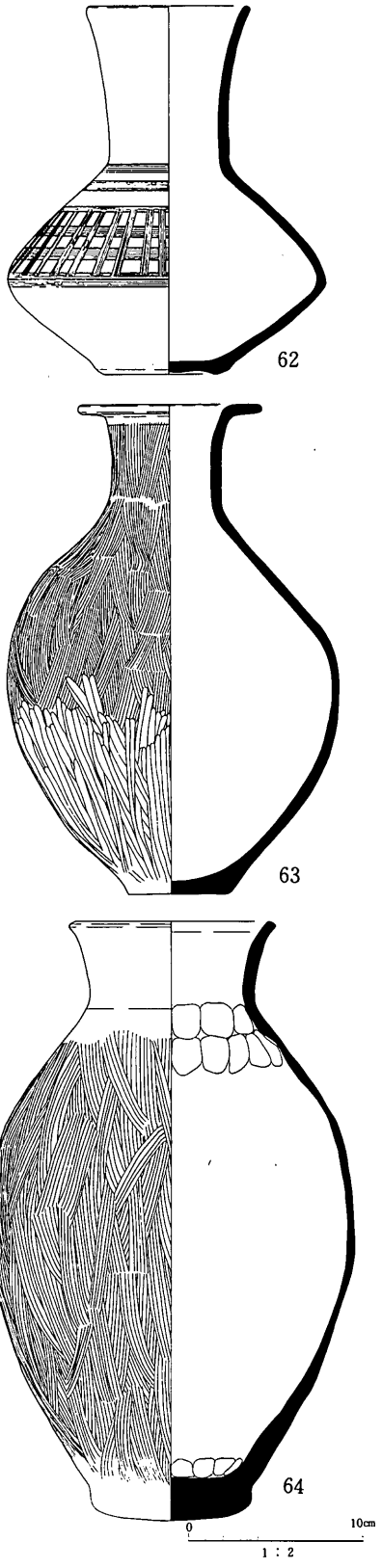
出土遺物には、東播系須恵器練鉢（58～60）・桃核がある（第８図：図版２・５）練鉢58～60は、口縁端部を上下に拡張する玉縁状口縁を呈するが、それ程発達した形態ではない。

不明遺構ＳＸ02

調査地区内において、長辺 1.2ｍ、短辺80cm、深さ10cmの不整長方形を呈する不明落ち込み遺構である。土師器鍋(61)が出土している(第８図：図版５)。

４．小　　結

今回の調査においては、平安時代末期～鎌倉時代にかけての集落跡の一画を検出している。掘立柱建物５棟の時期設定は明確ではないが、周辺遺構の出土遺物及び掘立柱建物を中心とする遺構の拡がりから２つのグルーピングが可能であろう。１つは、掘立柱建物ＳＢ01・02の２棟を中心とするａ群、他の１つは、掘立柱建物ＳＢ04・05を中心とするｂ群である。掘立柱建物ＳＢ03～05の周辺部では、12世紀終末～13世紀初頭にかけての出



第９図　出土遺物（62～64）

土遺物が検出されている。また、掘立柱建物ＳＢ01・02では、13世紀前半以降の出土遺物が検出されており、ｂ群→ａ群への連続的な時期差がみられる。建物構造においては、ｂ群は柱配置・柱間寸法のばらつきが大きく非常に精度の低い建物群である。他方，ａ群は、柱配置・柱間寸法に比較的統一性が見られ、ｂ群の建物と比較して進歩的な様相を示す。また、建物配置において、ａ・ｂ群は２棟並立形態を示すが、ａ群では両棟の柱筋を揃える意識的な並設企画が窮われる。さらに、時間的継続を考慮すれば、ｂ群→ａ群への人的移動の痕跡を示す可能性が考えられよう。

出土遺物は、瓦器椀・土師器小皿・土師器羽釜・東播系須恵器練鉢等の日常雑器類が主体を成すが、量質共に極めて貧相である。瓦器椀・須恵器練鉢には畿内周辺地域からの搬入土器がみられ、阿波国の一地方農村にまで、当時の商品流通経路が確保されていたと考えられる。

また、調査地において、点々と見られる土壙墓は中世農村集落における墓制形態を示す好事例であろう。柵ＳＡ04が、唯一、墓域と居住域との境界を示す施設の可能性が考えられるが、居住空間に対する土壙墓の配置に意識的な境界区別はみられない。いわゆる「屋敷墓」の形態を示すものであろう。屋敷墓の中心を11～12世紀に求める指摘があるが(註３)、今回の調査における土壙墓は時期的にやや下るものである。13世紀以降の集落が集村化していく過程で墓地の形態も「集合墓」へと変化していくとされるが(註４)、この地域における集落は依然として散村形態をとっていたと考えられる。中世絵巻の『餓鬼草紙』・『六道絵』の墓地風景から窺われる墓制・葬送形態とは区別されるものであろう。

阿波国における中世遺構面の調査・研究はとりわけ遅れた分野であり、多くの課題を残しているのが現状とされる。

付記）

今回の調査では、前述した遺構の他に、弥生土器の単独検出が数例みられる（第９図：図版４・８）。その出土状況は明確な埋納状況を示すものとされた。ただ、その性格に関しては当初，明確ではなかった。後年、この弥生土器の単独検出例は、名東町２丁目・天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査における方形周溝墓群及び周辺での土器埋納の検出例により理解されるに至る。おそらく、今回の調査地もまた弥生時代の墓域と考えられよう。

（註）

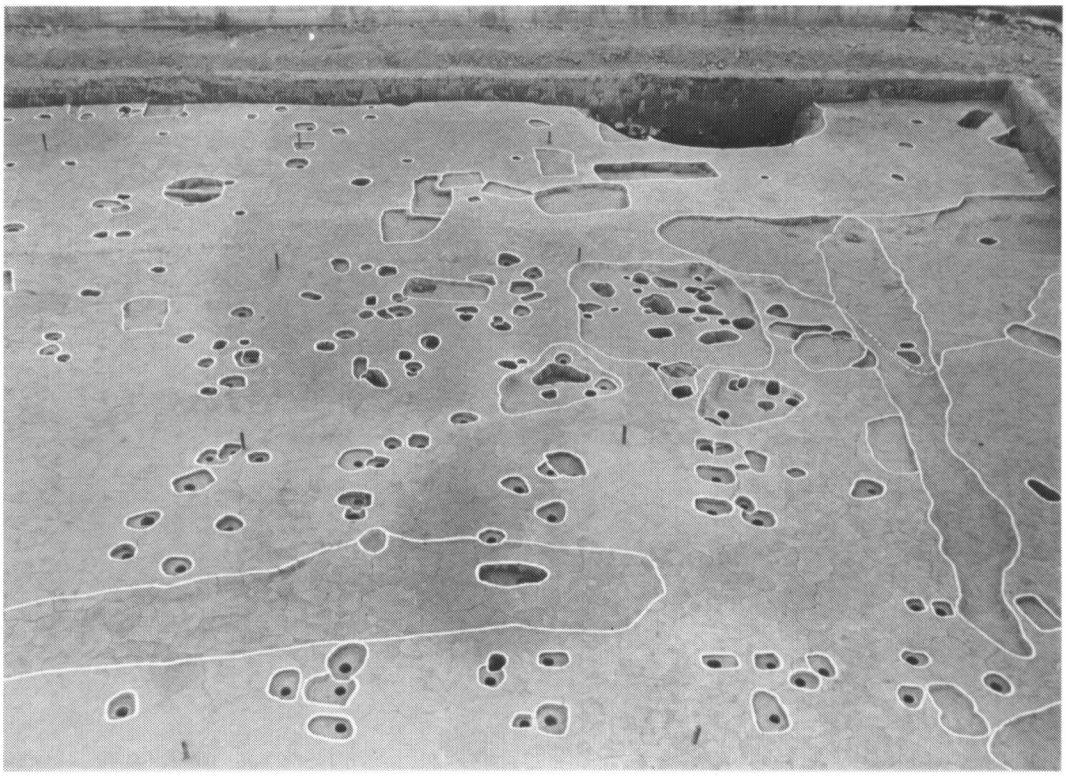
註１．一山　典「名東遺跡第三次調査概要」、『徳島市史だより』第９号、徳島、1983年、６～７PP。

註２．勝浦康守「中世遺跡発掘調査の成果」、『徳島市史だより』第13号、徳島1987年、６～７PP。

註３．勝田　至「中世の屋敷墓」、『史林』第71巻第３号、京都、1988年、41～76PP。

註４．藤澤典彦「中世墓地ノート」、『佛教藝術』182号、東京、1989年、12～26PP。

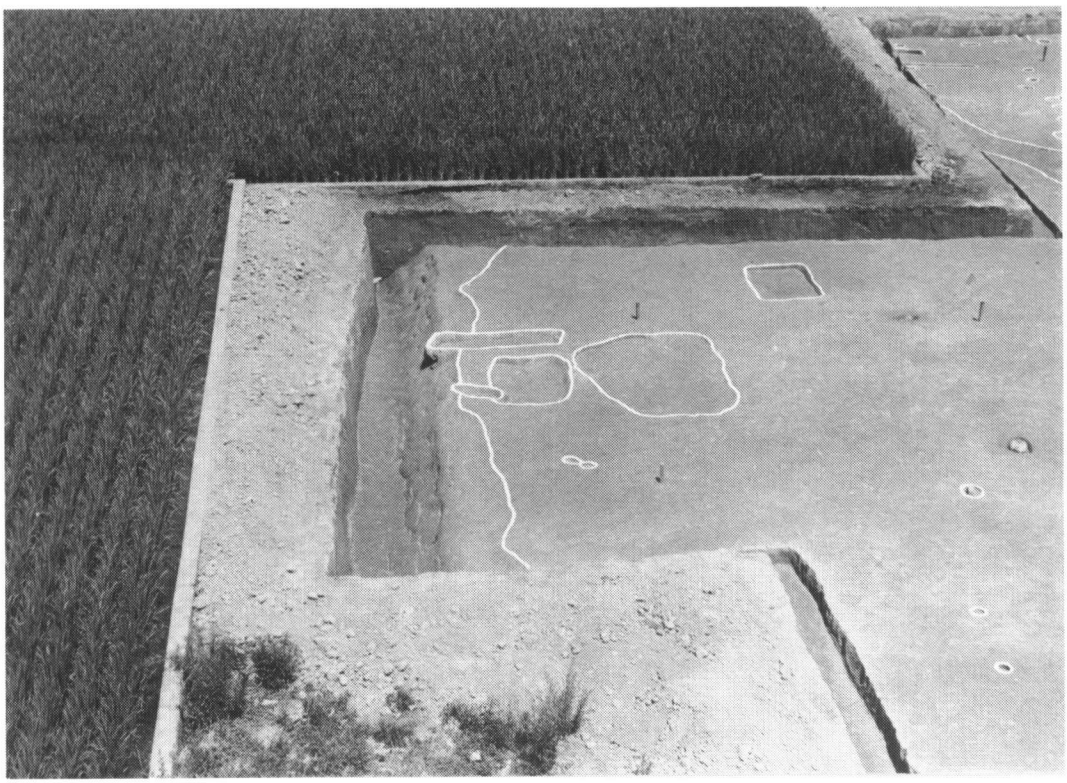
参考文献に関しては名古屋市立美術館　竹葉　丈氏に御教示を頂いた。



掘立柱建物ＳＢ01・02　（南より）

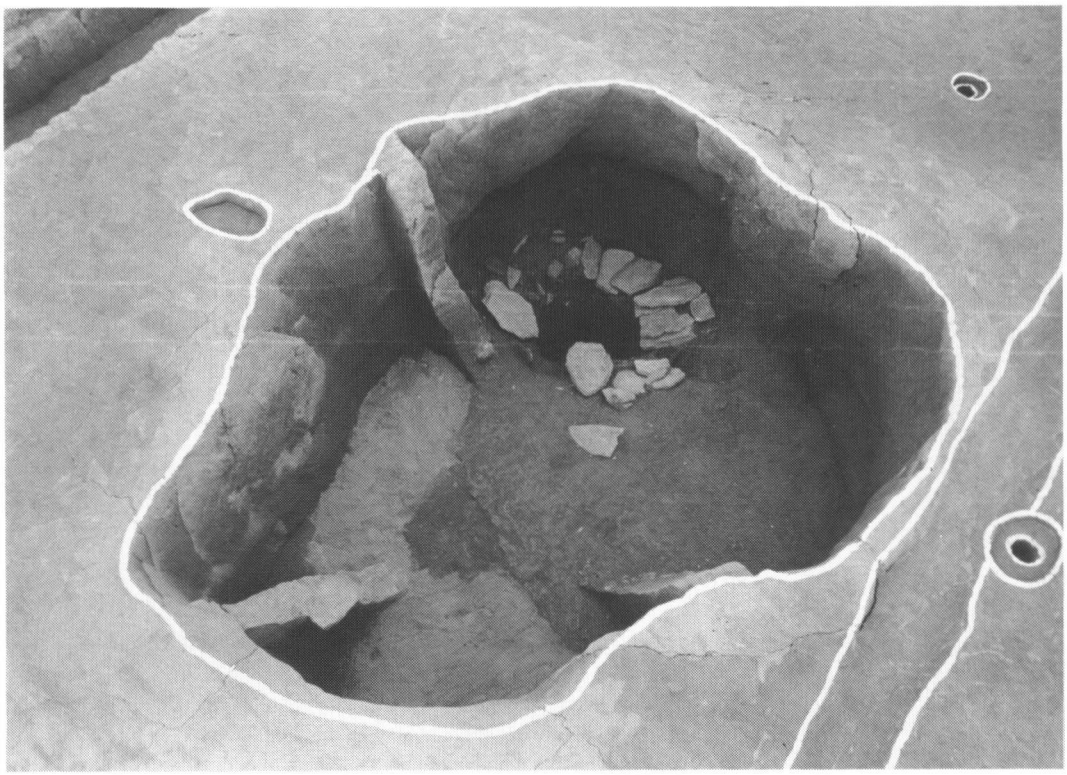
掘立柱建物ＳＢ05　（南より）

図版2　検出遺構



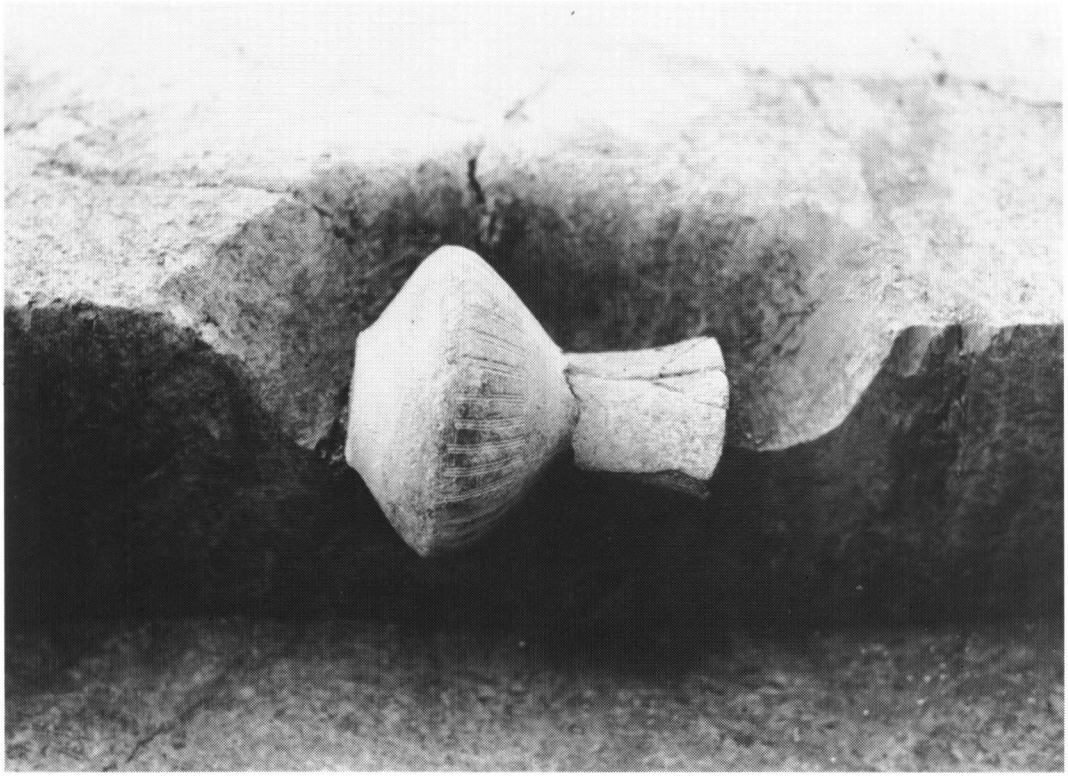
溝ＳＤ01　（南より）

不明遺構ＳＸ01　（南東より）

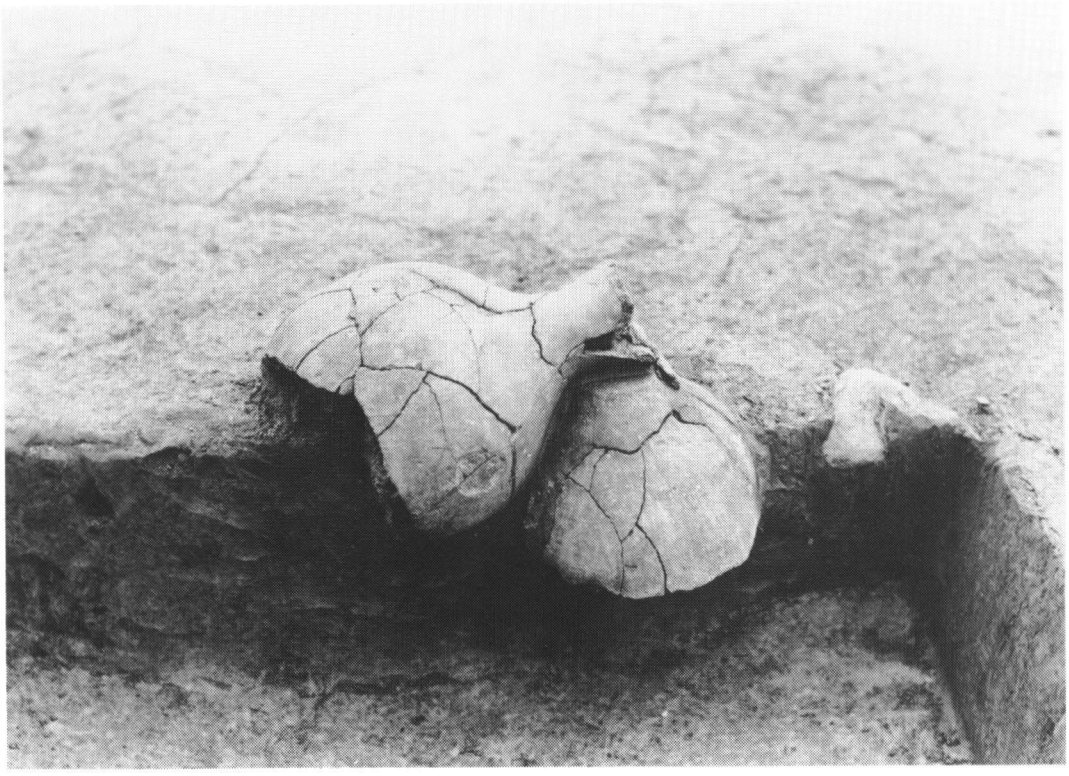


井戸ＳＥ01　（北西より）

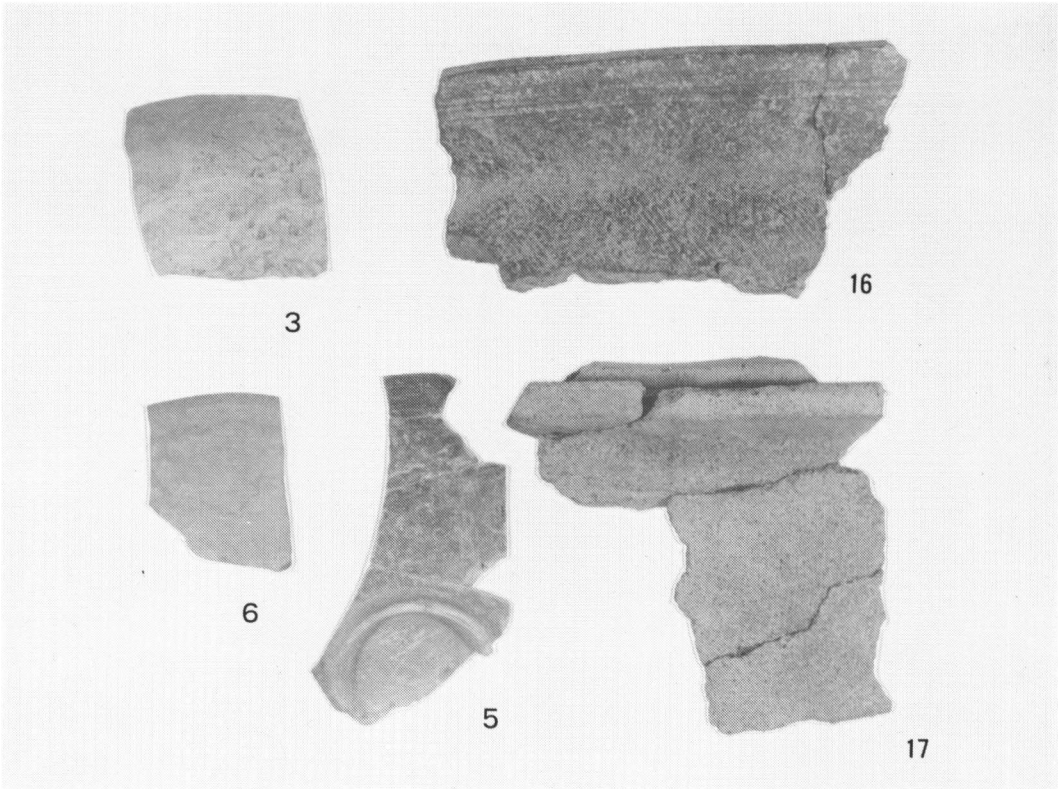
井戸ＳＥ01　（北西より）

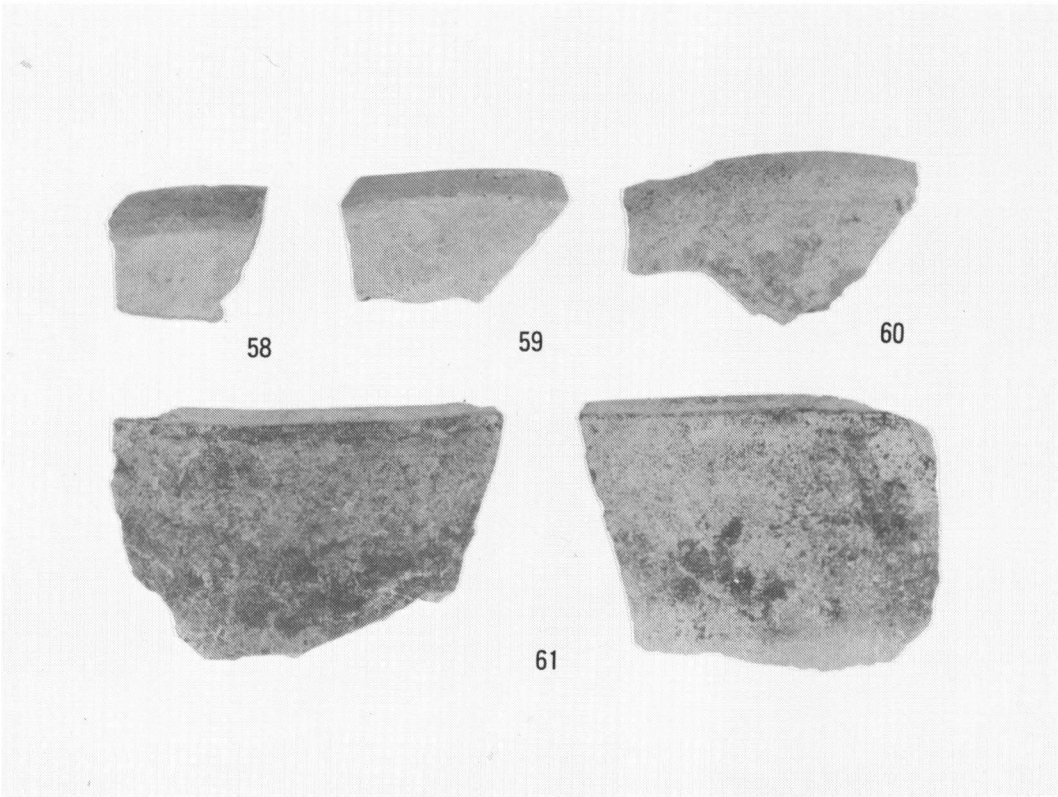


弥生土器検出状況　（南より）

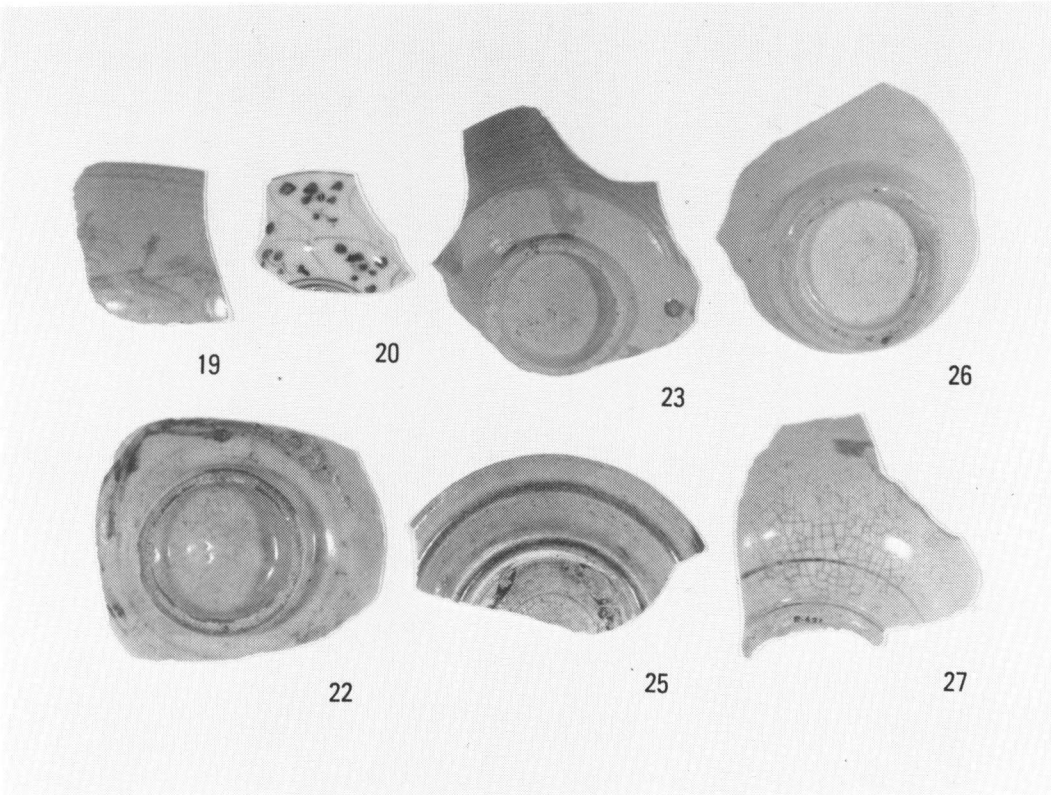


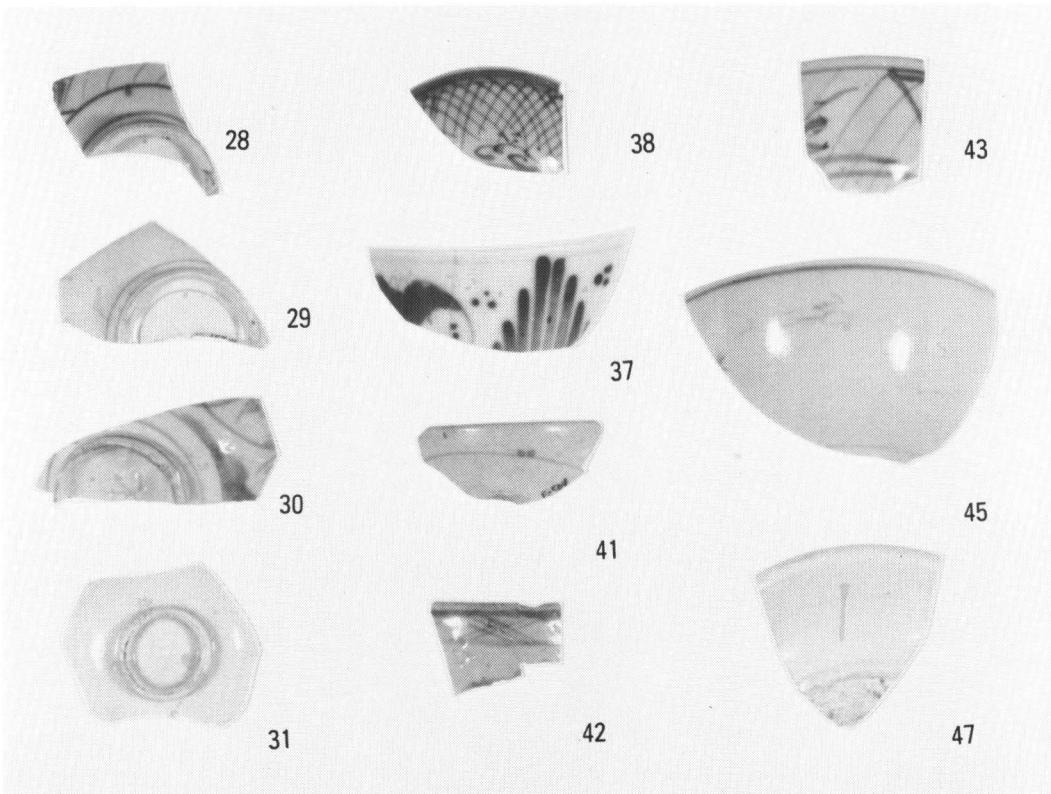
弥生土器検出状況　（南より）



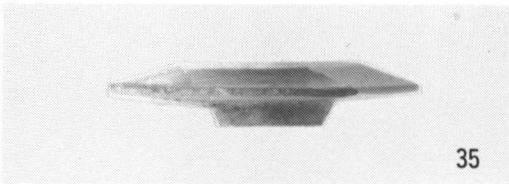


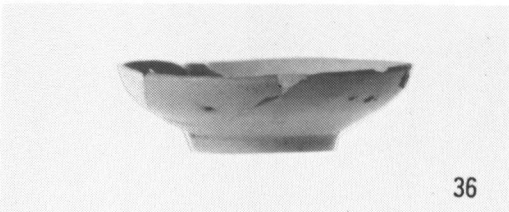
Ｐｉｔ01(３・16)．Ｐｉｔ03(５)．Ｐｉｔ04(６)．Ｐｉｔ08(17)
不明遺構ＳＸ01(58～60)．不明遺構ＳＸ02(61)

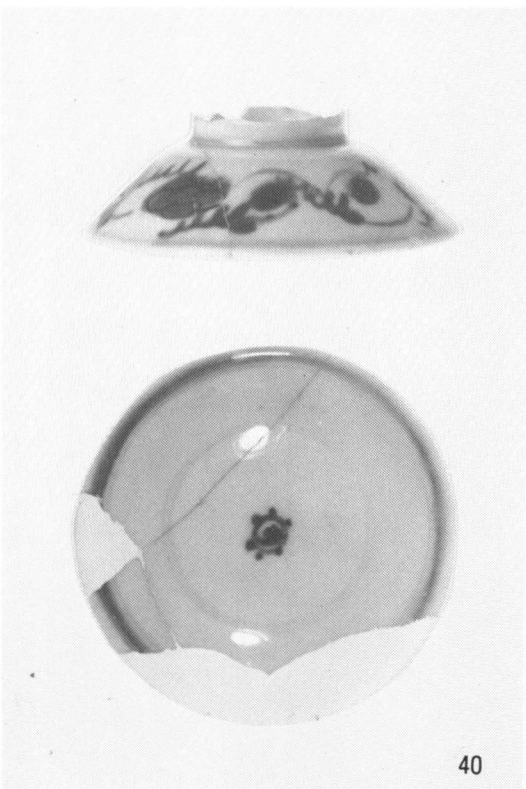


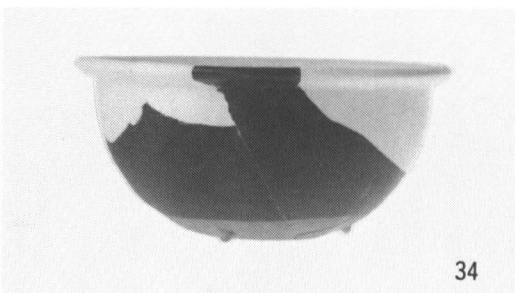


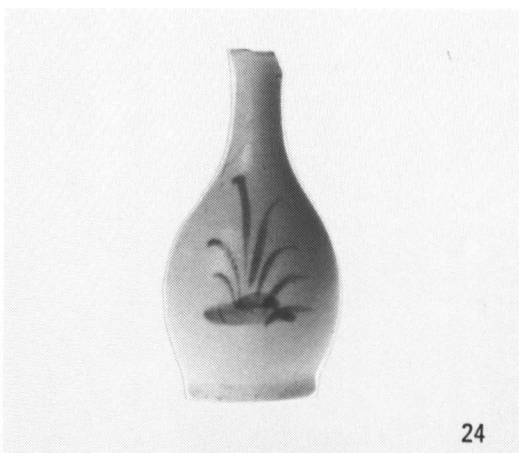
溝ＳＤ01（19・20・22・23・25～27）　井戸ＳＥ01（28～31・37・38・41～43・45・47）



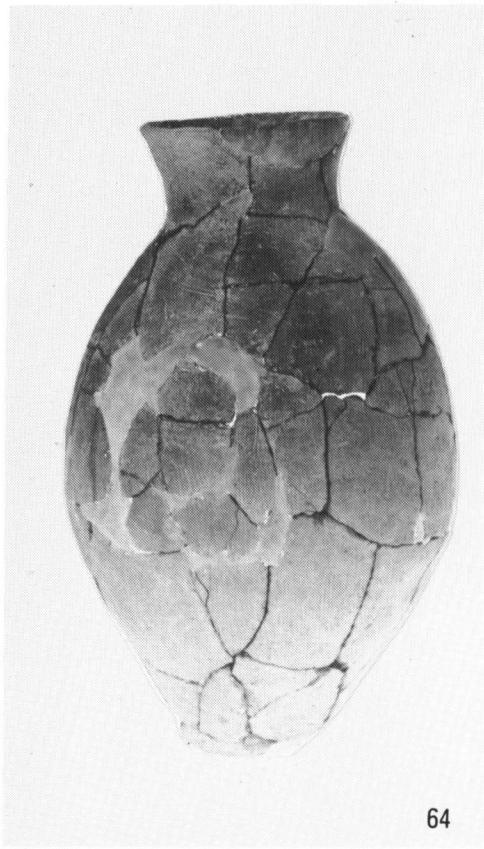


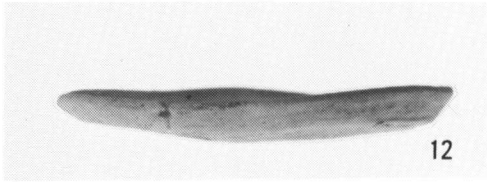


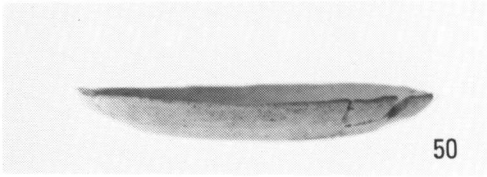


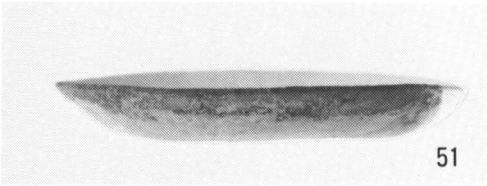


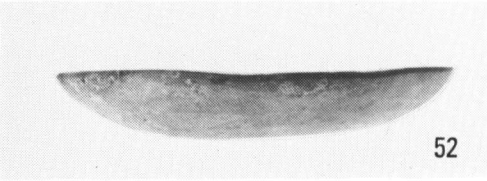
溝ＳＤ01(24)，井戸ＳＥ01(33－36・39・40)











Ｐｉｔ09(12)．土壙ＳＫ10(50)．ＳＫ11(51・52)．弥生土器(62～64)

第 III 章

名東西都市下水路築造工事に伴う名東遺跡発掘調査概要 ―昭和61・62年度―

1．調査に至る経緯と経過（第１図）

徳島市名東町２丁目における名東西都市下水路築造工事は、徳島市土木部下水道事務所建設課が国補事業として、昭和60年度以来、継続的に計画・実施している。工事区域が周知の埋蔵文化財包蔵地である「名東遺跡」の西域部にあたるため、当初より、徳島市教育委員会との協議において、事前の発掘調査を実施することで合意に達した。

昭和61・62年度の調査地は、「名東遺跡」の西端域にあたり、周辺地形図からも鮎喰川の氾濫原ないしは、その隣接地であることが読み取れる。調査区域は、既設用水路及びアスファルト舗装道路にあたり、幅２～５ｍ、総延長は、240ｍに達する。下水道建設計画に基づく鋼矢板の打設を待って攪乱部を重機により除去し、以後、人力掘削により調査を進行させた。また、通行路の確保の為、覆鋼板設置箇所に関しては、立会調査に変更した。

調査は、層位的発掘調査を行うのが原則であるが、断面土層の観察を踏まえた結果、一括掘削を行い最終遺構面での遺構検出に努めた。限られたトレンチ調査にもかかわらず、調査Ｉ・II区では、鮎喰川水系の旧河道の埋没過程を堆積土層の観察から捉えることができ、また、調査地VII区では、当時、名東遺跡において初見とされた方形周溝墓を断片的にではあるが検出することができた。なお、調査成果の一部は、第８回埋蔵文化財資料展「阿波を掘る」において紹介した。

2．基本層序（第２図）

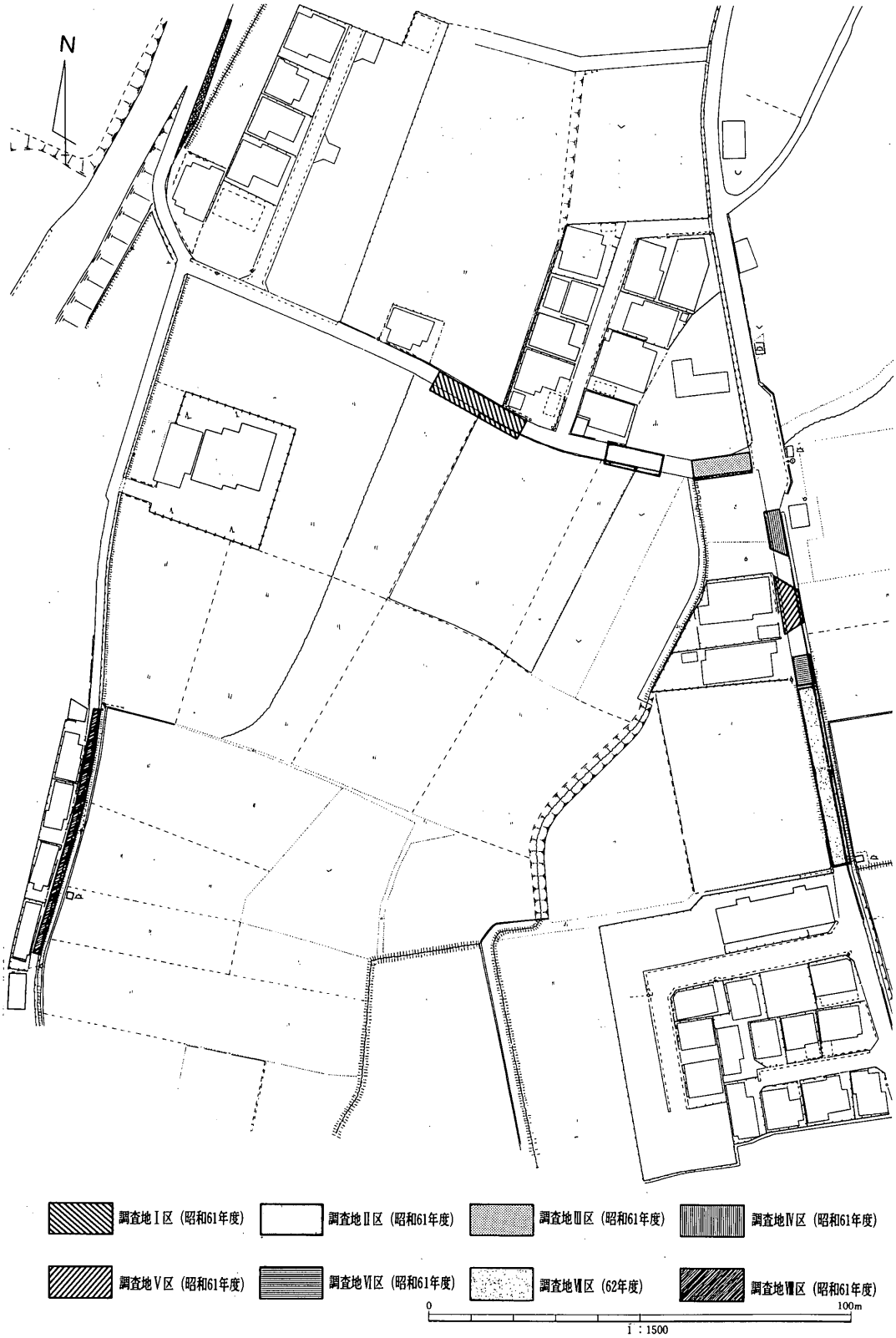
調査地周辺の現地表面は、標高Ｔ．Ｐ＋7.4ｍを測る。調査地II～VII区における基本層序は、第１～６層に細分される。以下、上位より概説する。

第１層：淡黄色砂質シルト層で、層厚10～45cmである。近世陶磁器を包含する。

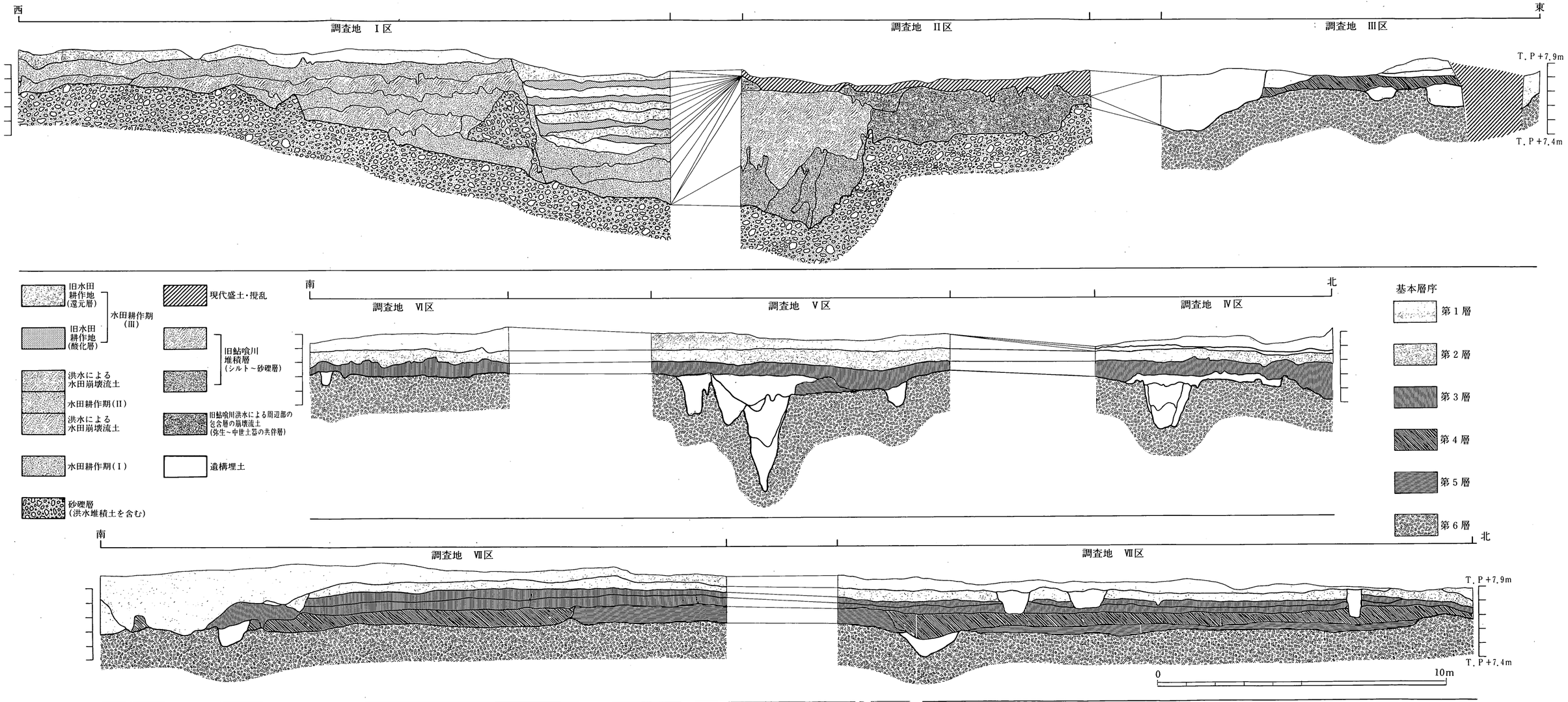
第２層：明黄褐色シルト層で、層厚５～15cmである。上位でＭｎ集積が顕著である。中世土器片を包含し、水田遺構の耕土である。

第３層：黄褐色シルト層で、層厚10～25cmである。上位で水田耕作に伴う攪拌部が見られる。中世土器片を包含する。水田遺構の耕土である。

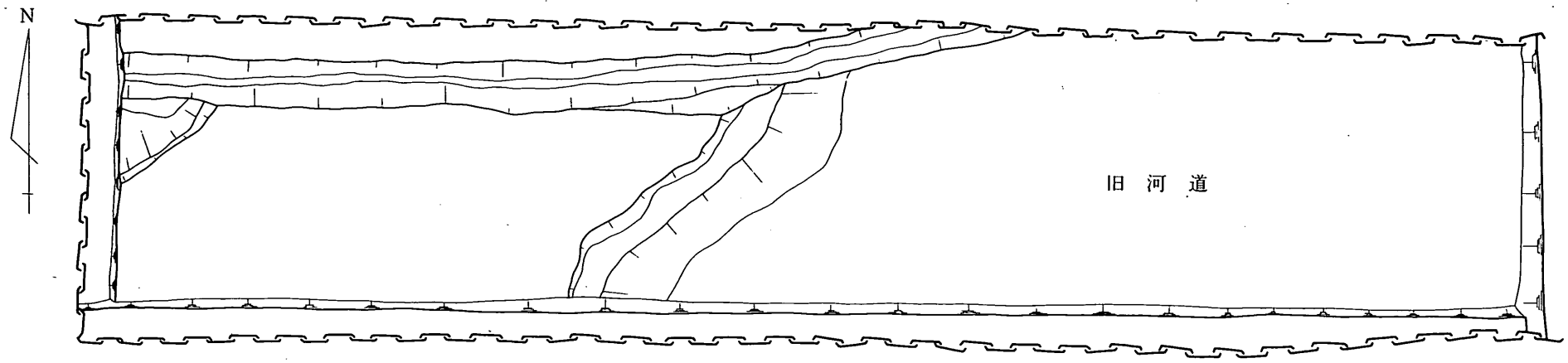
第４層：黒色シルト層で、層厚10cmである。

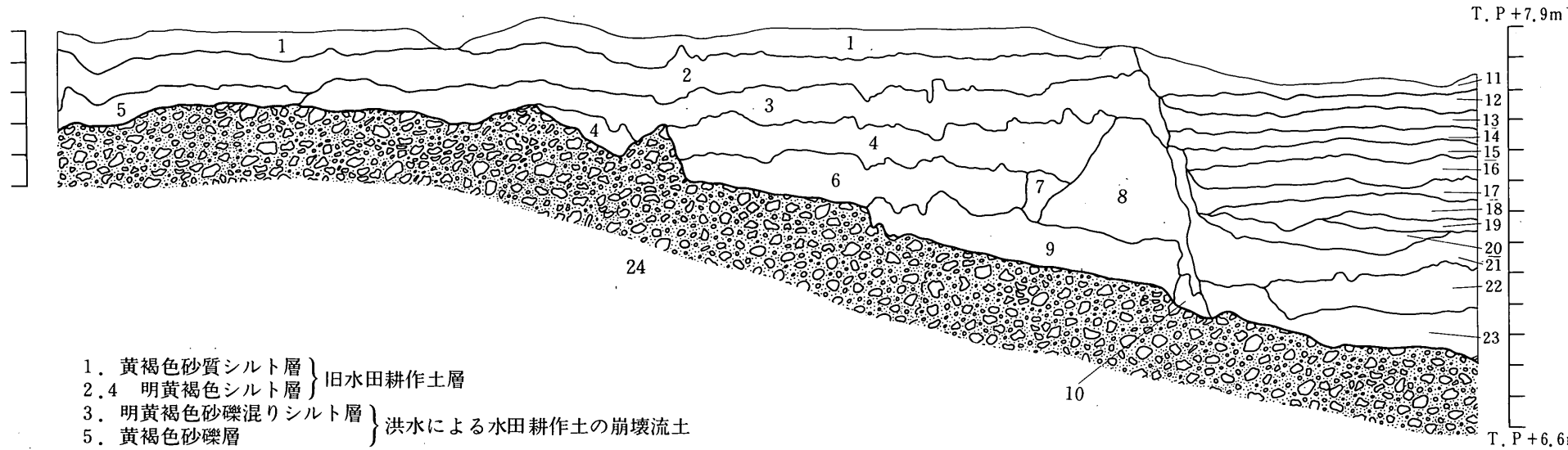

N
調査地Ⅰ区（昭和61年度）
調査地Ⅱ区（昭和61年度）
調査地Ⅲ区（昭和61年度）
調査地Ⅳ区（昭和61年度）
調査地Ⅴ区（昭和61年度）
調査地Ⅵ区（昭和61年度）
調査地Ⅶ区（62年度）
調査地Ⅷ区（昭和61年度）
0
100m
1：1500

第１図　調査地概略図



第2図　調査地Ⅰ～Ⅶ区断面土層模式図





1．黄褐色砂質シルト層
2．4　明黄褐色シルト層
} 旧水田耕作土層

3．明黄褐色砂礫混りシルト層
5．黄褐色砂礫層
} 洪水による水田耕作土の崩壊流土

6．黄褐色砂礫りシルト層
7．オリーブ褐色砂礫混りシルト層
8．黄褐色砂礫層
} 洪水堆積土層

9．にぶい黄色粘土質シルト層（洪水以前の水田耕作土層）
10．にぶい黄色砂礫混りシルト層（洪水以前の水田耕作土の崩壊流土）

11.13.15.16.18.20 灰色砂質シルト層（旧水田耕作土層）
12.14.17.19 黄褐色砂質シルト層（Ｆｅの酸化層）
} 灌漑水田に特徴的に見られる土壌の理化学的反応を示す。

21．にぶい黄色粘土質シルト層
22．明黄褐色砂質シルト層
23．灰オリーブ色粘土質シルト層
} 洪水以前の水田耕作土層

24．褐～灰色砂礫層

0　5 m
H : L = 5 : 1

第３図　調査地Ｉ区遺構配地図 ・ 断面土層模式図

第５層：にぶい黄橙色砂質シルト層で、層厚10cmである。ごく少量の弥生土器片を包含する。

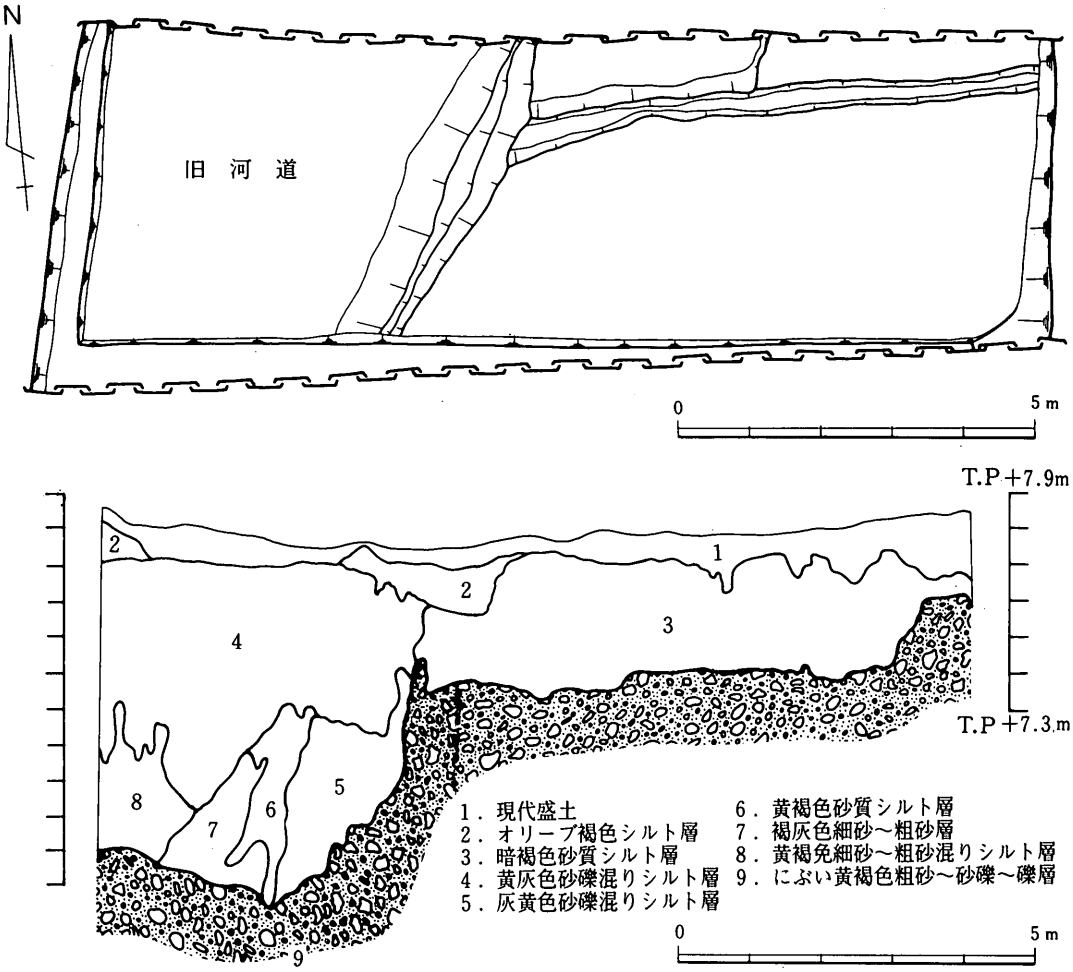
第６層：遺構検出のベースとなる黄色砂質シルト層である。調査地Ⅰ・Ⅱ・Ⅷ区では、旧河道氾濫原にあたり、砂礫へ移化する。

３．検出遺構・出土遺物

調査では、黄色シルト～粘土質シルト層（第６層）上面で、弥生時代～江戸時代に至る遺構・遺物が検出された。以下、主な遺構・遺物について概略する。

ｉ）**旧河道**（第３・４図：図版１・２）

調査地Ⅰ・Ⅱ区において検出された鮎喰川水系の旧河道の一部である。幅36ｍ、深さ70cmを測り、調査地Ⅰ区において左岸部、調査地Ⅱ区において右岸部が検出された。左岸は、

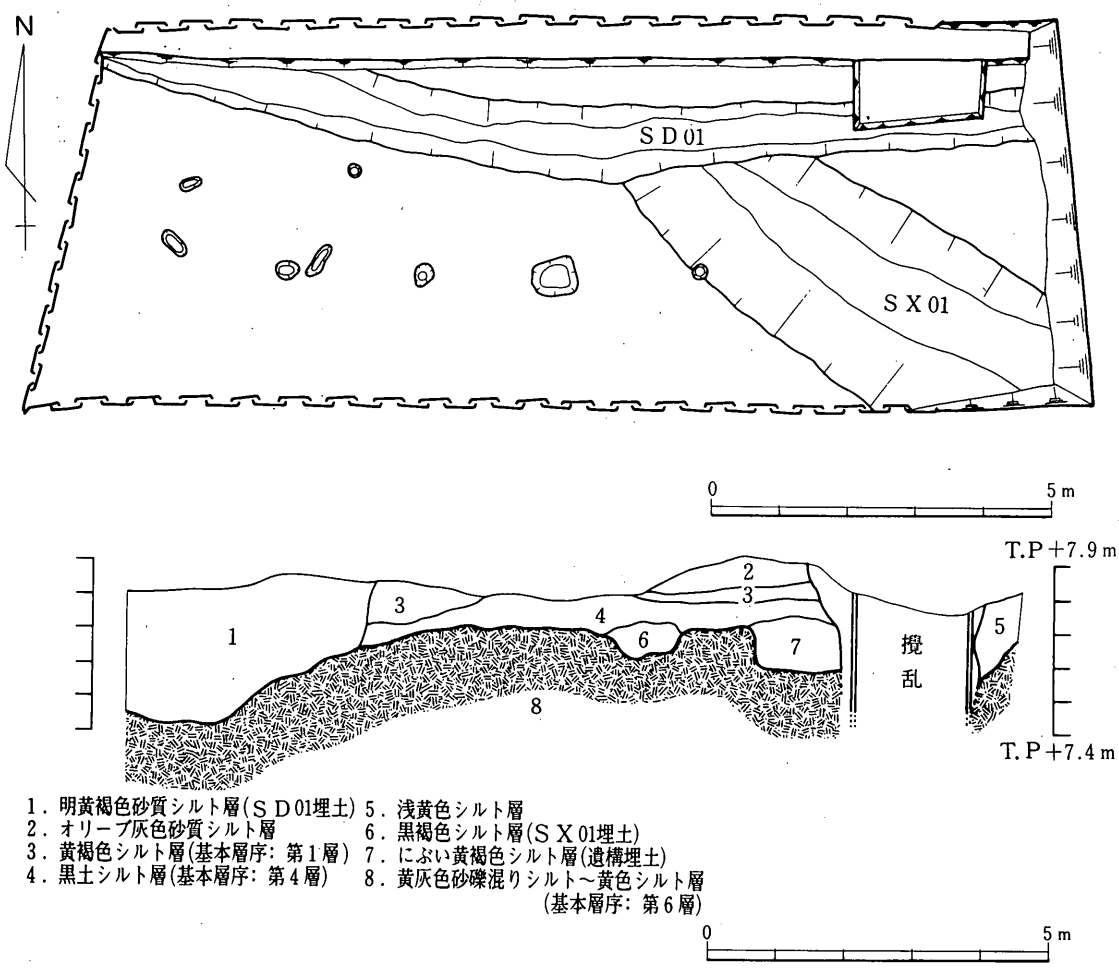


第４図　調査地Ⅱ区遺構平面図・断面土層模式図

緩やかに傾斜するのに対し、右岸は、急激な落ち込みを見せる。この旧河道の断面形が示すように、右岸河床部では砂礫のラミナ堆積が顕著に認められ、水流痕跡が窺われる。左岸部は、調査地Ⅷ区(図版10)に砂礫層が見られることから、広域氾濫原を形成する。また、右岸部には拳大程の河原礫が見られるが、調査地Ⅱ区においては良質のシルト層が見られることから氾濫原の形成は左岸ほど優勢ではない。旧河道埋没時期を示唆する出土遺物は見られない。

ii）**溝ＳＤ01**（第５図：図版３）

調査地Ⅱ区において検出された幅１ｍ、深さ40cm、断面形が深い皿状を呈する東西溝である。出土遺物がなく時期に関しては卿明であるが、第１層を切り込むことから、近世遺構の溝と考えられる。

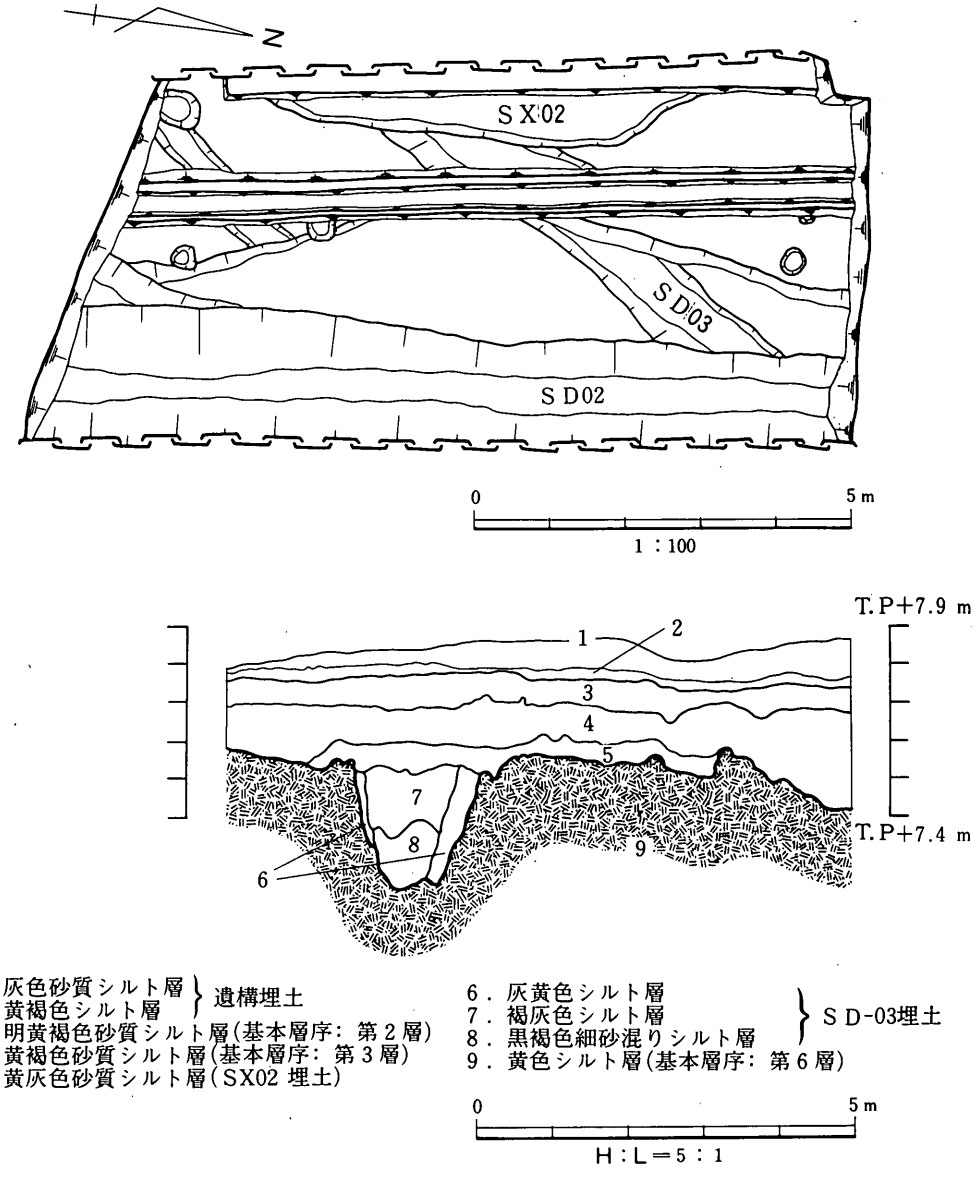


第５図　調査地Ⅲ区遺構配置図・断面土層模式図

iii）**溝ＳＤ02**（第６～８・10・16：図版３・４・７・11・12）

調査地Ⅳ～Ⅶ区において検出された南北溝である。幅１．２～２ｍ、深さ60cmを測り断面形が逆台形状を呈する。埋土は、灰色礫混じりシルトである。工事直前まで残存していた旧農業用水路である。

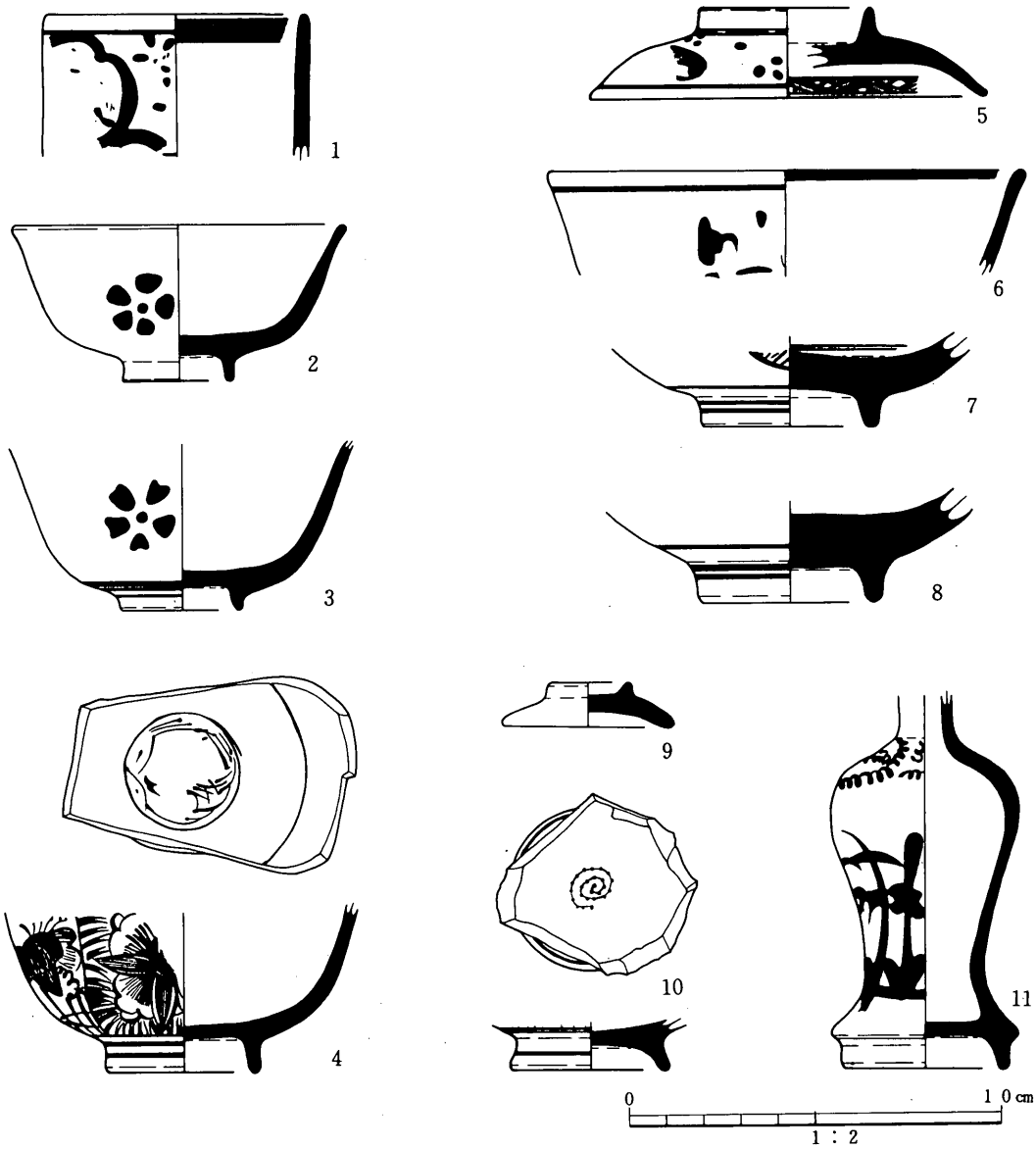
出土遺物には、染付碗（２～４・６～８・10・12・13・17・19・21）・染付蓋（５）・染付中皿（15・16・22）・染付徳利（11）・白磁碗（18・20）・白磁蓋（９）・青磁香炉(14）がある。



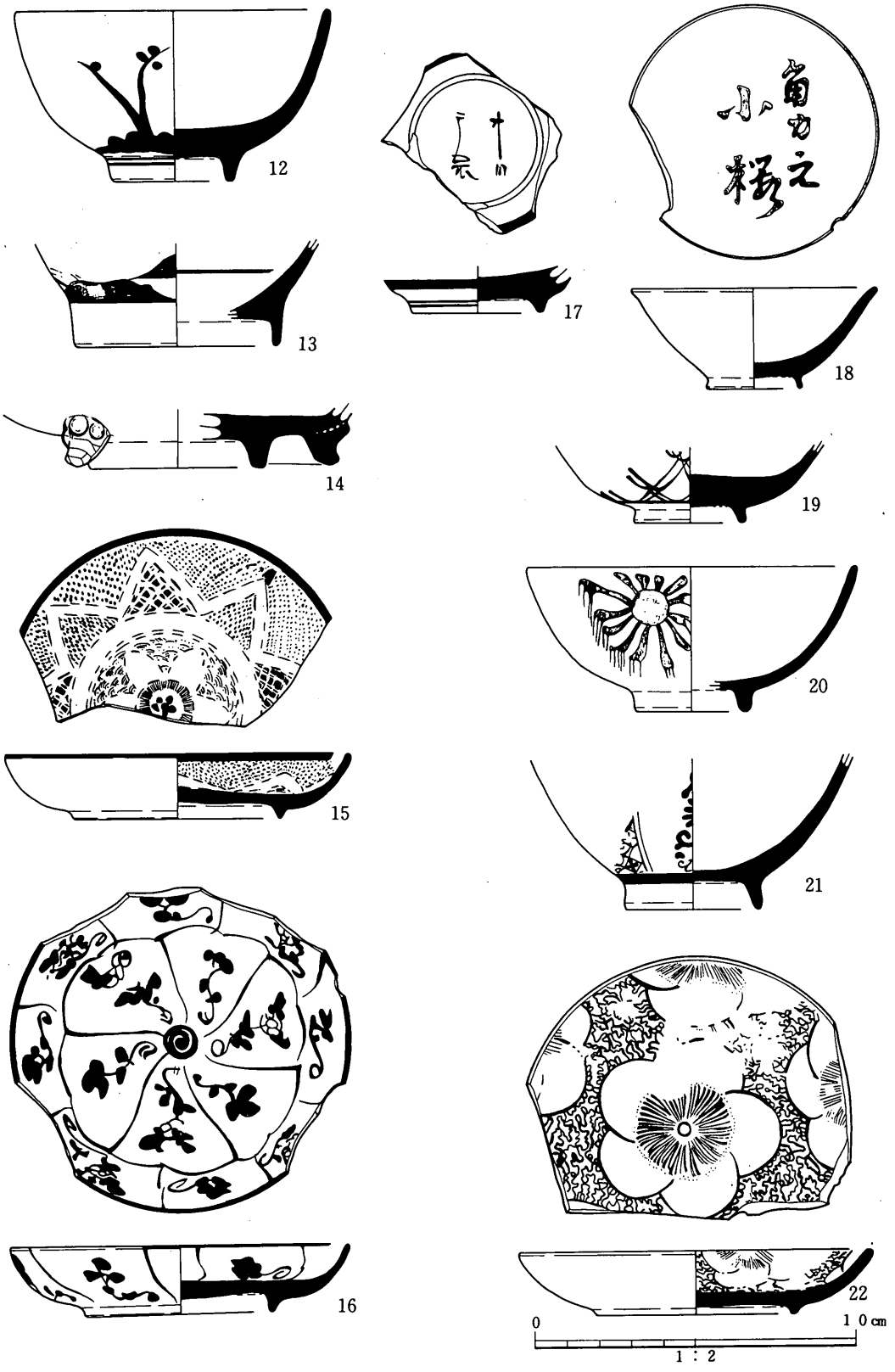
第６図　調査地Ⅳ区遺構配置図・断面土層模式図

碗２・３の外面は型紙摺による花文が施され、碗19の外面には二重網目文が施される。また、碗８の外面底部には一重区画内に「福」字銘（渦福）、碗17の外面底部には、崩しが著しく判読困難である「大明年製」（？）銘が見られる。碗７・８・10・12・14・19は、いわゆる「くらわんか茶碗」であり、碗13は「広東碗」である。徳利11は肩部に蛸唐草文、胴部には松竹梅文が施される。

おおむね18～19世紀代の国内産磁器である。また、調査地Ⅳ区においては「寛永通寶」が出土している。



第７図　井戸ＳＥ01（１）、溝ＳＤ02（２～11）出土遺物

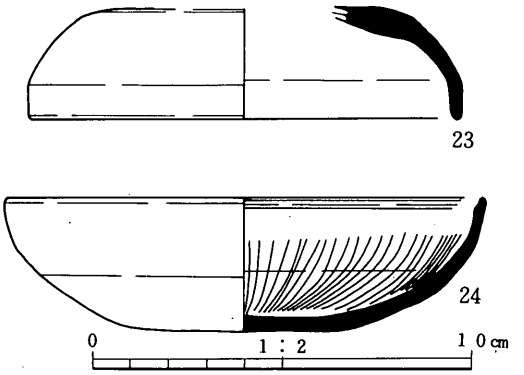


第8図　溝ＳＤ02(12～22)出土遺物

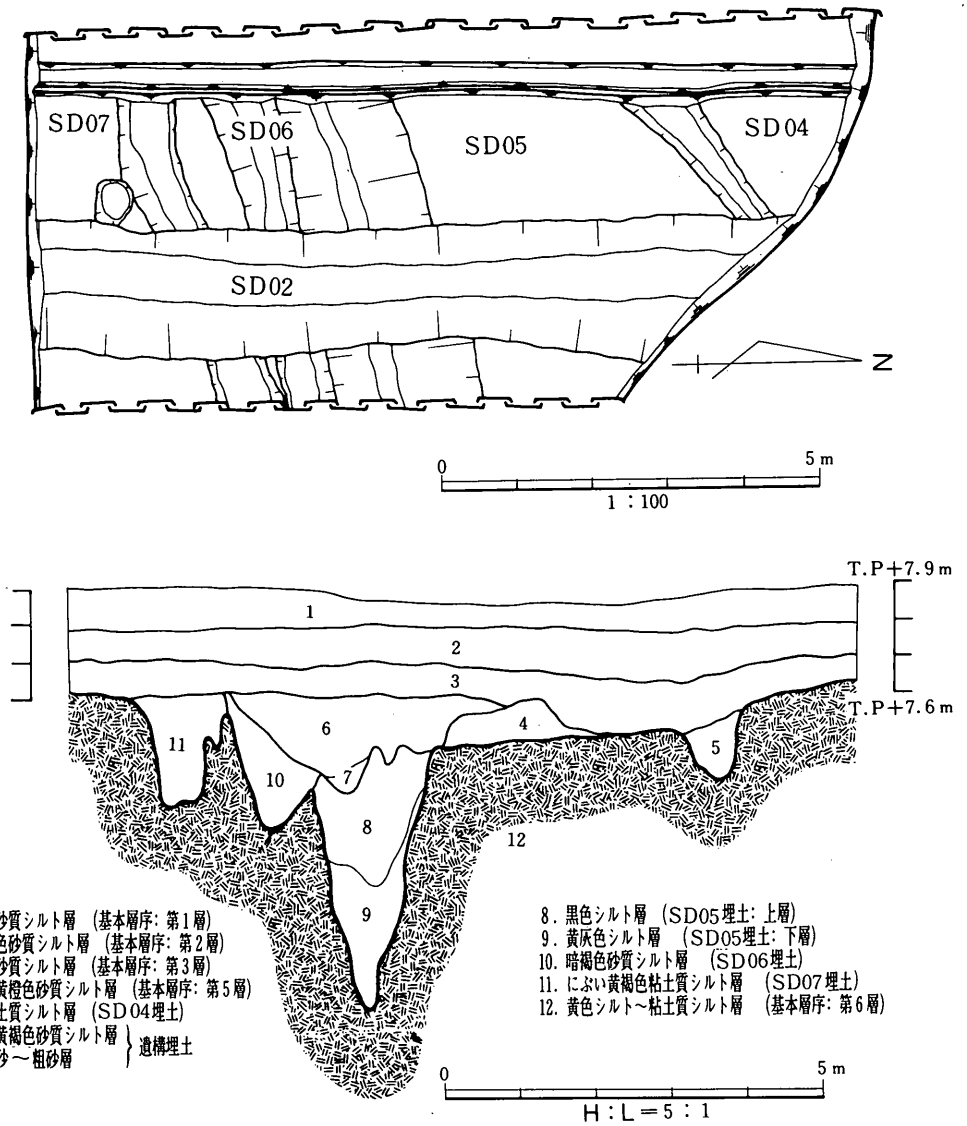
iv）溝ＳＤ03(第６・９図：図版３・15)

調査地Ⅳ区で検出された北東～南西方向の溝である。幅 1.3m、深さ30cmを測り断面形が逆台形状を呈する。埋土は、褐灰色シルト（上層）と黒褐色細砂混じりシルト(下層)に大別できる。下層から須恵器坏蓋(23)、土師器坏（24）が出土している。

坏蓋23は、口縁端部を丸くおさめ、外面



第９図　溝ＳＤ03(23・24)出土遺物



第10図　調査地Ⅴ区遺構配置図・断面土層模式図

体部から内全面に回転ナデ調整をうける。外面天井部はヘラ切り未調整である。陶邑ＴＫ209型式に相当する。

坏24は、底部から体部に丸味を持ち、口縁端部内面は段をもって傾斜する形態を示し飛鳥・藤原の坏Ｃ類にあたる。内面には正放射状暗文が施される。飛鳥・藤原地域の土器編年「飛鳥Ｉ」に相当する。

v）**溝ＳＤ04**（第10図：図版４）

調査ｖ区で検出された幅50cm、深さ20cmを測り、断面形が浅い皿状を呈する東西溝である。埋地は、褐色粘土質シルトである。

vi）**溝ＳＤ05**（第10～15図：図版４～６・13・14）

調査地Ｖ区で検出された幅 1.6m、深さ60cmを測り、断面形がＵ字形を呈する東西溝である。埋土は、黒色シルト（上層）と黄灰色シルト（下層）に二分される。上層より弥生土器壺（25・26）・甕（27～40・42）・鉢（41）・底部（43～55）、下層より、弥生土器壺（56）・甕（57）が出土している。

壺25・26は、頸部から屈曲して大きく外反する口縁部を持ち、口縁端部は面を成す。甕は、口径15cm程の小型化したものがほとんどである。甕27・28・30・31は、口縁端部を上方へつまみ上風に仕上げ、甕28・30・31の口縁端部には擬凹線が見られる。

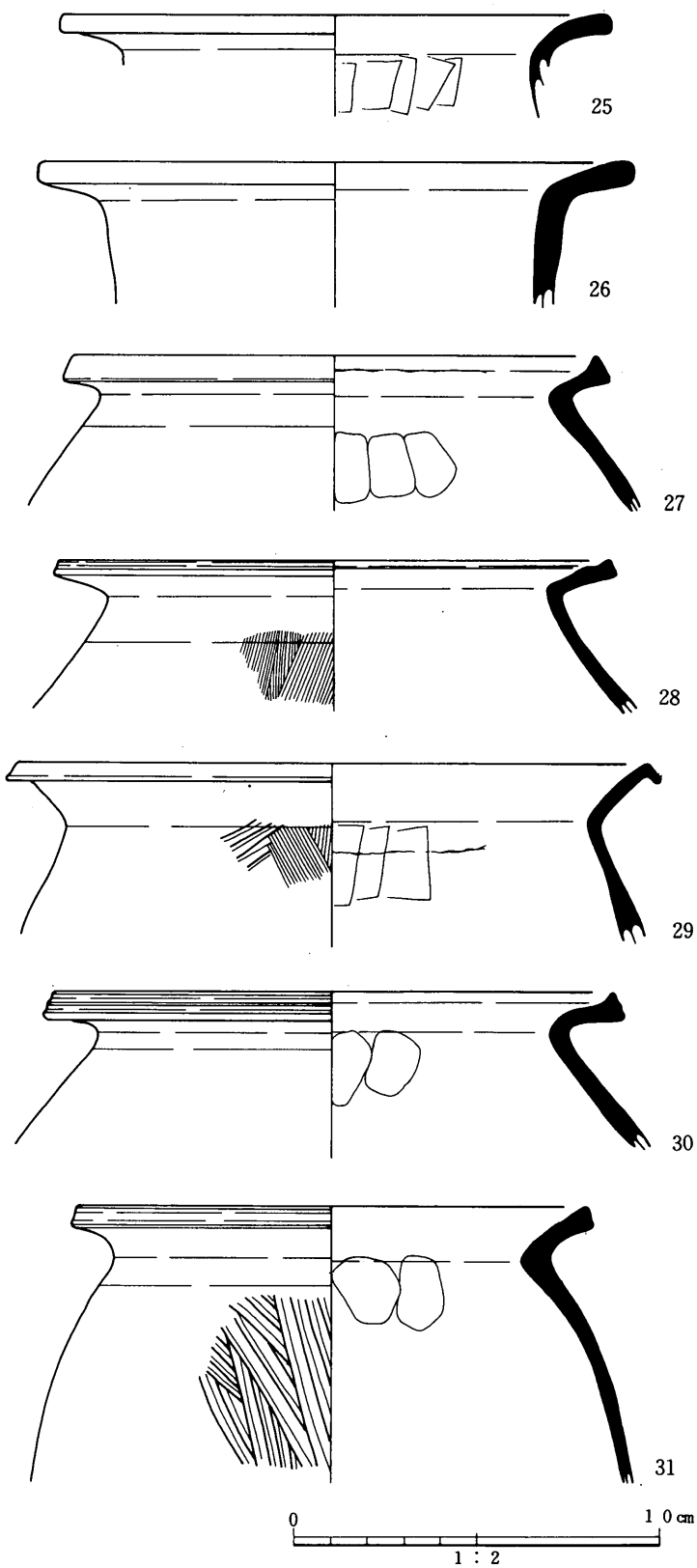
甕32～40は、口縁部が「く」の字状に外反し、口縁端部丸くおさめるもの（32～36）、明確な端面を持たないもの（37～40）がある。甕32・34・37は、いわゆる「口縁叩き出し手法」（註１）によるものである。

甕42は、体部が球形化する大型の甕である。口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部はわずかにつまみ上風であり端面は面を成す。

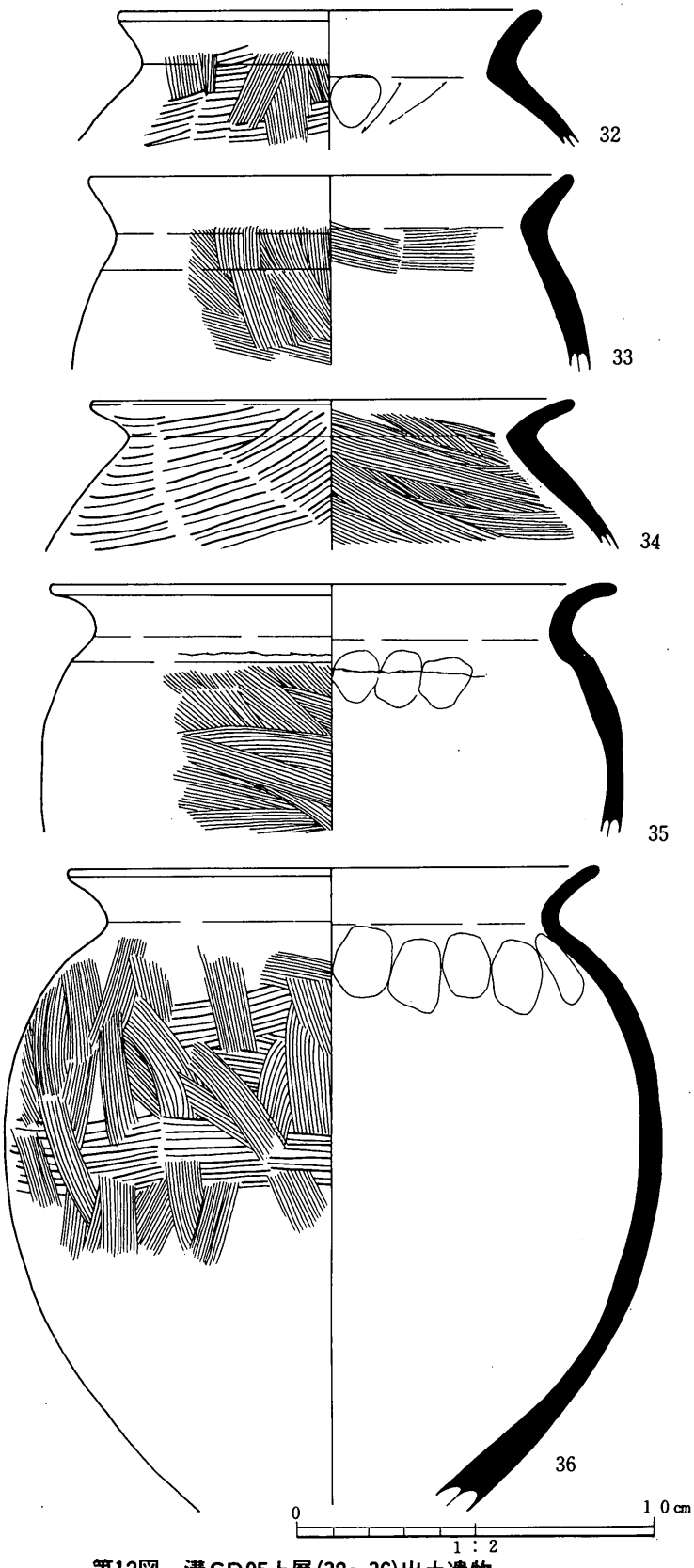
甕36の叩き板の主軸方向は水平、甕42は、右上りと右下りが交錯する。共に、叩きの後に刷毛調整を受ける。鉢41は上げ底であり穿孔を受ける。

底部43～55は、平底の形態を残すが、底部48・54のように丸底化への兆しを示すものも見られる。

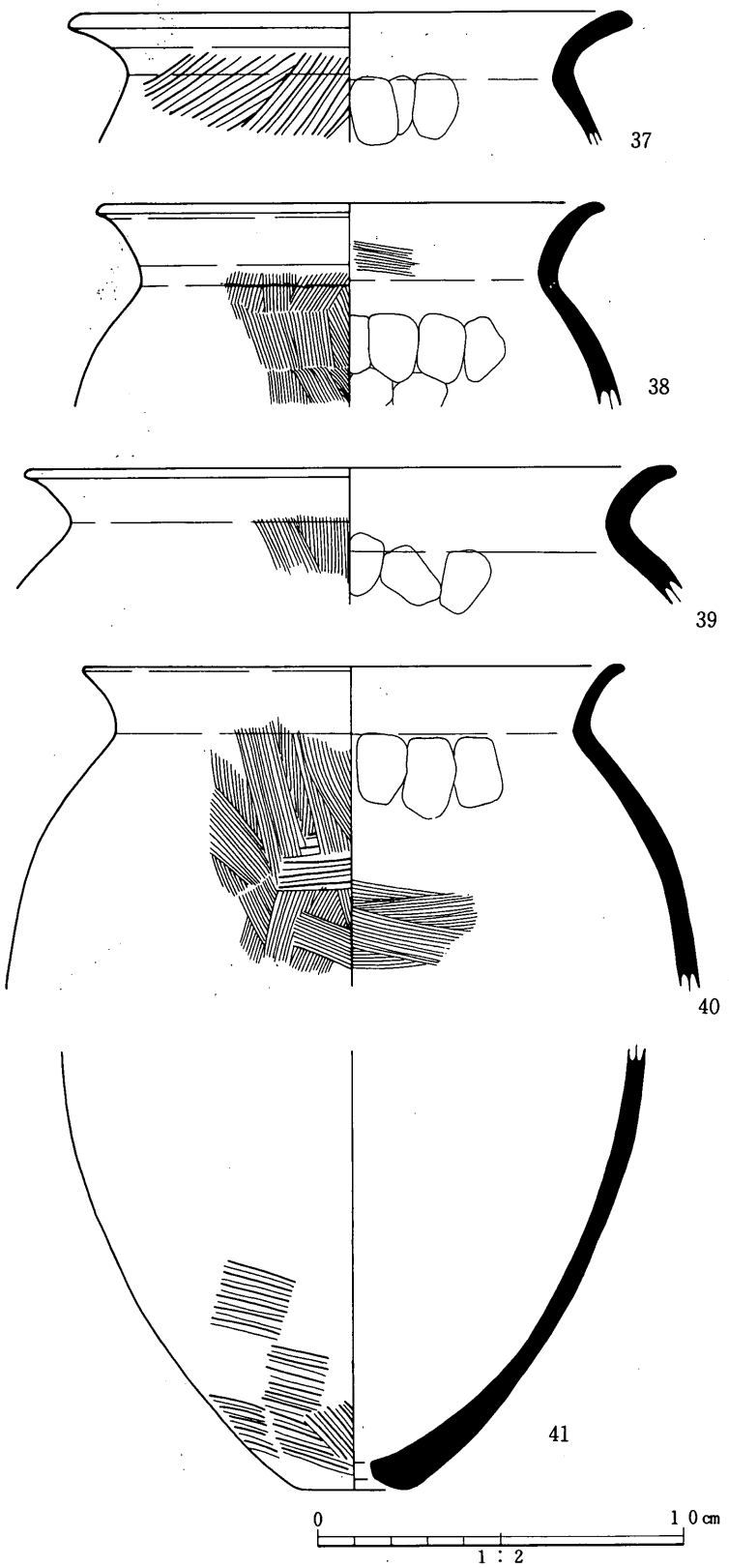
壺56 は、頸部から大きく外反する口縁部をもち、口縁端部を上下に突出させる。『紫雲出』の壺Ａ$_2$にあたる。口縁端面には、凹線文＋竹管押捺円形浮文＋篦描き沈線による斜格子文を施す。頸部には、粗い刷毛調整後に篦描き沈線文が施され、その下位には、断面三角形の貼付け刻目突帯を２条めぐらす。口縁部内面には、櫛描き直線文が施され、口縁部直下に蓋受けの孔をあける。



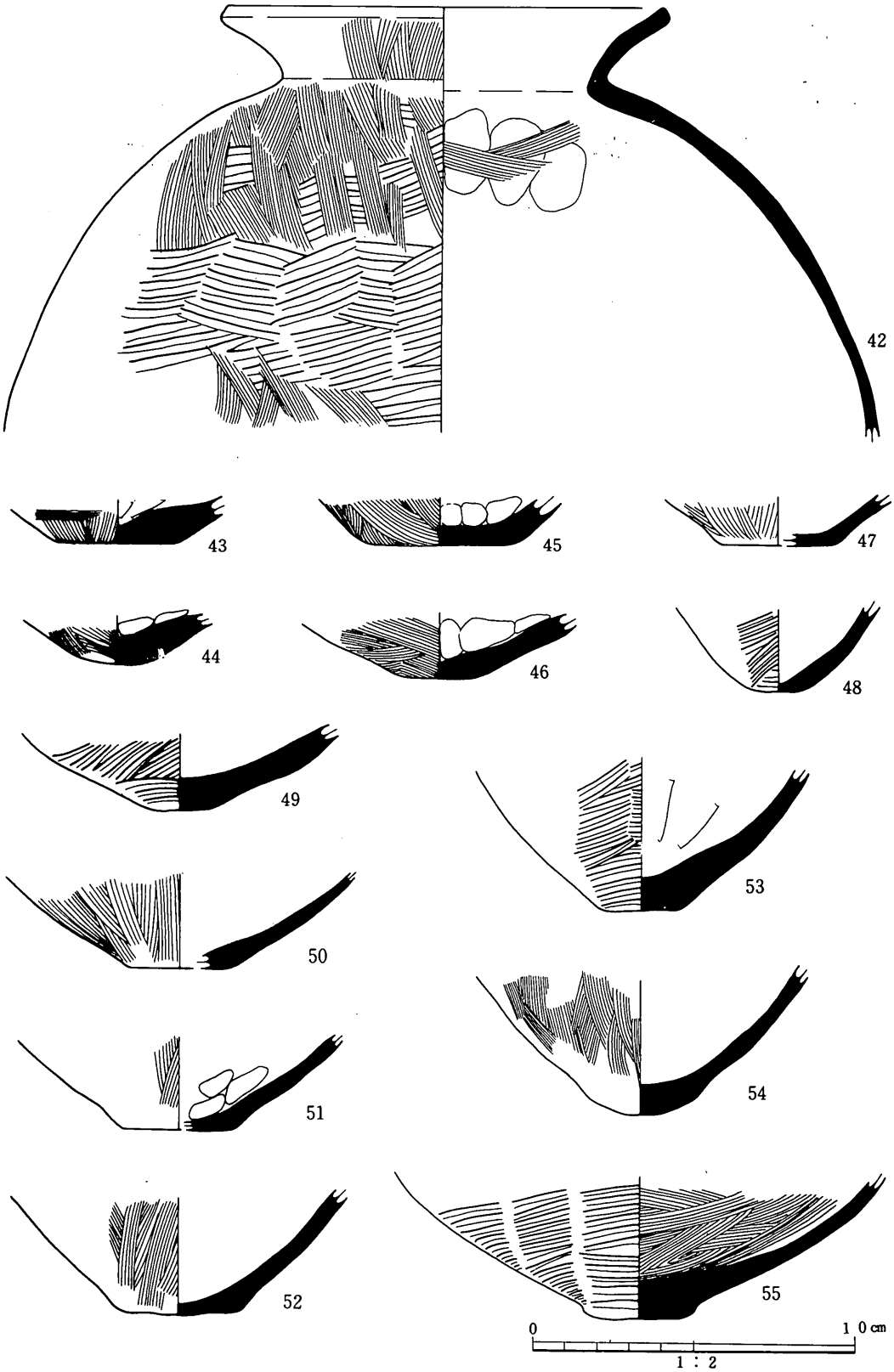
第11図　溝 SD 05 上層(25～31)出土遺物



第12図　溝SD05上層(32～36)出土遺物

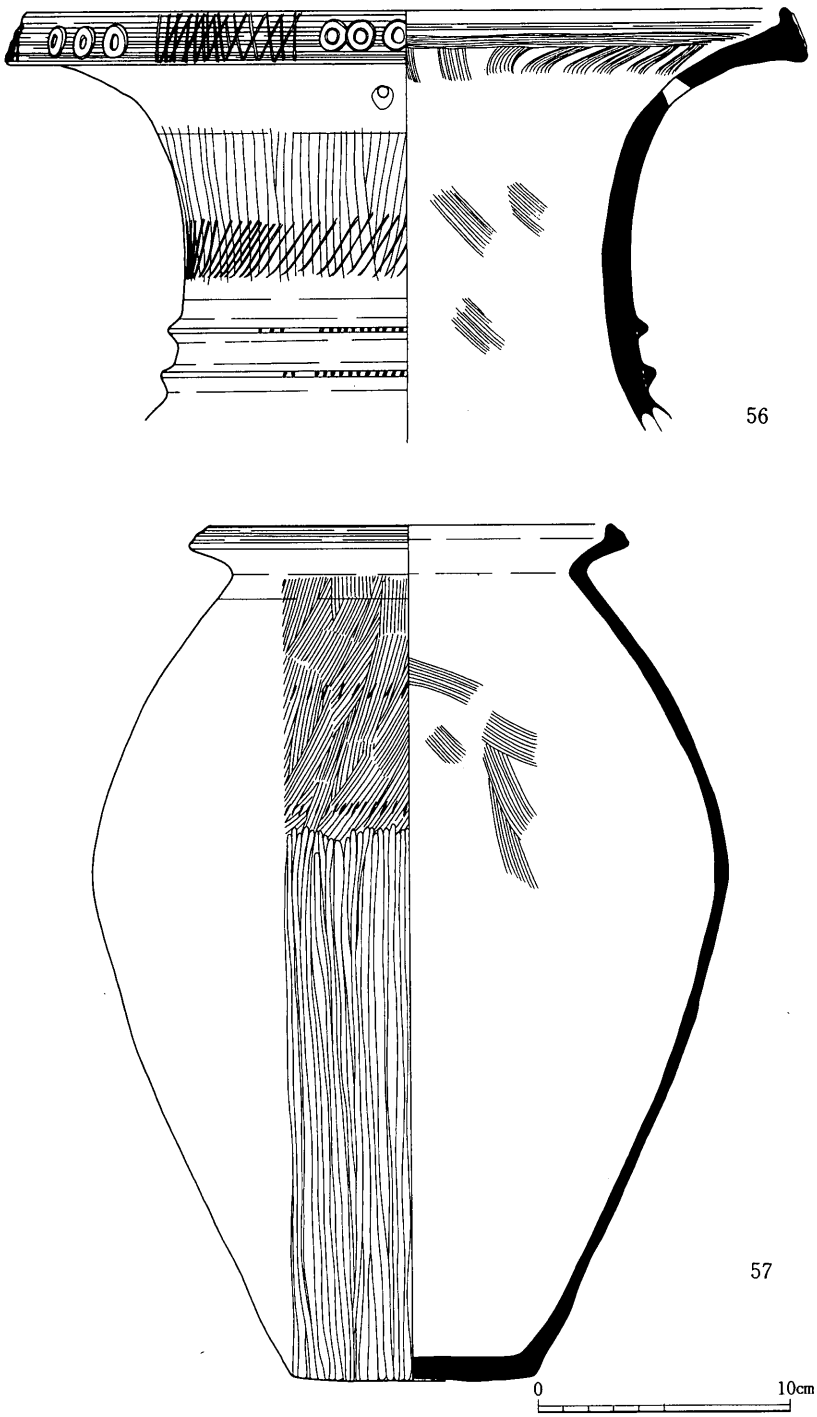


第13図　溝SD05上層(37～41)出土遺物

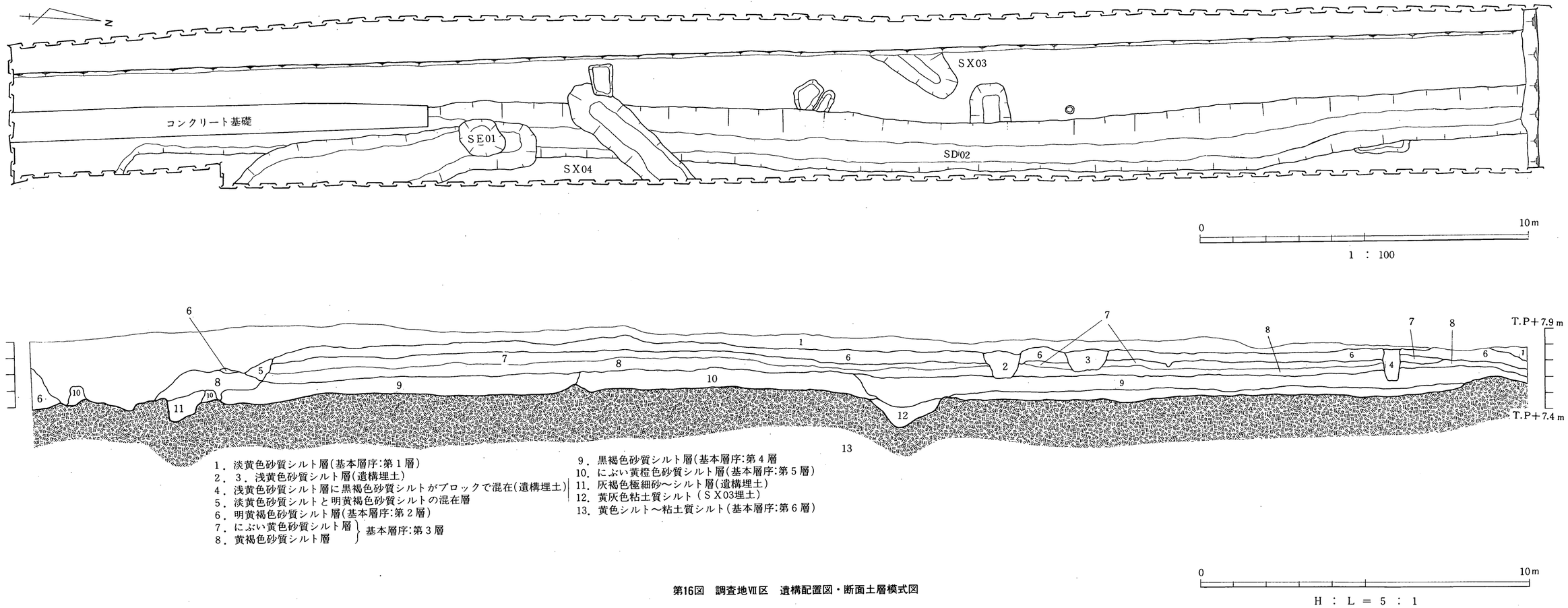


第14図　溝SD05上層(42～55)出土遺物

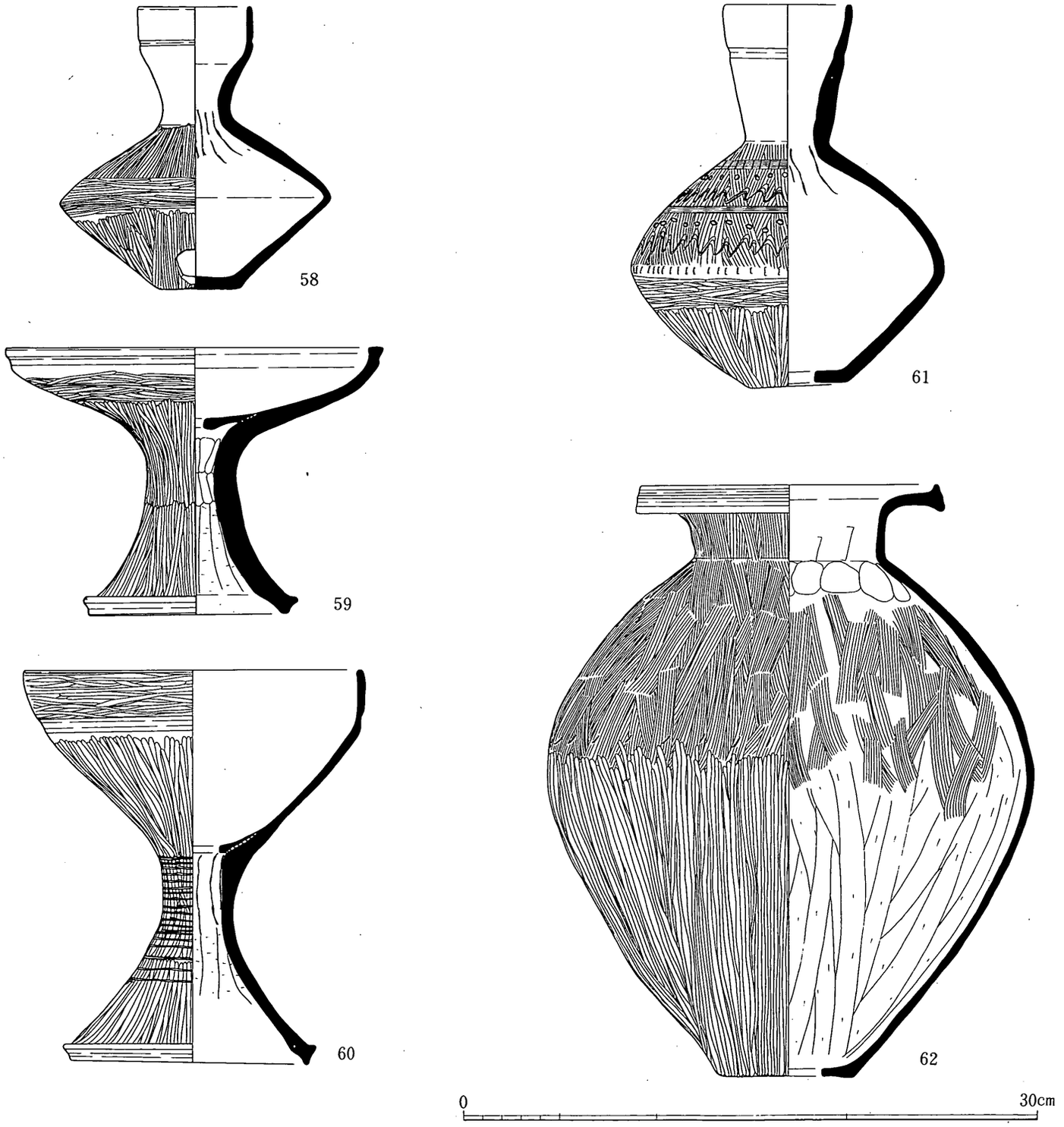
甕57は、「く」の字状に屈曲する口縁部をもち、口縁部を上方に突出させる。『紫雲出』



第15図　溝SD05下層(56・57)出土遺物



第16図　調査地Ⅶ区　遺構配置図・断面土層模式図



第17図　方形周溝墓ＳＸ04（58～62）出土遺物

の甕2 にあたる。口縁端面には凹線文を施す。外面上位２／５は刷毛調整後、刺突列点文が施され、下位３／５は縦方向のヘラミガキが施される。

vii）**溝ＳＤ06**（第10図：図版４）

調査地Ｖ区で検出された幅70cm、深さ20cmを測り、断面形が浅い皿状を呈する東西溝である。埋土は、暗褐色砂質シルトである。

viii）**溝ＳＤ07**（第10図：図版４）

調査地Ｖ区で検出された幅80cm、深さ30cmを測り、断面形が逆台形を呈する東西溝である。埋土は、にぶい黄褐色粘土質シルトである。

ix）**井戸ＳＥ01**（第７・16図：図版７）

調査地Ⅶ区で検出された平面形が不整円形を呈し、直経 1.5m、深さ 1.6mを測る素掘り井戸である。埋土は、灰白色～オリーブ灰色シルト～シルト質粘土である。

出土遺物には、染付碗（１）がある。

x）**方形周溝墓ＳＸ04**（第16・17図：図版８・９・15）

調査地Ⅶ区において検出された方形周溝墓である。調査地区内において、西溝と北溝の一部が検出され、全容は明確ではないが、推定長辺10m、短辺７mの平面形が長方形を呈し、幅１m、深さ60cmを測る断面形がＵ字状を呈する周溝が巡らされるが、周溝は四隅で途切れる。埋土は、黒色シルト（上層）と黄灰色シルト（下層）に二分される。下層より弥生土器壺（58・61・62）・高坏（59・60）・碧玉製管玉が出土している。

壺58は、頸部はゆるやかに外反し凹線を１条配し、直立する口縁部を持つ。体部は、ソロバン玉形を呈し、体部上半～下半への屈曲は鋭い。外面体部は縦横位のヘラミガキが施され、体部下位に穿孔を受ける。

壺61は、頸部が直線的に斜め上方へ立ち上がり、凹線１条を配して口縁部にいたる。外面体部上半は、刷毛調整後に櫛描簾条文・円形竹管文・櫛描波状文・櫛描直線文・刺突列点文が施され、外面体部下半は、縦横位のヘラミガキが施される。底部穿孔である。

壺62は、頸部から大きく外半する口縁部をもち、口縁端部を上下に突出させる。口縁端面には凹線文が施される。外面体部上位2／5は、刷毛調整後に刺突列点文、下位３／５は縦位のヘラミガキが施される。内面体部上位２／５は、刷毛調整、下位３／５は縦位のヘラケズリが施される。底部穿孔である。

高坏59は、坏部は皿形を呈する。坏体部はゆるやかに立ち上がり、口縁部は短く垂直に立ち上がる。『紫雲出』の高坏Ｂ2 にあたる。口縁端部直下に１条の凹線を配し、わずかに

端部を左右に肥厚させる。口縁端面は面取る。また、脚部裾端部を上方に拡張し、端面に凹線が施される。外面は、縦横位のヘラミガキが施され、坏底部は「円板充填法」（註２）による。底部穿孔である。

高坏60は椀形を呈する。坏部は斜め上方に立ち上がり凹線を１条配し、口縁部はやや内弯気味に直立する。『紫雲出』の高坏Ｄ$_2$にあたる。脚部裾部を上下に振張し、端面に凹線が巡る。外面は縦横位のヘラミガキが施され、脚柱部には箆描き沈線文が施される。坏底部は「円板充填法」による。底部穿孔である。

xi）**不明遺構ＳＸ01**（第５図：図版３）

調査地II区で一部が検出された幅 2.5m、深さ70cmを測り、断面形がＵ字状を呈する溝状遺構である。調査地区内で一部を格出しており全容は明確ではないが、底部が急激に立ち上がり収束する形態を示す。埋土は、黒色シルトである。出土遺物には、弥生土器片がある。

vii）**不明遺構ＳＸ03**（第16図：図版７）

調査地VII区で一部が検出された幅２ｍ、深さ20cmを測り、収束する形態を示す溝状遺構である。埋土は、黄灰色粘土質シルトである。出土遺物には、弥生土器片がある。

４．小　　結

名東西都市水路築造工事に伴う発掘調査は、名東遺跡の西域部を東西・南北に延びるトレンチ調査的な役割を果たしている。昭和61・62年度の調査においては、断片的であるが貴重な成果を得ている。

徳島市域における方形周溝墓の検出例は、昭和57～58年の庄町１丁目・徳島大学蔵本団地地区（体育館地点）における発掘調査にみられる。しかし、当時、方形周溝墓としての指摘はなされていない（註3)。調査地VII区で検出された方形周溝墓ＳＸ04は、部分検出にとどまり、その形態は明確ではないが、土器がすべて穿孔を受けた供献状態の出土状況であることから、周溝墓としての可能性を当初より示唆した（註４）。同年、名東町2丁目・天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査において、四隅が途切れる形態の方形周溝墓が明確なものとなる。弥生時代の集落における墓域空間を考える上で貴重な検出例である。

出土土器58～61は周溝底部での一括資料である。高坏59・60は『紫雲出』の諸型式に相当する。壺58・61の頸部及び高坏59・60の坏部に施された凹線文はいずれも単条であり、凹線文の簡略化が進行している状況を示すものであろうか。また、壺61には、櫛描文様が

多用されているが、全般的に無文化の傾向が強く窺われる。これからは後期（畿内第Ⅴ様式）を指向した中期（畿内第Ⅳ様式）終末期の様相を示す資料であろうか。

調査地Ⅴ区において検出された溝ＳＤ05は、上層と下層の出土遺物の間に時期差が認められる。下層出土土器の壺56は、頸部に貼付け突帯を持ち、口縁端面には凹線文＋竹管押捺円形浮文の装飾法が採られ、甕57には、外面刷毛目＋ヘラミガキが施され中期（畿内第Ⅲ～Ⅳ様式）の伝統をとどめる。上層出土土器は、調整手法・各細部の形態に後期（畿内第Ⅴ様式）後半～終末の様相が強く窺われる。

現在、弥生土器に対する編年観は、畿内編年に立脚するものであり、当地域出土の弥生土器に対する編年観は確定的であるとは言えない。今後、良好な層位的出土例を以て、弥生時代の土器編年の確立が急がれる。

また、調査地Ⅳ区において検出された溝ＳＤ03出土遺物は、6世紀終末～7世紀初頭に比定される。この時期の遺物の検出状況は、名東遺跡においては稀薄であるが、今回の検出例により、周辺部での存在が明確なものとされる。

調査地Ⅱ・Ⅲ区において検出された鮎喰川水系の旧河道は、その埋没時期に関しては明確ではない。調査地における堆積土層の観察からではあるが、一つの可能性としての埋没過程及び景観復原を試みる（第３図）。

旧河道下部に堆積する９・21～23のにぶい黄色系の粘土質シルト層は、旧河道の泥炭あるいは、沼化に伴う埋積土と考えられる。鮎喰町１丁目・国府町和田～南岩延～不動西・本町等の鮎喰川沿岸部の旧河道の氾濫原地帯に同相の堆積土が認められることを考慮すれば、氾濫原特有の堆積土である可能性が強い。この上位に堆積する11～20は、土壌の理学的反応（Feの酸化没澱・Mn汚染）を示す相互堆積層であり、潅漑水田耕土に特徴的に認められる（註５）。おそらく、旧河道の泥炭あるいは沼化は「水久保田」として、後世、水田経営に関しては好条件を備えていたのであろう。現在においても、広く水田風景が見られることからも、旧河道の氾濫原の土地利用は唯一、水田経営に限られていたと考えられる。しかし、この地域における過去の水田経営は必ずしも安定していたものであるとは言えない。それを顕著に示しているのが、６～８の砂礫層の水田耕土への嵌入である、「洪水」堆積層である（図版１）。洪水の水流方向は西方からのものであり、現在の鮎喰川の氾濫であることを示すものであろう。

鮎喰川は、名西郡神山町奥屋敷に水源を発し、神山町上分～下分～神領～広野～徳島市入田～一宮を経て、北方の吉野川に注ぐ。

徳島藩藩祖蜂須賀家政は、天正十三年（1585年）、渭津城（徳島城）築城に際し、西名東に大堤を築き鮎喰川を堰き止め、流域を変更したとされる（註６）。いわゆる「蓬庵堤」と呼ばれる堤防は、この工事に伴う築堤である。蜂須賀家政が手がけた一大事業は、蜂須賀綱矩・宗員の治世の享保年間（1716年－1736年）には高崎～高浜間が完成にいたり、ほぼ、現在の鮎喰川の景観を見るに至った。鮎喰川付替工事は、蜂須賀家政の徳島藩における政治・経済効果を高めるための一事業であり、本来、底湿地帯とされた鮎喰川流域においては自然地形に反するものとされている（註7）。その為、鮎喰川流域における洪水記録は極めて多い。近世以降においては、元禄八年（1695年）の鮎喰川洪水をはじめ、毎年のように鮎喰川氾濫の記事が見られる。特に、寛政三年（1791年）は、東西両堤防の決壊に及ぶ大洪水であったとされる（註８）。

今回の調査でみられた洪水痕跡がいつの頃のものであるかは明確でないが、文献資料における一事象を発掘調査により捉えることができたものであろう。今後、文献資料と考古遺物の検出例との対比において、周辺地域での土地利用形態及び景観復原がより明確なものになることが期待される。

このように、原始～中・近世に至る名東遺跡の様相に関しては、空白部ないしは、不明瞭な部分が多すぎる感は否めない。名東遺跡に関する調査・研究は端を発したばかりであり、今後の周辺地域での調査には、大きな課題が残されている。

（註）

註１．都出　比呂志「古墳出現前夜の集団関係」、『考古学研究』第20巻第４号、岡山、1974年、20～47ＰＰ。

註２．佐原　眞　「土器製作技術の変遷」、『紫雲出』、京都、1964年、116～130ＰＰ。

註３．徳島県教育委員会『庄遺跡徳大蔵本団地（体育館地点）地区発掘調査現地説明会資料』では、第３遺構面において「溝状遺構」として確認されている。

註４．第８回埋蔵文化財資料展『阿波を掘る』図録において報告。

註５．八賀　晋「発掘調査からみた古代水田の土壌環境」、『地理』Vol.28 №10、東京、20～29ＰＰ。

註６．石毛　賢之助『阿波史跡名勝案内』、徳島、1908年。

註７．飯田　義資編　名東自治協会『名東郡史』、徳島、1960年。

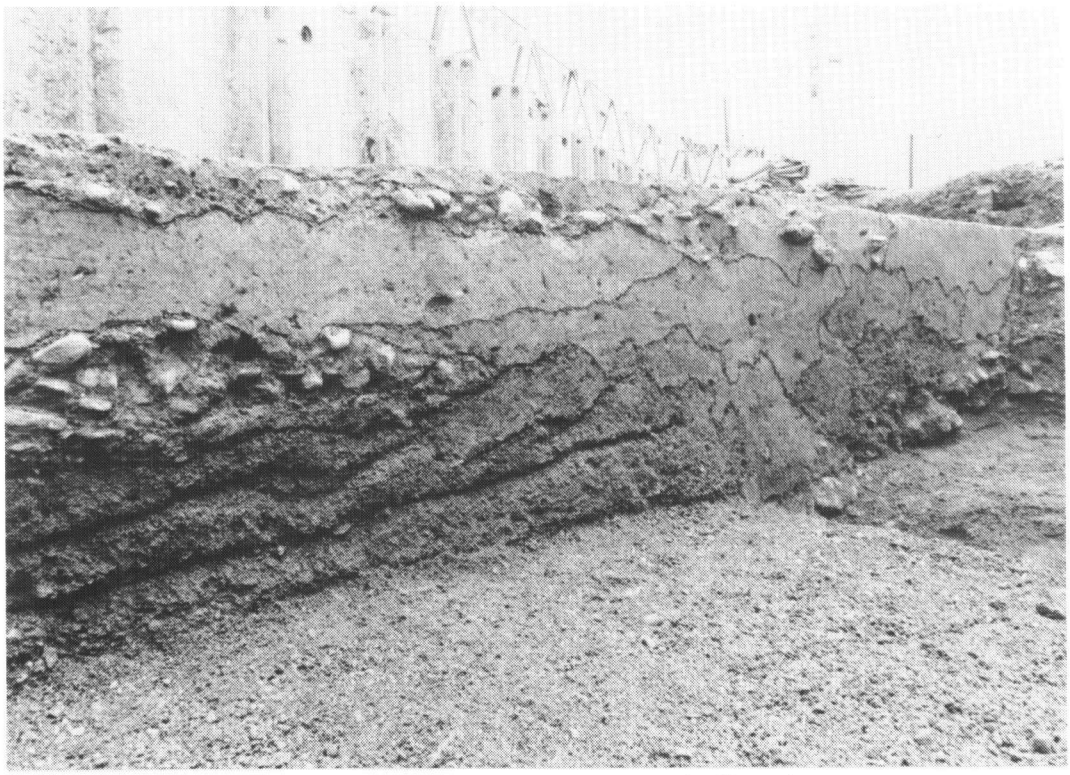
註８．徳島県史編纂委員会編『徳島県災異誌』、徳島、1962年。

調査地Ⅰ区全景　（東より）

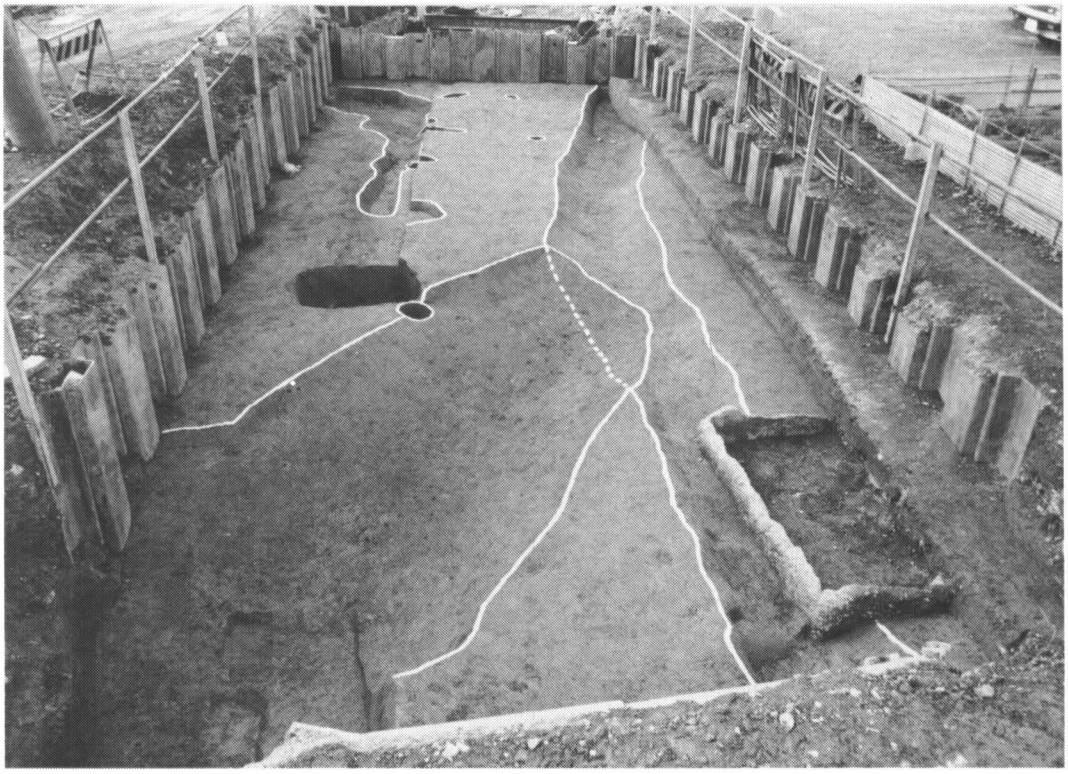
調査地Ⅰ区断面土層　（北東より）

図版2　検出遺構

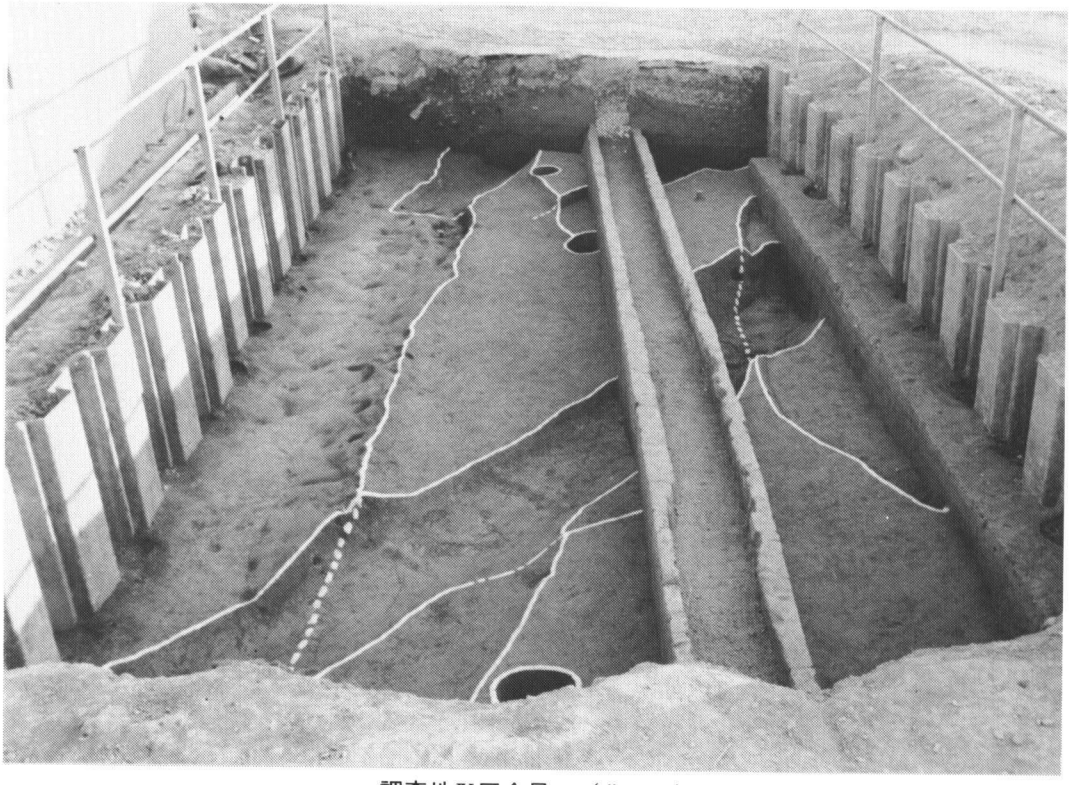
調査地II区全景　（西より）



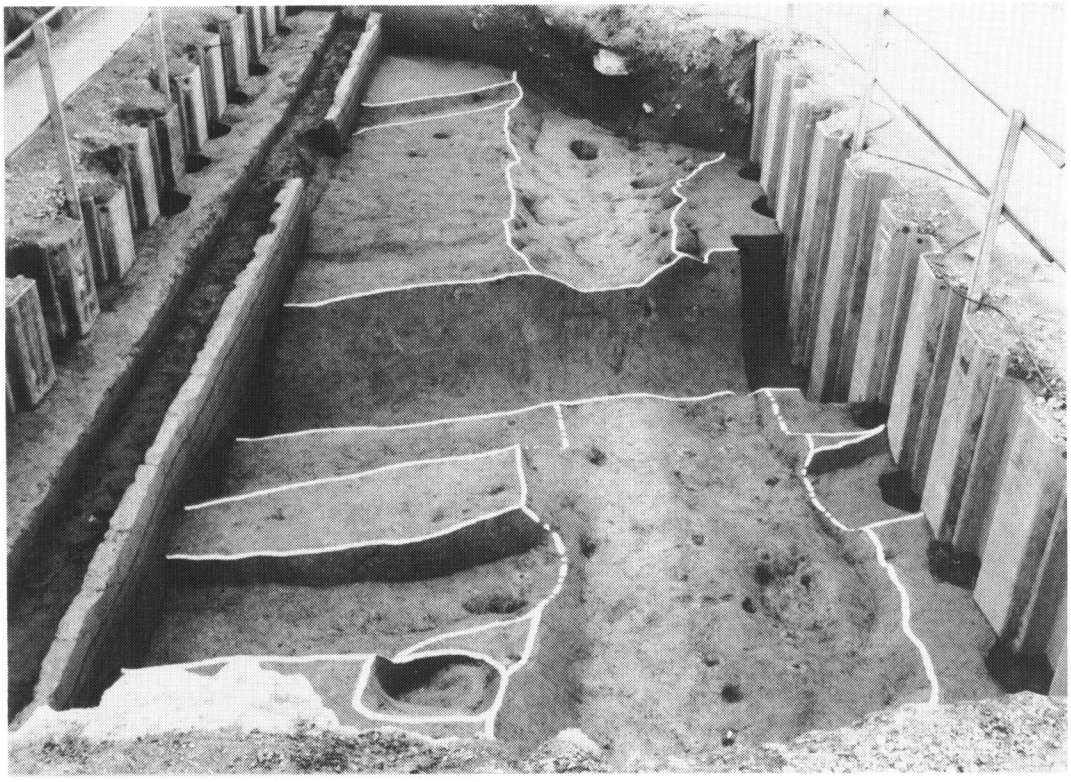
調査地II区旧河道部断面土層　（北東より）



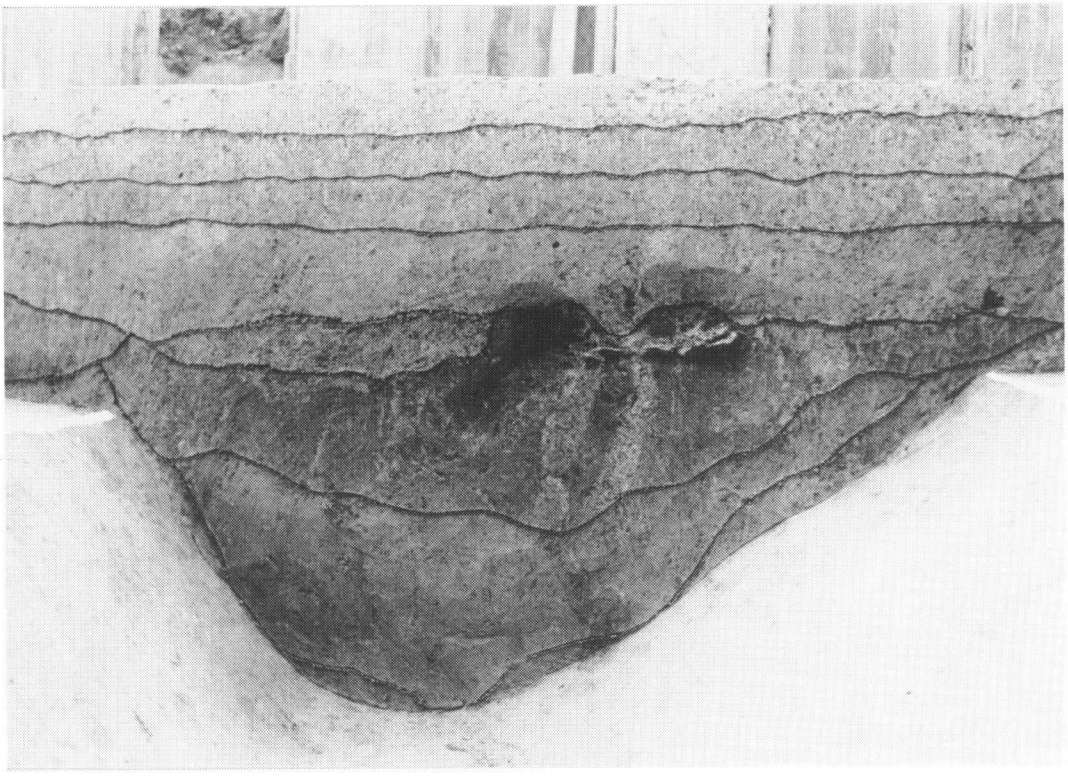
調査地Ⅲ区全景　（東より）



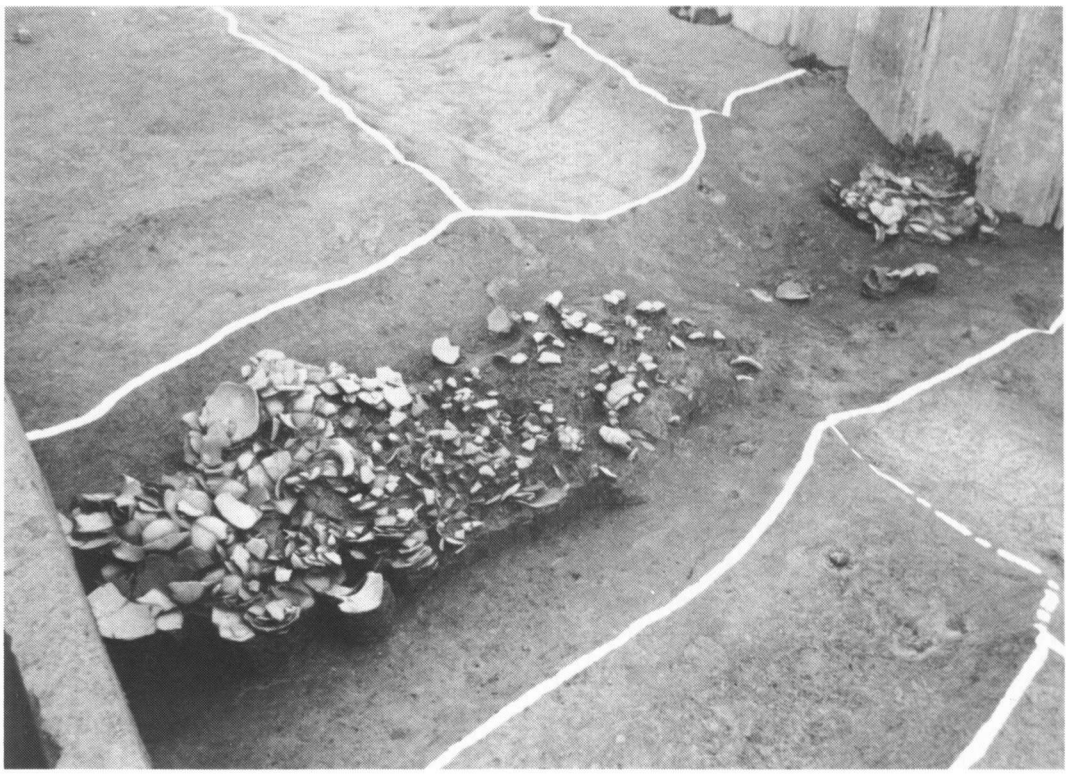
調査地Ⅳ区全景　（北より）



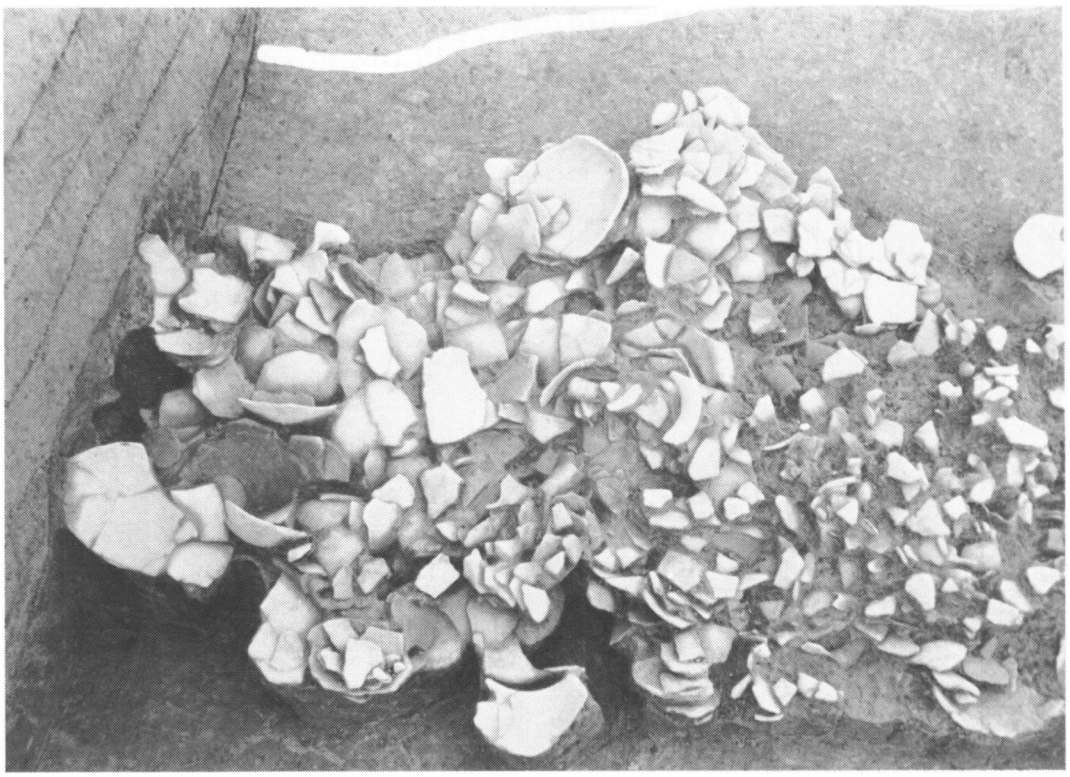
調査地Ⅴ区全景　（南より）



溝ＳＤ05断面土層　（北より）



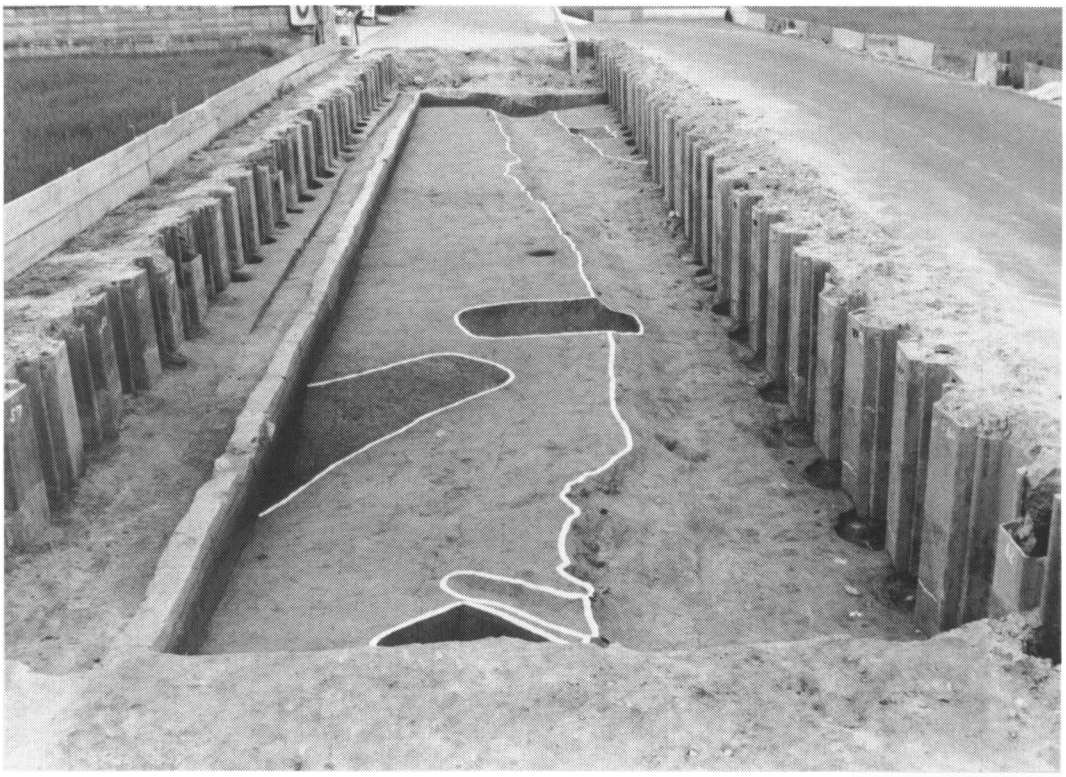
溝ＳＤ05上層　土器出土状況　（南西より）



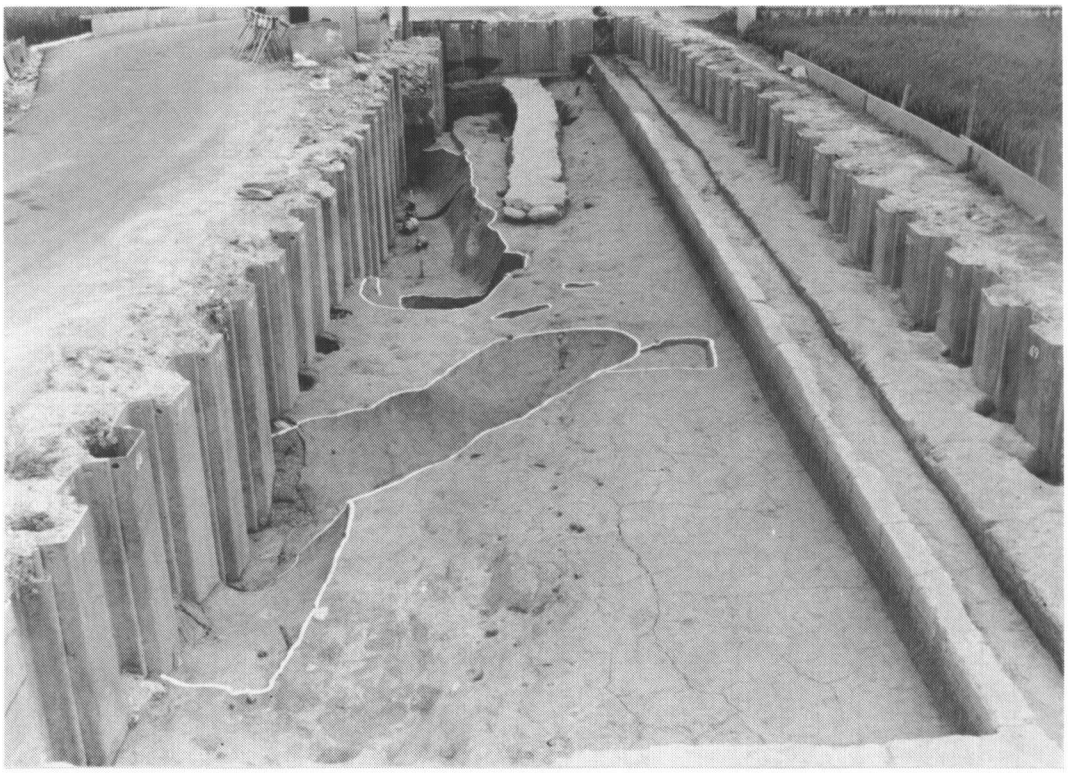
溝ＳＤ05上層　土器出土状況　（南より）

溝ＳＤ05下層　土器出土状況　（南西より）

溝ＳＤ05下層　土器出土状況　（南より）



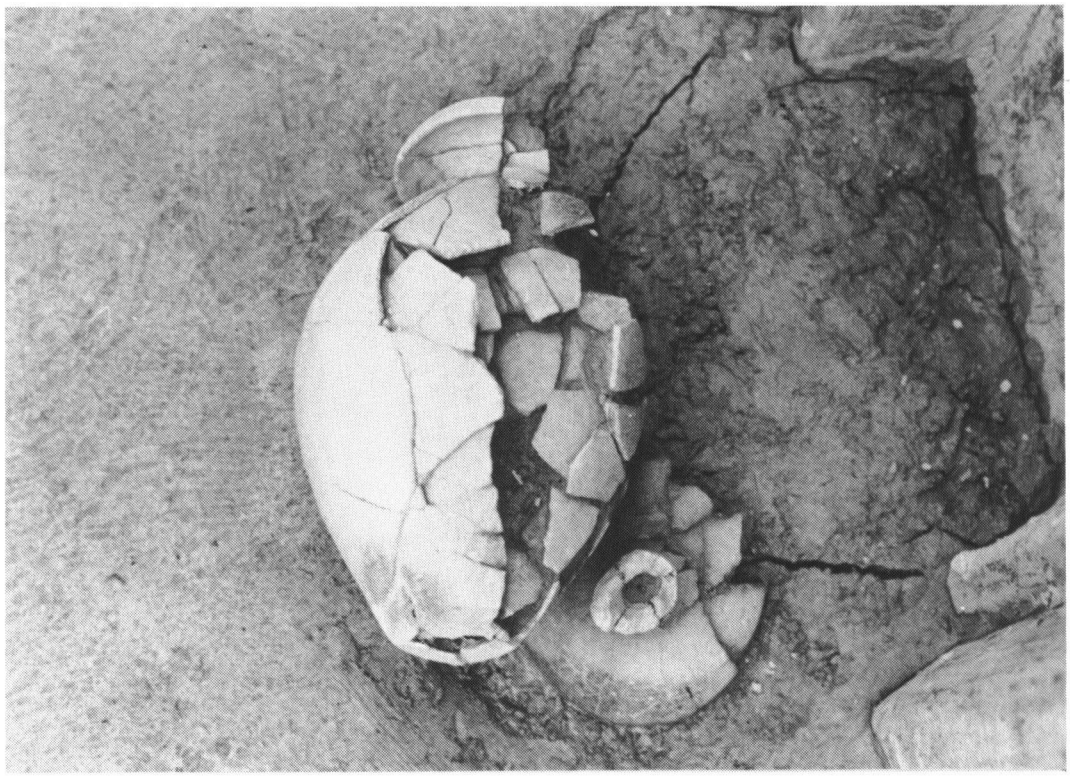
調査地Ⅶ区北半全景　（南より）



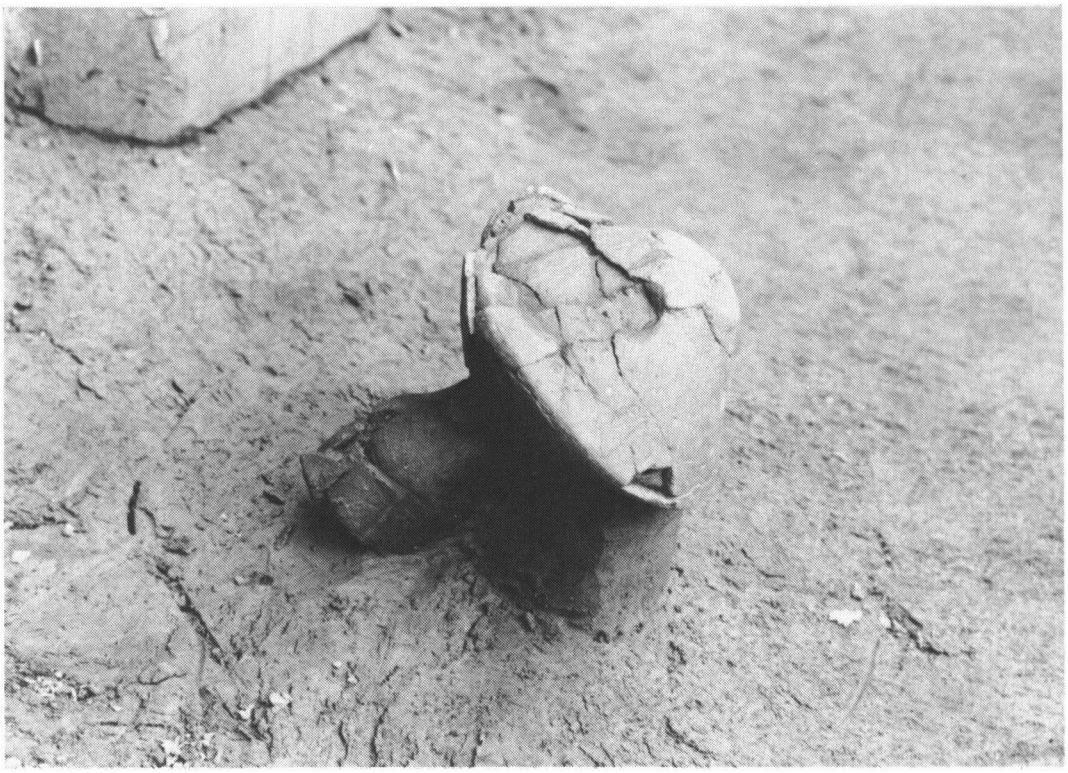
調査地Ⅶ区南半全景　（北より）

方形周溝墓 SX04　土器出土状況　（北西より）

方形周溝墓 SX04　土器出土状況　（南より）



方形周溝墓ＳＸ04　土器出土状況　（南より）

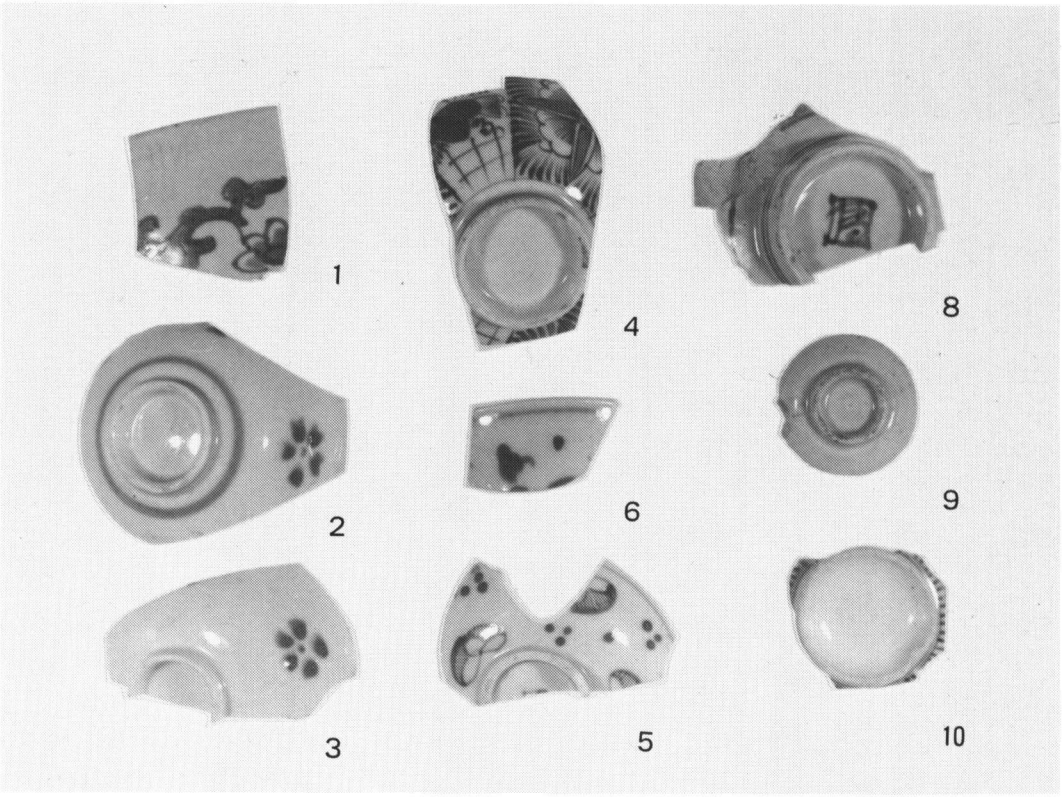


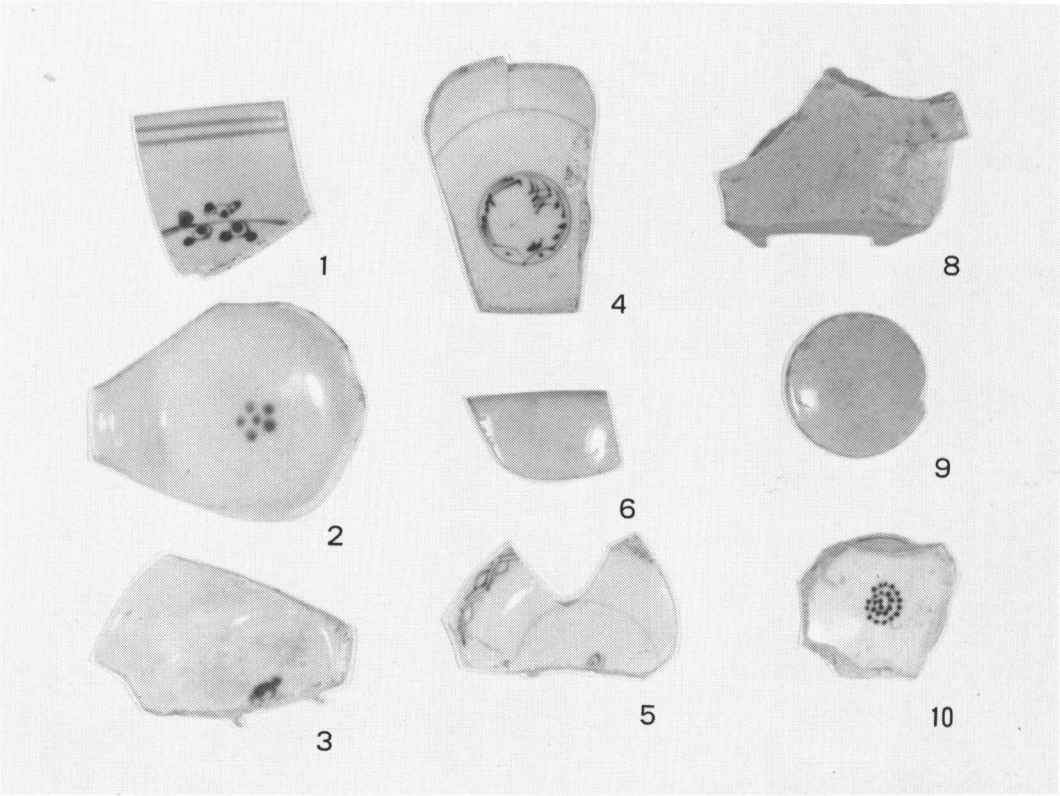
方形周溝墓ＳＸ04　土器出土状況　（北より）

図版10　検出遺構

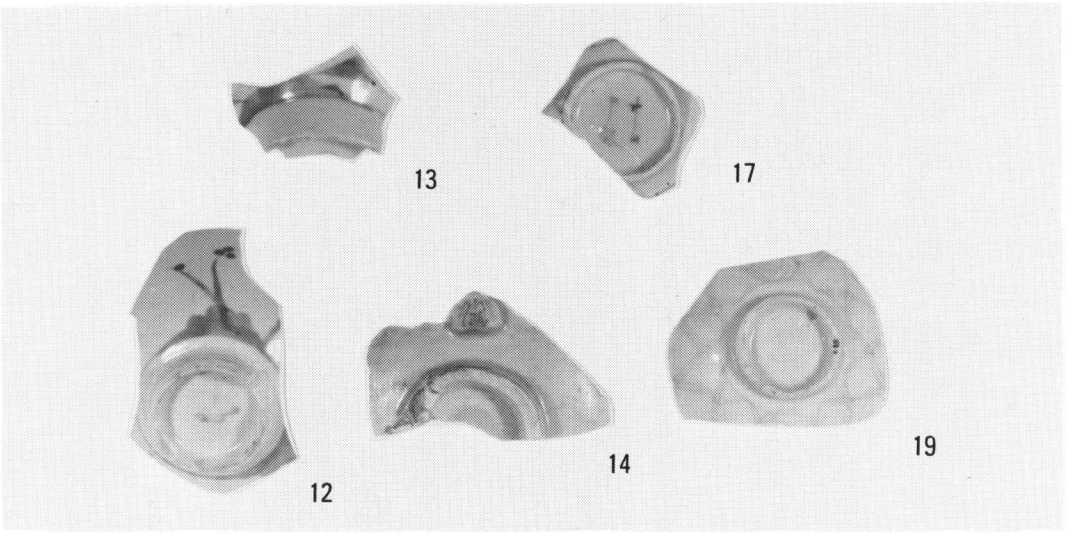
調査地Ⅷ区北半全景　（北より）

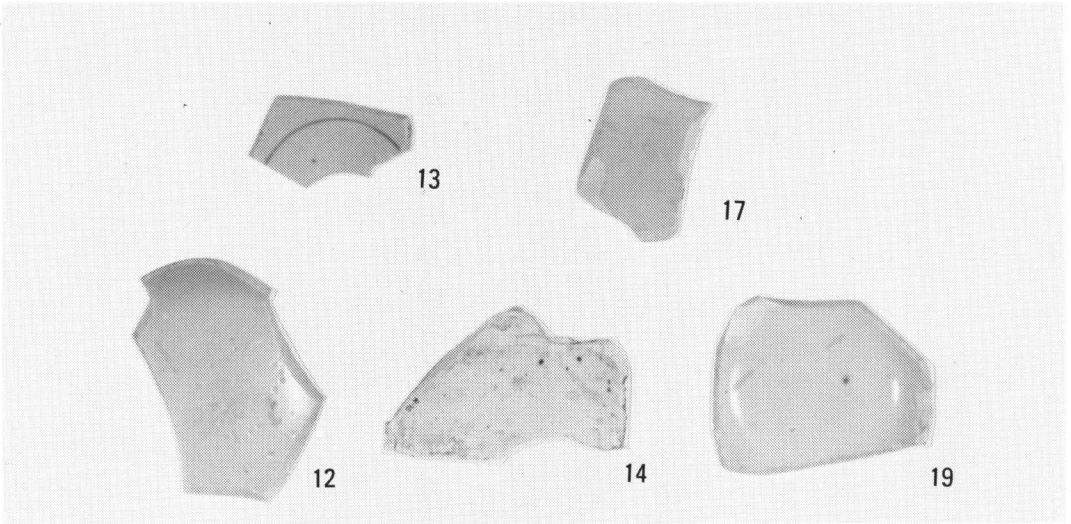
調査地Ⅷ区南半全景　（南より）

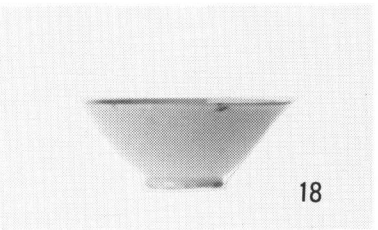


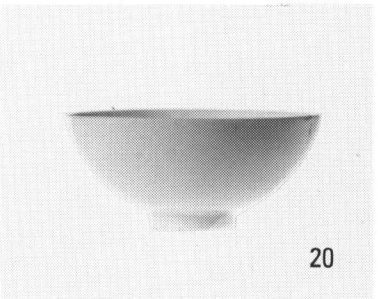


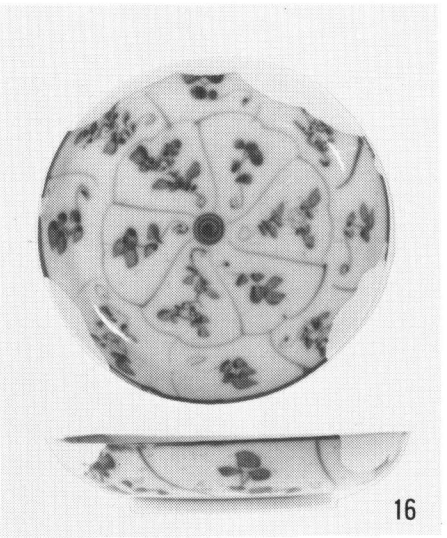
溝ＳＤ02（１～６・８～10）

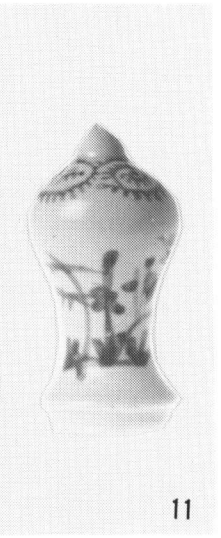




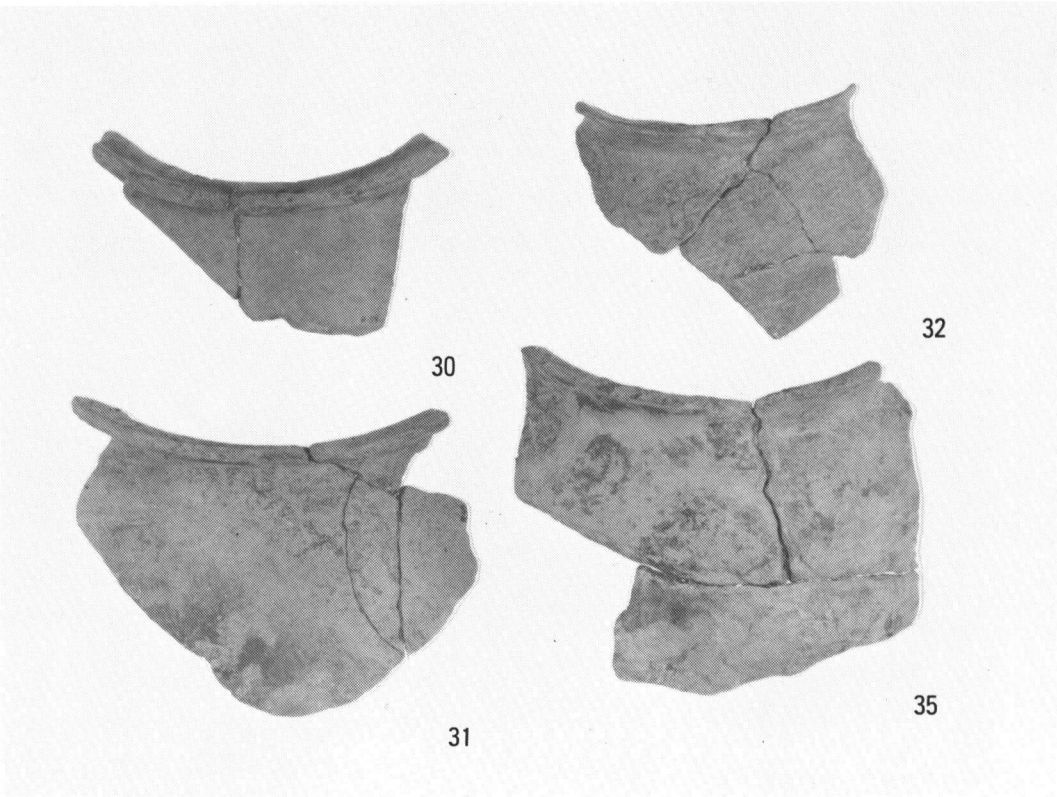


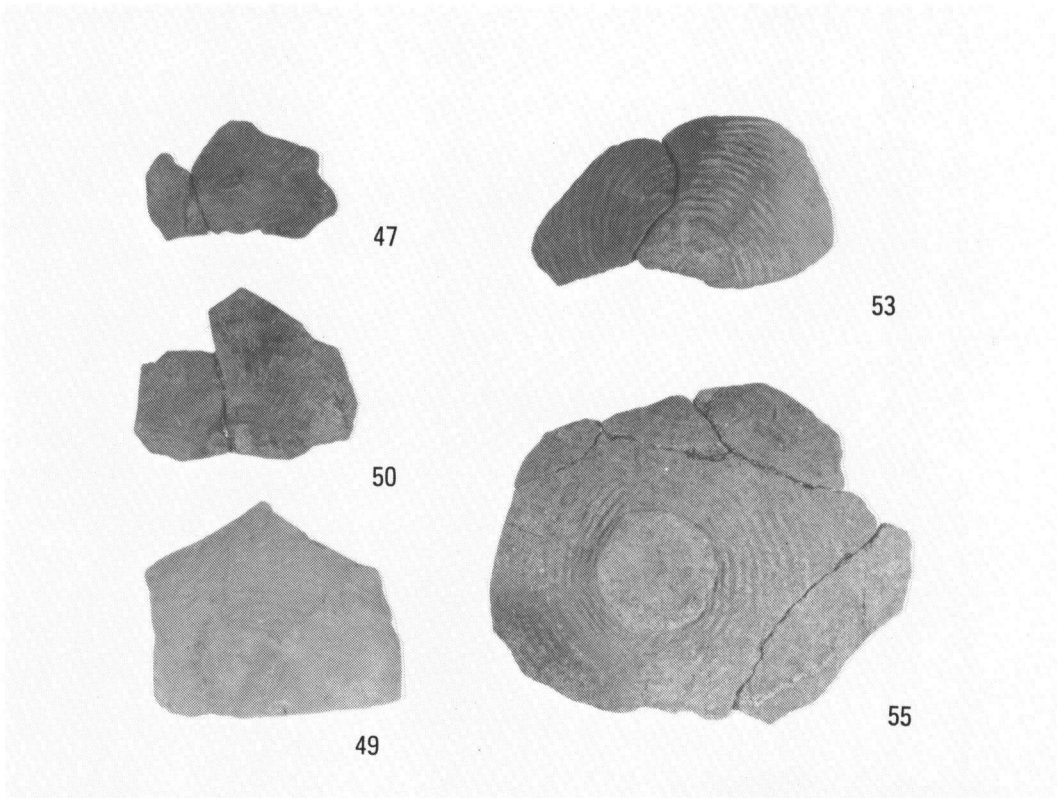




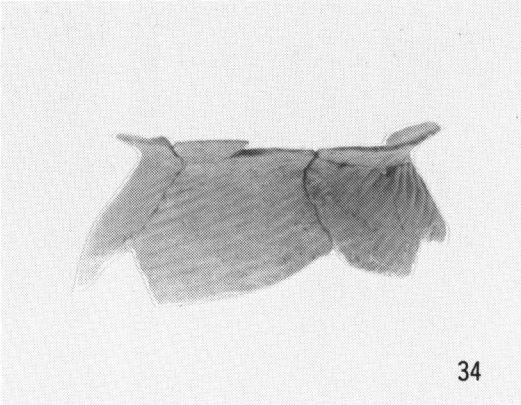


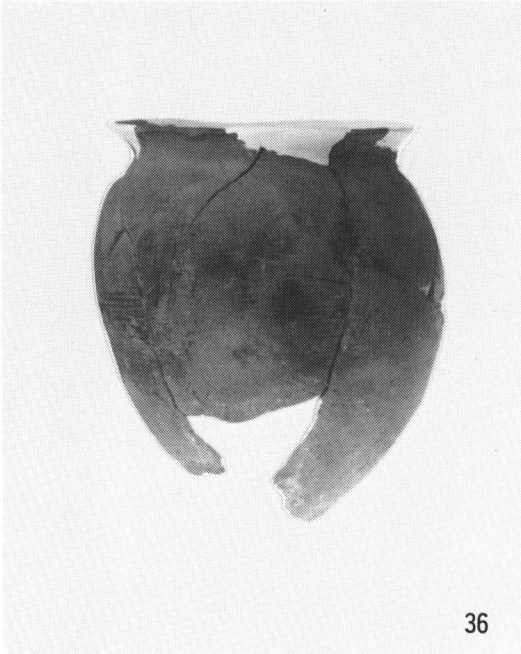
溝ＳＤ02(11～14・16～20)

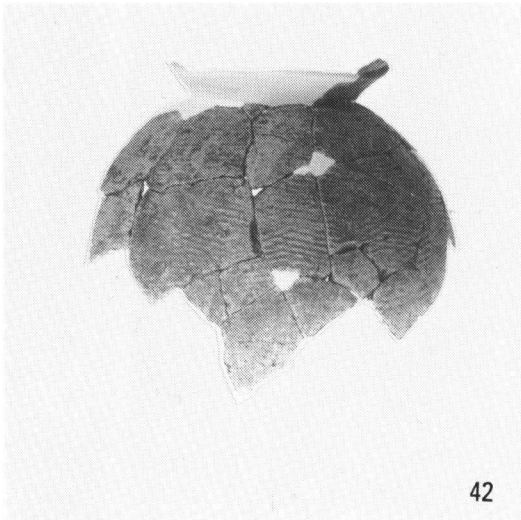




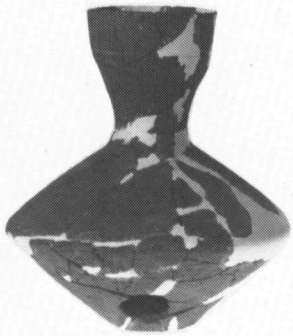
溝ＳＤ05　上層(30～32・35・47・49・50・53・55)



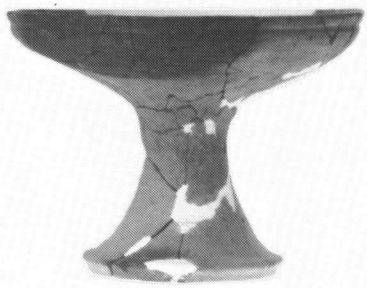




溝ＳＤ05上層(34・36・41・42)　Ｆ層(56・57)

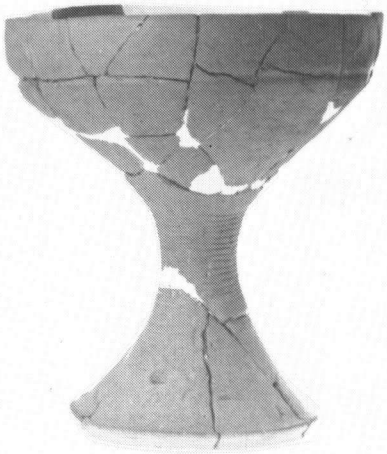


58



59

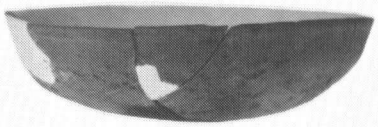
61



60

62

23



24

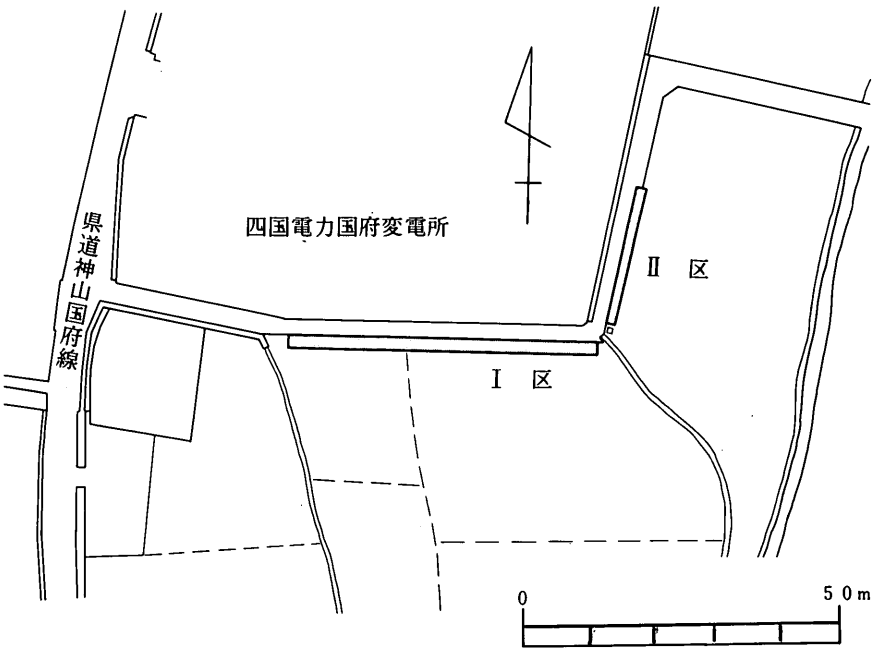
溝ＳＤ03(23・24)．方形周溝墓ＳＸ04(58～62)

第 Ⅳ 章

市道よつまた・せんだの木線改良工事に伴う矢野遺跡発掘調査概要

1．調査に至る経緯と経過

矢野遺跡は、多量の弥生土器の散布とその包含層が存在することで、昭和30年代よりすでに周知され、遺跡としての重要性が指摘されていた（註１）。昭和51年５月、四国電力国府変電所において鉄塔建設工事が行われる際、徳島県教育委員会文化課によって実施された第１次発掘調査（註２）を発端に、以後，数次にわたる調査が県教委文化課ならびに徳島市教育委員会によって行われてきた。調査はいずれも開発事業に伴う緊急発掘調査であり、調査地点は国府変電所内に集中した。これらの調査の結果、竪穴式住居跡をはじめとする遺構および遺物が多数検出され、調査が回を重ねるに従って、矢野遺跡が弥生時代中期～後期を中心年代にもつ集落遺跡であることが明らかになってきた。



第１図　調査区位置図

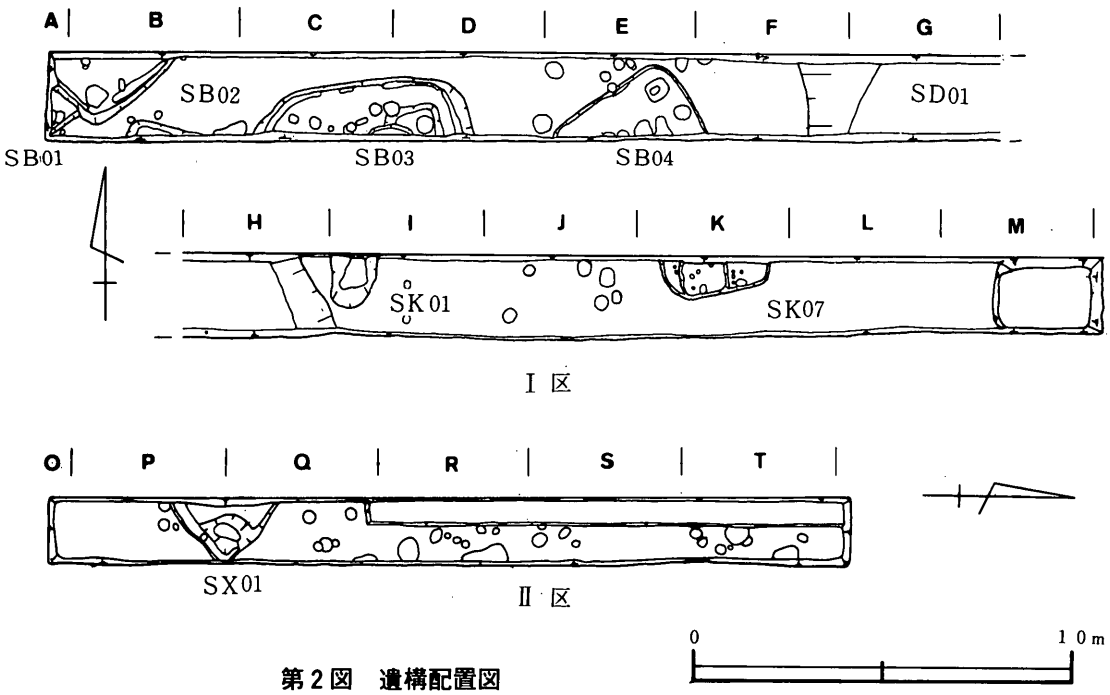
昭和62年度の徳島市の単独事業である市道よつまた・せんだの木線6581号改良工事に伴い、耕地課と市教委の協議において、矢野遺跡の重要性ならびに工事施行箇所が遺跡の中心部にあたる可能性があることなどから事前の発掘調査を実施することで合意に達した。

調査地は、矢野字よつまた555－1ほかの地先にあたり、国府変電所に南接および東接する位置にある。道路改良工事の概要は、幅員２ｍの農道を４ｍに拡幅するものであり、今回の調査対象箇所は全長で70ｍに及んだ。そのため調査区は、東西および南北に長く延びるトレンチ状の発掘調査となった（第１図・図版２・図版11）。調査にあたっては、便宜上、前者をＩ区、後者をII区と呼称した。Ｉ区は全長49ｍ、幅２ｍの98m²、II区は全長21ｍ、幅1.7ｍの35.7m²である。調査区内の区割は、調査区主軸に沿って４ｍ間隔に杭を打ち、Ｉ区は西から順にＡ区～Ｌ区、II区は南から順にＤ区～Ｓ区とした（第２図）。調査は、昭和63年１月11日の重機による表土掘削に始まり、矢野遺跡の一角を占める遺構を検出して同年２月29日に終了した。

２．調査の概要

１）基本層序（図版１）

調査地の現地目は水田および畑地であり、現地表面で標高 9.6ｍを測る。Ｉ区は東西49ｍに及ぶため、調査区内の層序もまちまちである。調査の終盤で、遺構面下まで数カ所の



第２図　遺構配置図

トレンチを抜いた結果、D区に設定したトレンチ壁面でみた層序が最も基本的と思われるため、以下それを概説する。

第1層：灰オリーブ色弱粘質土層。水田耕作土で層厚14cm。

第2層：にぶい黄色粘質土層。水田耕作土下層のマンガン堆積層である。層厚3cm。

第3層：にぶい黄色粘質土層。旧耕作土層で層厚15cm。A・B区のこの層中では近世陶磁器の出土が目立った。

第4層：にぶい黄色弱粘質土層。層厚10cmの遺物包含層である。土師器・弥生土器を包含する。

第5層：明黄褐色弱粘質土層。弥生時代～古墳時代の遺構面をもつ層で層厚25cm。

第6層：明黄褐色弱粘質土層。第5層よりやや砂質をおびる。層厚10cm。

第7層：黄褐色弱粘質土層。層厚15cm。無遺物層である。

第8層：黄褐色砂質シルト層。以下、この層が続く。無遺物層である。

2)検出遺構と出土遺物

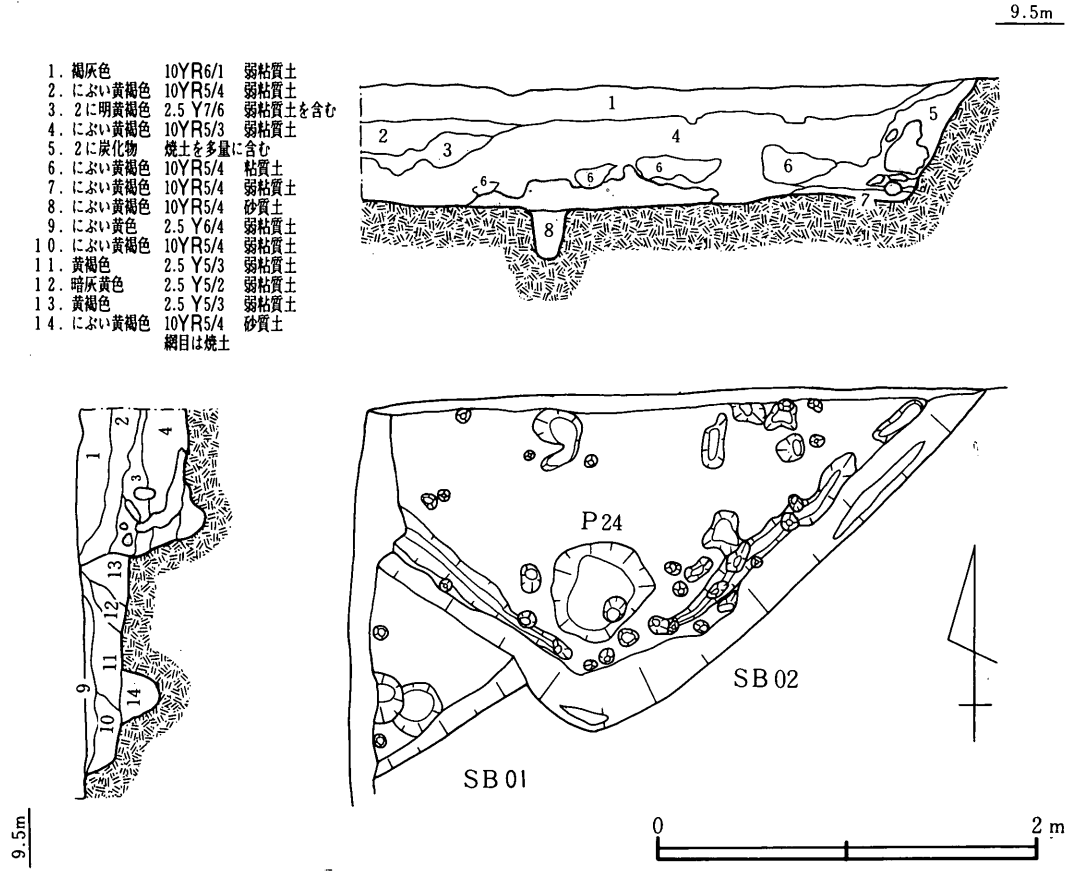
今回の調査で検出された遺構には、I区において竪穴式住居跡4棟、集石土壙1基、溝状遺構1状のほか、I・II区において土壙、ピット数基がある。以下、主な検出遺構と出土遺物について概要を述べる。

住居跡SB01（第3図：図版3）

I区西端のA区で検出された竪穴式住居跡である。遺構の大部分が調査区外に属し調査不可能であったこと、また、調査区内においても住居跡SB02に切られた状態にあり、全容の検出には至らなかった。従って、規模・形態は不明あるが、　形態に関しては、検出された掘形ラインが直線を呈することから、隅丸方形かあるいは方形の住居跡と考えられる。住居跡の埋土は6層に大別されるが、土層断面で見る限りでは安定した堆積状態はみられない。遺物は、後述する住居跡SB03出土の甕と同タイプと思われるものの胴部破片がごく少量出土したにすぎない。

住居跡SB02（第3図：図版3）

A・B区で検出された隅丸方形の竪穴式住居跡で、SB01を切って構築されたものである。本住居跡も調査区外に残され部分が多いため規模は不明であるが、壁コーナー際の床面で検出された主柱穴と考えられるピット（Pit24）の規模からみて、少なくとも後述のSB03と同程度の規模をもつものと思われる。壁は約60度の傾斜で立ち上がり壁高74cmを測る比較的遺存状態の良い住居跡である。床面壁沿いには最大幅18cm、深さ5～10cmの周溝

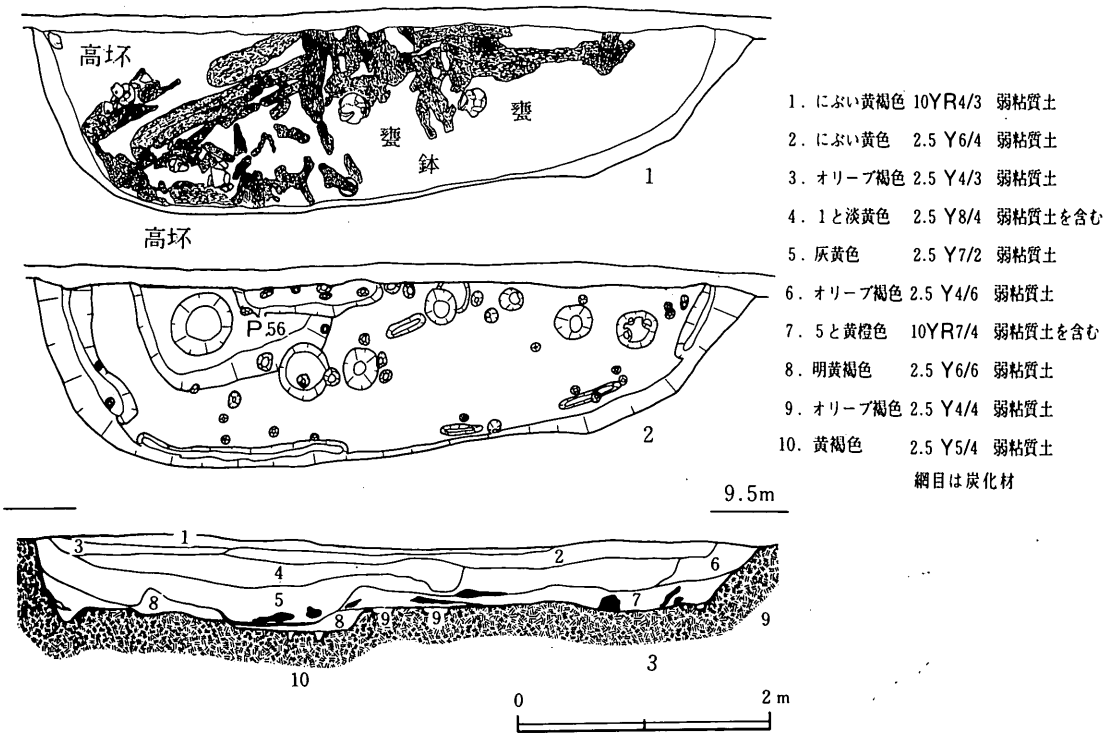


第3図　SB01・SB02 実測図

が検出された。この周溝は、住居跡を一巡するものかどうかは不明であるが、Pit24際の壁コーナー部分では明らかに途切れた状態を示す。住居跡内の埋土は、1層～4層が比較的安定した堆積状態を示しており、床面および壁面付近では、4層および5層中にブロック状の混入土が看取される。4層以下では炭化物と焼土粒の混入が目立ち、特に、床面直上において顕著となる。また、床面で炭化木材の断片が検出され、焼失家屋の可能性が強い。出土遺物はいずれも個体復原には及ばない土器の細片に限定され、層単位での寡多はなくほぼ均等な出土状態をみた。土器片は千点以上にのぼるが、約7割が甕の破片でＳＢ03出土の甕と同タイプに層するものである。ちなみに、これらの甕の破片の中に口縁部はほとんど認められない。

住居跡ＳＢ03（第4・5図：図版4～6・7・13）

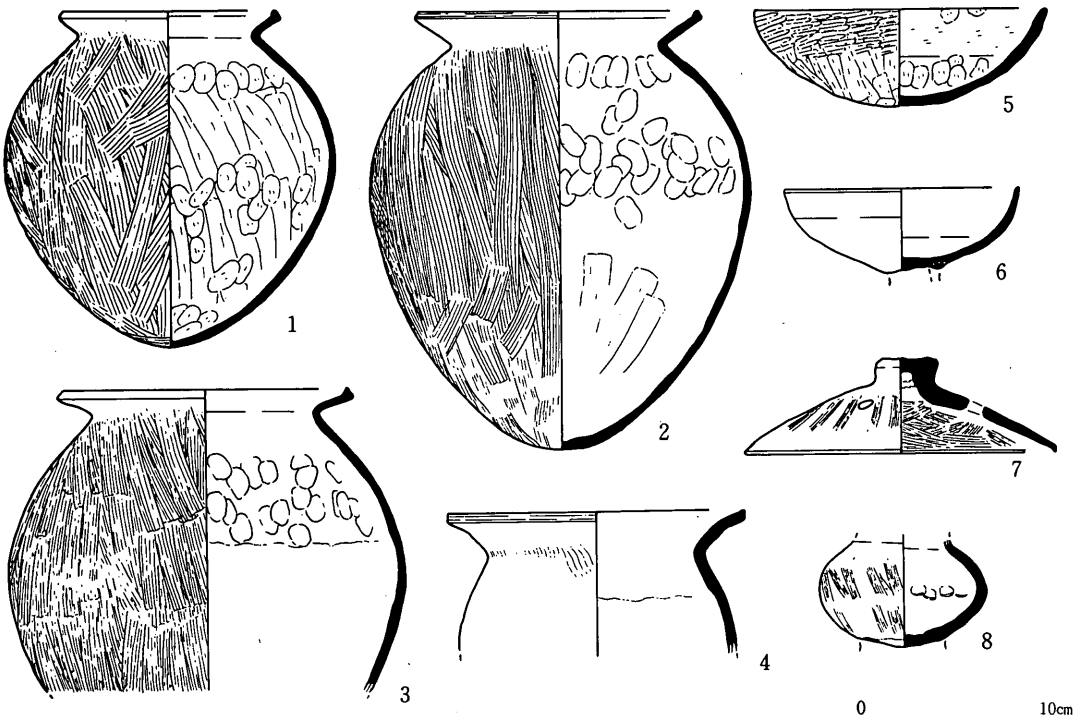
Ｃ・Ｄ区に位置する隅丸方形の竪穴式住居跡で、検出された部分は全体の北側約3分の1にすぎない。北西コーナー部はゆるやかに大きくカーブを描き、一見隅丸方形住居とは思い難い様相を示すが北東コーナー部は隅丸の状態を明瞭に表わしており、一辺約6ｍの隅



第4図　SB03実測図

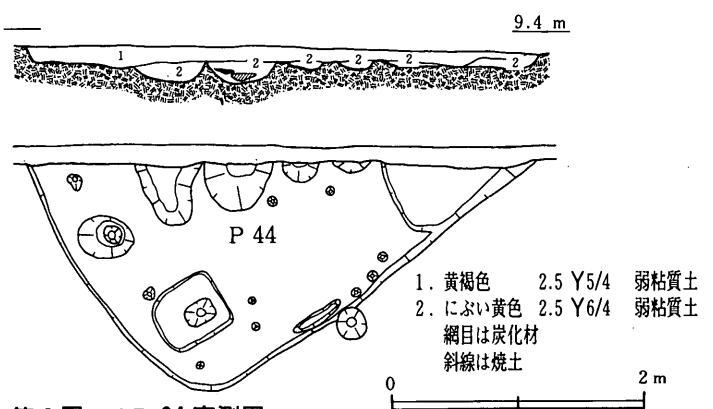
丸方形住居跡と想定される。壁高50～60cmを測る比較的遺存状態の良い住居跡で、床面壁沿いには断片的ではあるが周溝が検出された。床面には柱穴のほかに直径5～10cmの小穴が多数検出され、また中央やや東寄りの位置に炉跡が確認された。埋土は8層に大別され、5層以下において炭化木材が多量に検出された。これらの炭化材は倒れ重なった状態が一部窺われ、本住居が火災にあった際の柱のなれのはてと見受けられる。焼失家屋の良好な検出例といえよう。

出土遺物には、甕(1～4)、鉢(5)、高坏(6・7)、脚付小形壺(8)などがある。中でも、甕(1・3)、鉢、高坏7など各種数点は、床面直上付近で炭化木材の下敷になった状態で検出されており、火災直前までの生活を彷彿させる。甕 1 は、球形に近い体部に「く」の字状に外反する口縁部をもち、端部をつまみあげる。体部外面はハケ調整、内面は下部・上部2段階のヘラ削りを施す。甕 2 は、倒卵形の体部をもち、かすかに平底を呈する。底部から頸部にかけて一気にハケ調整を施している。内面は下半分にヘラ削りを施し、上半分は指



第5図　SB03出土土器実測図

頭圧痕が顕著である。甕3は体部外面に上・中・下の3段階のハケ調整を施す。内面は上部に指頭圧痕を残すが、ヘラ削り等の調整は見られない。甕4は、やや胴長の小形の甕で、ゆるやかに外反する口縁をもち、口縁先端はさらに外反する。先端部は角張り、かすかにつまみあげている。頸部外面にハケ調整の痕跡をかすかにとどめている。内面は口縁部にナデの痕跡が残るにとどまる。鉢5は、丸底で体部は内彎ぎみに立ち上がる。体部外面は、ヘラ削りのあと上半分にタタキを施している。内面は底部に指頭圧痕が顕著であり、上半分はナデ調整による。高坏6は脚部を欠く。体部は内彎ぎみに立ち上がり、椀形を呈する。調整は内外面ともナデのみである。高坏7は、ソケット式の高坏の脚部で4孔をうがつ。末端部はやや内向ぎみにつまみ出している。調整は内



第6図　SB 04 実測図

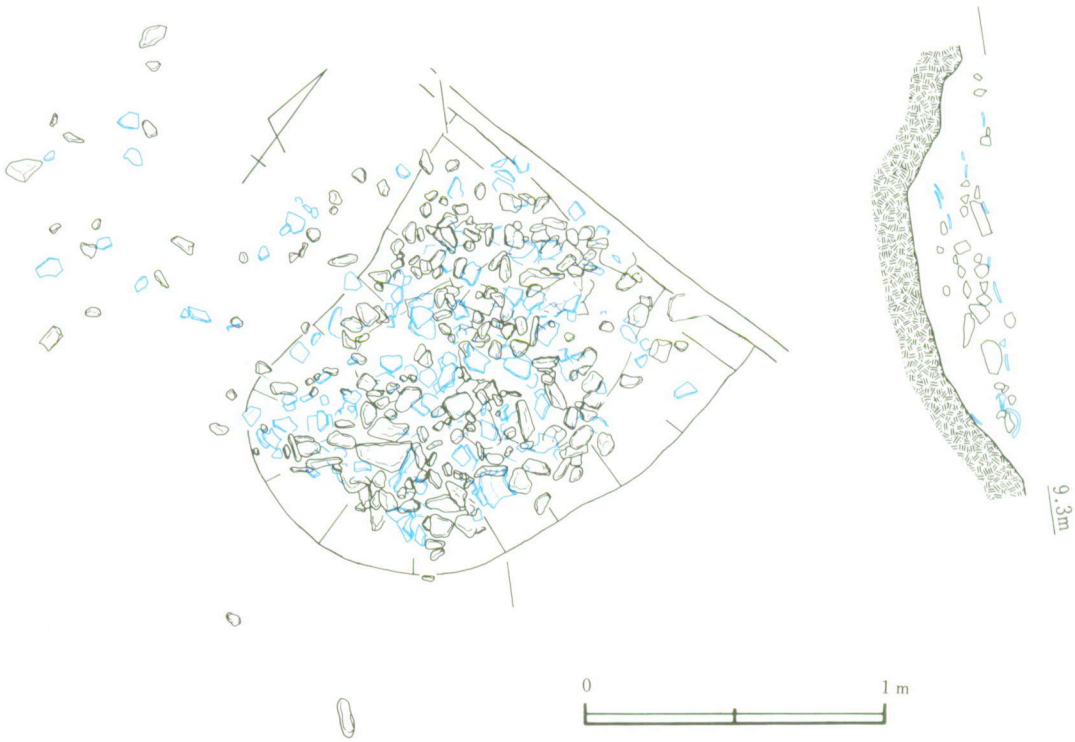
外面ともにハケ調整で、外面は等間隔で放射線状に、内面は多方向に顕著に施す。脚付小形壺８は、やや偏平な球形の体部をもち、脚部、口縁部を欠く。外面にハケ調整をわずかにとどめる。

住居跡ＳＢ04（第６図：図版７）

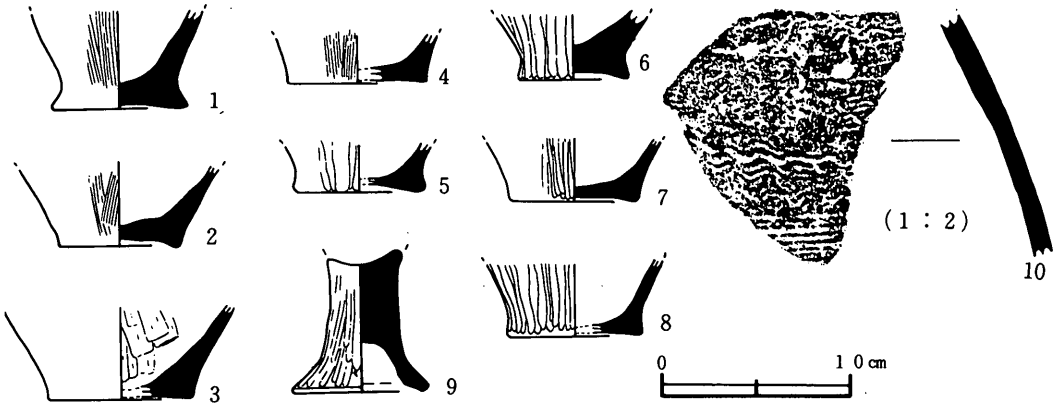
Ｅ・Ｆ区で検出された隅丸方形住居跡である。検出時の壁高は、わずか15cmを残すのみで、後世の削平を受けたものと見られる。床面中央部に土壙状の浅い落ち込みが４カ所検出された。Pit44は埋土中に炭化材、焼土を含み炉址とも考えられる。周溝は明確に検出されなかった。遺物は埋土中より土師器片が若干出土したにすぎない。

土壙ＳＫ01（第７・８図：図版８）

Ｉ区で検出された土壙で、南北に主軸をもついびつな楕円形を呈する。短径約 1.2m、深さ25cmを測り、長径は不明である。遺構はゆるやかな傾斜をもつ浅い掘り込みで、西側では段状に落ち込む。底部はフラットな面を形成する。埋土は３層に分層され、上層より１．灰褐色弱粘質土、２．黒褐色弱粘質土、３．にぶい黄色弱粘質土となり炭化物を少量含む。埋土上層、特に１層中には弥生土器片を混入して多量の河原石が人為的に集石する。石材は硅岩の自然礫が主流を成し、砂岩･緑色片岩をまばらに含む。出土遺物は弥生土器の



第７図　SK 01実測図

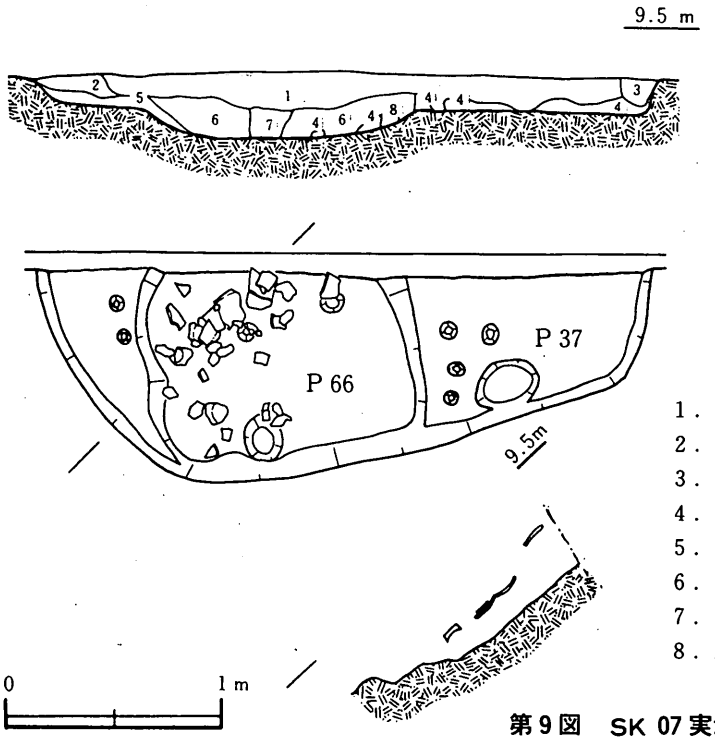


第8図　SK01出土土器実測図・拓本

破片に限定される。1～8は壺あるいは甕の底部である。本土壙出土遺物は壺・甕の底部が主流を占め、少量の胴部、口縁部も出土したが接合不可能であった。これらの土器には、体部外面の調整がハケ調整とヘラ磨きによるものがあり、内面はヘラ削りを施すものが若干認められる（3）が、ほとんどはナデ調整のみによるものである。胎土は多くが赤褐色を呈し、胎土中には硅岩粒を多量に含んでいる。10は壺胴部の破片であり、櫛描直線文と櫛描波状文を交互に併用している。中期前半の所産である。9は高坏の脚部で、末端部への広がりが抑制された形態を示す。外面ヘラ磨きが施されている。

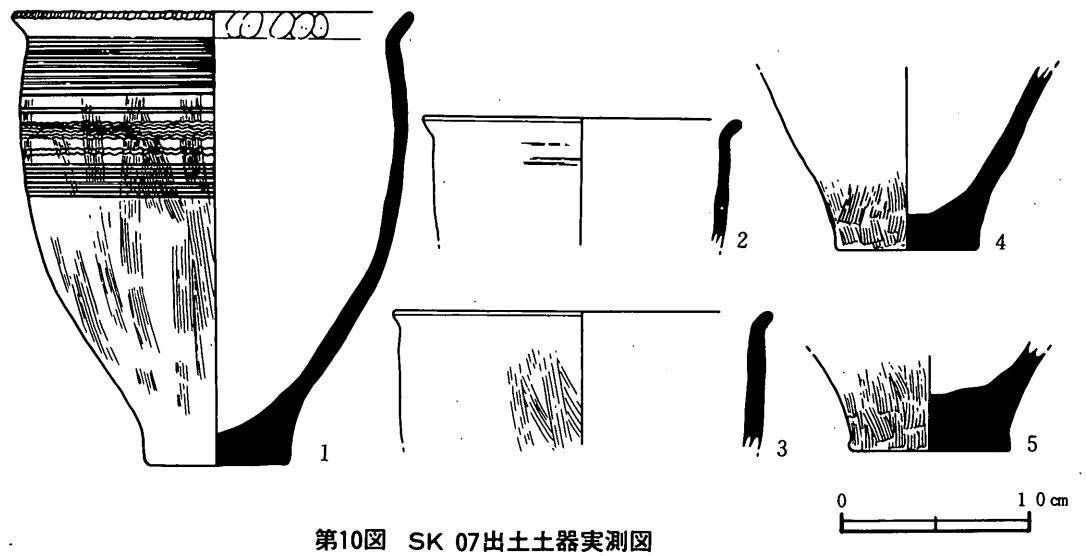
土壙ＳＫ07（第9・10図：図版9・10・14）

Ｋ区に位置する東西径約2.8mの大形の土壙である。完掘状態をみると、その平面プラン、検出されたピット（Pit66・Pit37）の位置から、あたかも竪穴式住居跡を思わせるが、全体の規模の小ささ、ピットの浅さなどから住居跡と考えるのには無理がある。遺構は段状に浅い掘形を示し、東西両側に広いフラットな面をもつ。埋土は8層に分層され、下層部は全体的にやや砂質味をおびる。遺物は1層下層から6・7層上層にかけて集中的に出土した。全て甕である。甕1は、器高23.5cm、口径21cmを測る。如意状口縁をもち先端部にヘラ状工具による刻み目を施す。体部外面は縦方向のハケ調整の後、口縁部直下に幅3cmにおよぶ13条の櫛描直線文を施し、さらに下部には6条、2条の櫛描波状文を施した後、再び8条の櫛描直線文を施している。内面は縦方向のナデ調整がなされ、口縁部に指頭圧痕を残す。2・3も如意状口縁をもつ甕である。胴部上半から口縁部に至るラインは、1に比べて直線的である。2は体部外面にかすかな櫛描直線文の痕跡をとどめ、3は縦方向のハケ調整のみである。ともに内面はナデ調整で、口縁先端部に刻み目は施されていない。



1．10YR4/6　褐色弱粘質土
2．2.5Y 5/2　暗灰黄色弱粘質土
3．10YR　暗褐色弱粘質土
4．2.5Y 6/6　明黄褐色砂質土
5．10YR5/4　にぶい黄褐色弱粘質土
6．10YR5/6　黄褐色弱粘質土
7．10YR4/4　褐色弱粘質土
8．10YR4/4　褐色砂質土

第9図　SK 07 実測図

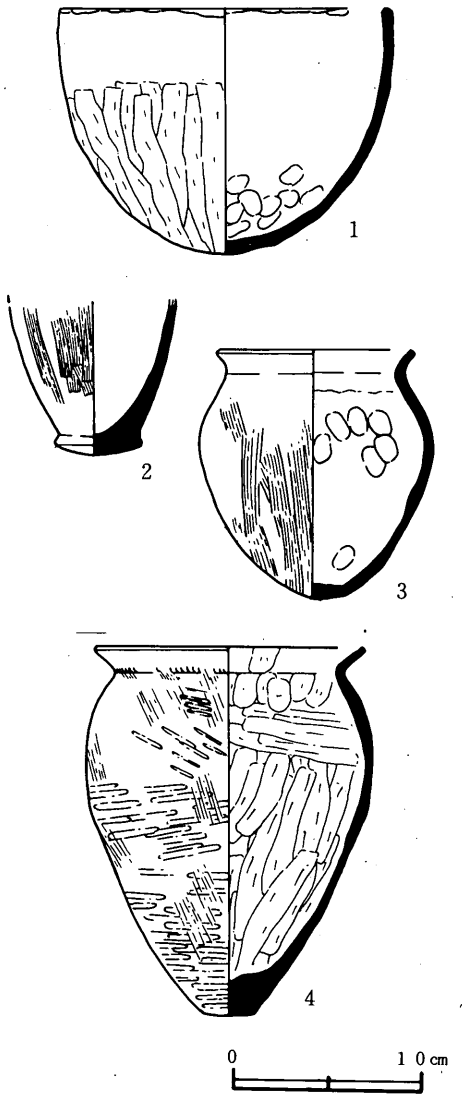


第10図　SK 07出土土器実測図

溝状遺構ＳＤ01（図版11）

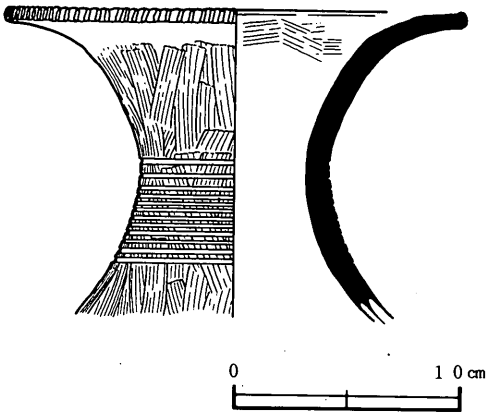
調査区に直行してＦ・Ｇ・Ｈ区を南北方向に横切る溝である。検出部分で最大幅9.1ｍ、深さ0.8ｍを測る。東岸側はゆるやかに落ち込むが、西岸側は段をもったあと急激に落ち込む。底部はフラットで溝断面は弓状を呈する。埋土は上層より、１．暗褐色弱粘質土、２．赤褐色弱粘質土、３．褐色砂質土の安定した３層に大別され、西岸立ち上がり部分で

は３層以下に数種類の埋土が不安定に堆積する。最下層部は砂質槌の堆積がみられ、本遺構が自然河道である可能性も考えられる。遺物は１・２層および東岸際３層上層部に集中的な出土をみたが、出土数は決して多くない。１層中からは前（？）・中期の土器片が数点検出されたが、溝本来の遺物とは考え難い。１は、底の深い半球形の丸底の鉢である。体部外面は下部３分の２に入念なヘラ削りが施されており、その痕跡より鉄製のヘラ状工具を用いた可能性も考えられる。内面は底部に指頭圧痕を顕著にとどめるが、ヘラ削り等の痕跡は認められない。形はやや粗雑な作りで、口縁端部には指頭圧痕を明瞭に残す。２は体部の立ち上がりが急峻で細身な小形の鉢である。底部は体部形成後に粘土を貼りつけて作り出しており、やや偏平な丸底である。外面は縦方向のハケ調整を施す。内面はナデのみである。３は、丸底をもつ小形の甕で口縁部がゆるやかに外反し、口縁先端部はやや角張った状態のまま終わる。体部外面は縦方向のハケ調整であり、内面はナデ調整痕と指頭圧痕を残すのみである。４は，やや胴長の甕である。「く」の字状に外反し直線的にのびる口縁をもち、端部をかすかにつまみ上げている。底部は平底を残している。体部外面は、下半分を中心に横方向のタタキ調整を施した後、斜め縦方向のハケ調整を行った痕跡が認められる。内面は、底部から縦方向のヘラ削りを顕著に施し、上部に至っては横方向のヘラ削りを加えている。口縁部直下内面には指押さえを施している。胎土は、赤褐色を呈し堅緻に仕上がっている。



第11図　SD01 出土土器実測図

以上がＩ区におけるおもな検出遺構とそれに伴う出土遺物の概要であるが、その他に検出された土壙・ピットはいずれも土器の小片をわずかに含むかあるいは無遺物の遺構である。



第12図　包含層出土土器実測図

II区については、検出された遺構は前述のとおり土壙・ピットに限定される。いずれも遺物の出土量は乏しく、遺構・遺物に関して特筆する事項がないというのが実情である。ただ、P・Q区で検出された方形プランを呈すると思われる深さ約40cmのいびつな落ち込み（SX01）からは、弥生時代後期の鉢口縁部が出土している。本調査区の遺構検出面となる層は、砂利を若干混入し下層で砂質をおびるが、遺構検出のレベルはI区とほぼ同位置にあり、基本的には同一層序にあたる。

3．小　結

矢野遺跡は、弥生時代前期～歴史時代に至る複合集落遺跡であるが、国府変電所を中心にこれまでに行われた調査の結果では、弥生時代中期～後期がその中心年代とされている。今回の調査は、比較的少面積の発掘調査にもかかわらず、古墳時代初頭の土器を出土する住居跡が4軒検出され（I区）、当該期の集落の一端が明らかにされたことになる。当該期の住居跡は、I区中央部を南北に縦断するSD01以東においては検出されておらず、南西方向への集落の広がりが予想され、今後の調査が進むにつれて、中期～後期の集落の中心部と古墳時代初頭の集落の中心部の位置関係が明らかにされよう。

弥生時代中期の遺構としては、遺物の出土量に乏しいが、SK01・SK07が掲げられる。SK07は甕のみを出土した土壙で、中期前半の様相を示す甕（第7図－1）が出土している。弥生時代前期に関しては、県教委文化課による第3次調査での前期前半の遺物の出土例が報告されているが（註3）、遺構の検出については報告をみない。今回の調査においても、I区東端のL区において一部前期の包含層が確認され、前期後半に比定される遺物の出土をみたが（第12図：図版14）、遺構の検出には至らなかった。出土土器は頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反する形態を示す壺の口縁部で、頸部に12条のヘラ描沈線文をもつ。今後の調査で、前期前半にまで遡る遺構が検出される可能性は十分にあると思われる。

近年、国府変電所の北北東約 500mに位置する国府養護学校地区（図版1）において、県教委文化課による発掘調査が進められ、住居跡をはじめとする弥生時代中期後半頃の遺

構が検出されている（矢野松木遺跡）。東西２つの地区が同一集落に属するのかどうかという問題も含めて、矢野遺跡の東方への広がりを確認することも今後の調査に与えられる課題のひとつである。

（註）

註１．徳島県教育委員会『徳島県遺跡目録』、徳島、1963年。

註２．徳島県教育委員会『徳島県文化財調査概報』、徳島、1976年。

註３．註２に同。

註４．徳島県教育委員会『矢野遺跡　国府養護学校地区　現地説明会資料』徳島、1984年。

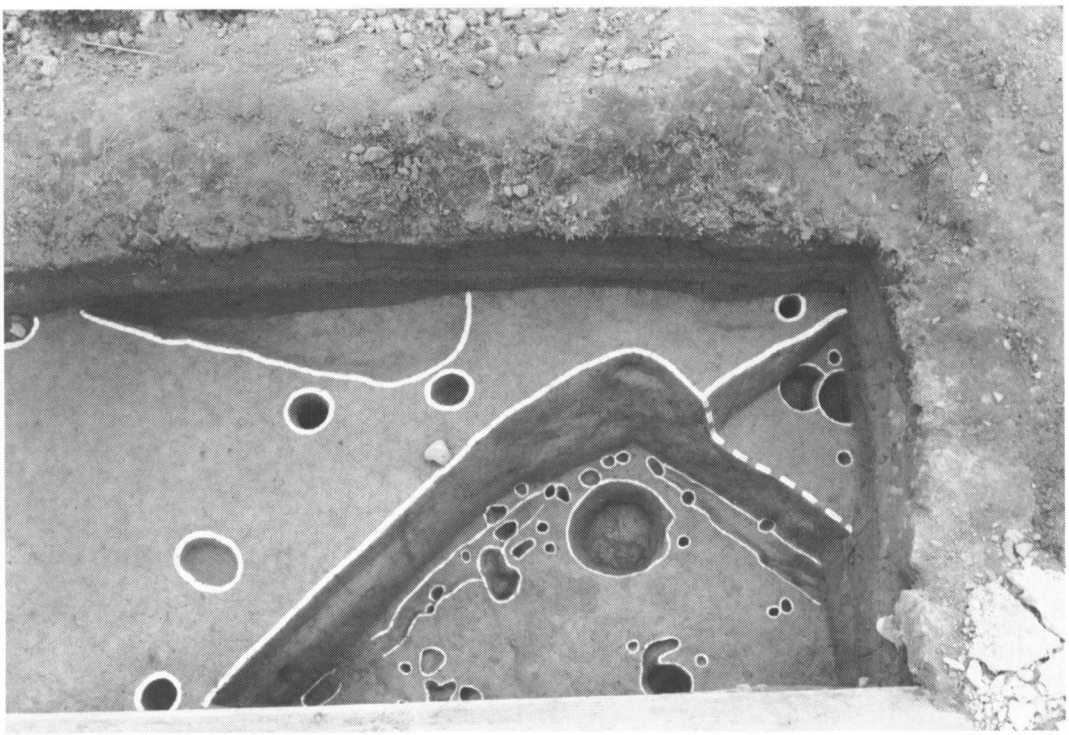
調査地点遠景（後方３階建物が国府養護学校）　（西より）

層序（Ｄ区トレンチ南壁）

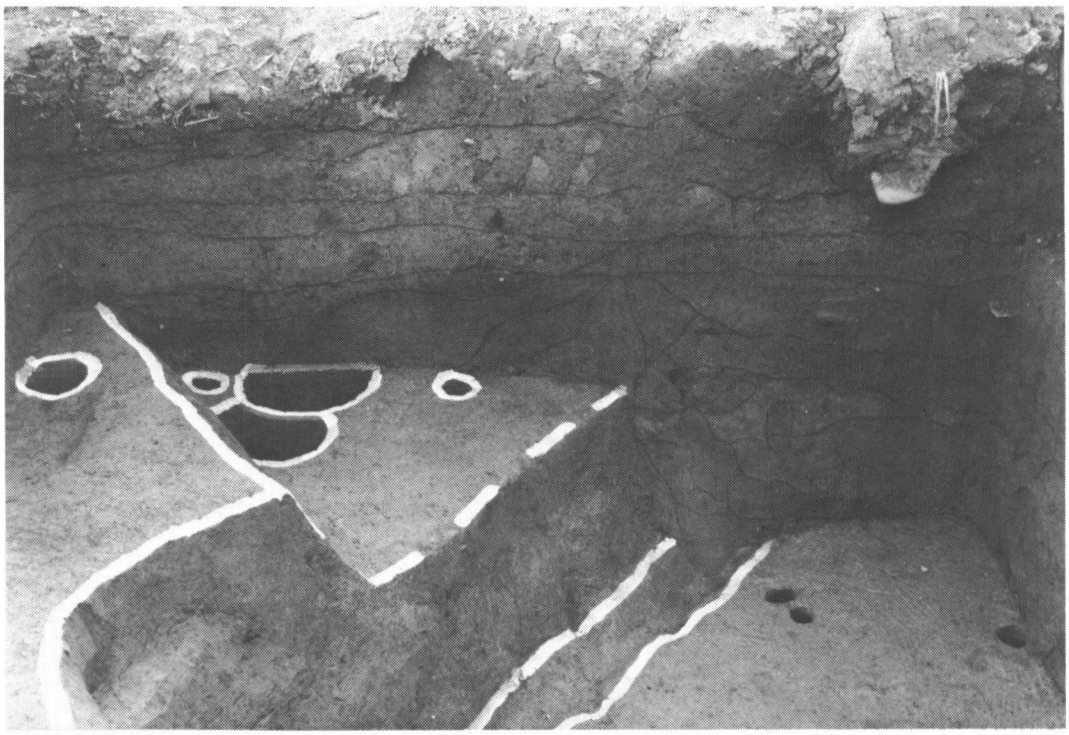
図版2　検出遺構

Ⅰ区全景　（西より）

Ⅰ区全景　（東より）



SB01，SB02　検出状況



SB01，SB02　埋土土層断面

ＳＢ03　炭化材検出状況

同上（東より）